小説　真夏の空席

Nagi.rekka

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ー全２３話（全話挿絵有）　毎日０時頃に１話ずつ更新予定です（Ｅｐｉｌｏｇは終話と同時公開）ー

これは、創作する〝あなた〟に送る物語。

作りはじめた、作り続けたあなたに送る

彼女と彼の物語。

美大受験を控えながら学科の成績が伸び悩んでいた高校生《神谷朱鷺子》は、塾に通う為内緒でアルバイトをしていた。その帰りの夜道で事件に巻き込まれかけた彼女を救ったのは、ひとりの青年だった。

名を言わぬ青年にふと家庭教師の依頼を持ちかけた事から、彼女の、そして彼の日々は大きく変化してゆく。
絵を描くとは何か、表現するとは何か、作品を作るとは何か。
高校最後の夏、ふたりはそれぞれの課題を胸に悩み葛藤しながらも、やがて自分の答えを導き出していく。
これは描く事に向き合い続けた彼女と、目標を見失い答えを探し続けた彼の物語。
そして、あなたに送る物語。
もしもあなたが彼女なら
そして彼だったなら
どんな答えを出しますか？

本作は音楽作家チームＥＬＥＣＴＲＯＣＵＴＩＣＡ様制作の楽曲「真夏の空席」、及び同作者様の自主制作ゲームプロジェクト「ＣＹＧＮＵＳ．ＣＣ」を原作とする二次創作小説となります。
原作をご存知ない方も楽しめる内容にしております。
原作設定及び楽曲「真夏の空席」が公式ＨＰにて公開されておりますので、ご視聴いただければよりお楽しみいただけるものと思います。

真夏の空席　公式ページ
ｈｔｔｐ：／／ｃｙｇｎｕｓ－ｃｃ．ｃｏｍ／ｍａｎａｔｓｕ－ｎｏ－ｋｕｓｅｋｉ／
ｈｔｔｐ：／／ｃｙｇｎｕｓ－ｃｃ．ｃｏｍ／ｐｒｏｄｕｃｔ／ｌｅｃｒｉｎ－ｓａｐｈｉｒ／
ＣＹＧＮＵＳ．ＣＣ　公式ページ
ｈｔｔｐ：／／ｃｙｇｎｕｓ－ｃｃ．ｃｏｍ
ＥＬＥＣＴＲＯＣＵＴＩＣＡ　公式ページ
ｈｔｔｐ：／／ｅｌｅｃｔｒｏｃｕｔｉｃａ．ｃｏｍ／
また、二次創作ガイドライン（ｈｔｔｐ：／／ｅｌｅｃｔｒｏｃｕｔｉｃａ．ｃｏｍ／ｇｕｉｄｅｌｉｎｅ／）に基づき、改変箇所を下記の通り掲載させていただきます。
・原作に無いエピソード及び結末の創作
・原作に無い登場人物の創作
・原作設定中に無い人物設定及び性格の追加
・原作歌詞及び設定の部分的な曲解
可能な限り原作の設定に沿うよう努めておりますが、小説化に伴い、上記の通り意図的に改変した箇所がございます。曲解・誤解している部分もあるかもしれませんが、何

卒寛容な目でお読みいただけますようお願い申し上げます。
※本作はｐｉｘｉｖとのマルチ投稿となります。

目次

小説　真夏の空席　prologue.　―――― 1
I ―Kouichirou Phase
小説　真夏の空席　prologue.　―――― 6
II ―Tokiko Phase―
小説　真夏の空席　Episode. I　―――― 10
―Tokiko Phase―
小説　真夏の空席　Episode. II　―――― 20
―Tokiko Phase―
小説　真夏の空席　Episode. III　―――― 33
―Kouichirou Phase―
小説　真夏の空席　Episode. IV　―――― 42
―Kouichirou Phase―
小説　真夏の空席　Episode. V　―――― 52
―Tokiko Phase―
小説　真夏の空席　Episode. VI　―――― 63
―Tokiko Phase―
小説　真夏の空席　Episode. VII　―――― 76
―Kouichirou Phase―
小説　真夏の空席　Episode. VIII
―Kouichirou Phase

小説　真夏の空席　Episode.Ⅸ　94
—Kouichirou Phase—　103
小説　真夏の空席　Episode.Ⅹ　114
—Tokiko Phase—　127
小説　真夏の空席　Episode.Ⅺ
—Tokiko Phase—　134
小説　真夏の空席　Episode.Ⅻ
—Tokiko Phase—　141
小説　真夏の空席　Episode.Ⅹ　150
—Kouichirou Phase—　156
小説　真夏の空席　Episode.Ⅹ　171
—Kouichirou Phase—
小説　真夏の空席　Episode.Ⅹ
—Kouichirou Phase—
小説　真夏の空席　Episode.Ⅹ
—Kouichirou Phase—
小説　真夏の空席　Episode.Ⅹ

VII ―Tokiko Phase― 178
小説 真夏の空席 Episode.X VIII ―Tokiko Phase― 188
小説 真夏の空席 Episode.X IX ―Kouichirou Phase― 195
小説 真夏の空席 Epilog.I ―Kouichirou Phase― 204
小説 真夏の空席 Epilog.II ―Tokiko Phase―

小説　真夏の空席　ｐｒｏｌｏｇｕｅ．Ｉ―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

〝航一郎、君は〝
――僕は
〝考えねばならない〝
見つけられるだろか。
〝君自身の〝
僕自身の
〝課題を〝
答えを――

「――っ」

白い光が、視界を満たした。

閉じていた目は、眩しさに萎縮する。ゆっくりと、まぶたを開ける。

同時に、低い駆動音と小さな飛行音が聞こえてくる。ぼやけた視界が整うにつれ、ここが飛行機の中だった事を思い出す。

側面にある楕円形の窓からは、雲の海と水平線が見えていた。そしてその先の空には、どこまでも澄んだ青が広がっている。もう、雲の中を抜けたのだと分かった。

段々と、加速度的に思考が覚めていく。記憶が蘇る。

日本行きの飛行機に乗った事、むこうでは雨が降っていた事、搭乗して間もなく眠ってしまった事。

時計を見ると、もうアジア圏まで来ている時間だった。7時間は眠っていた事になる。ぬるくなってしまったコーヒーを、少し飲む。

思考は完全に覚めた。そして対照的に、さっきまで見ていたはずの夢は思い出せなくなっていた。

けれど、強い印象だけは残っている。それはきっと、あの時の会話をまた夢に見たか

らだ。もう何度も見慣れているはずなのに、印象だけは目覚めの時に強く、衝撃のように身体に残ってしまう。

あの会話が、すべてのはじまりだった。

僕がここにいる理由。大学を休学し、国際線の飛行機に乗り、そしてわざわざ日本へと向かう事になったきっかけ。

〝航一郎、君は考えねばならない。君自身の課題を〟

あまりにも単純なその言葉に、返す答えを僕はまだ見つけられずにいる。むしろ単純であるがゆえに、その難題が僕を悩ませた。

僕は、見つけられるのだろうか。この飛行機の向かう先で、日本で、まだ見ぬこれからの日々の中で――答えを。

白状すれば、今日までずっと行き詰まっていた。だから少し休みたいという気持ちが、正直あった。

こんなにも手掛かりなく、手立ても思いつかない事なんて今までになかった。

進展もなく同じ場所をぐるぐるとまわる、脱出する糸口を見つけられない日々が続いていた。向き合う課題が答えのあるものならばひたすら挑めばいいし、ペース配分や目処もつく、スケジュールも立てられる。けれど、今目の前にあるこの課題は違った。

もう少し考えれば、あっさり答えが出るかもしれない。あるいはもっともっと先まで

考えないと分からないかもしれない。どんなに遠くてもゴールが見えているものとは、本質的に違う。

近くにあるのかも遠くにあるのかも分からない。たとえ見つけたとしても、それが本物か分からない。暗中模索、としか言い様がない。

自分の事なのにという苛立ち、焦り、このまま答えが出せなかったらという不安。

これがミレニアム問題のような世界的難問ならまだ諦められる。けれど自分自身にとっての課題だと分かっている以上、諦める事が出来なかった。

人から見れば、大人になりきれないからこんな事に悩んでいるんだと言われるかも知れない。普通はそんなことを、いちいち悩みはしないと。

けれど、僕は気づいてしまっていた。

知ってしまった以上、もうこの課題を僕は無視する事が出来ないという事を。

「――ふっ」

そこまで考えて、小さなため息をついた。

今日までこんな風に、あれこれと考え続けてきた。けれど答えは出なかった。いや、答えにたどり着く為の方法さえ満足に思い浮かばなかった。しばらく考えるのをやめよう、そう思ってはいるのに気を許すとまた考えてしまう。ふとコーヒーを持ったままだったと気づき、ドリンクホルダーに置いた。

目線をまた、窓の向こうに向けてみる。

そこには相変わらず、美しい青空が広がっていた。まるで切り取られた絵のように、鮮やかなグラデーションが水平線から空に向かって続いている。

自分の心境とあまりにかけ離れた、澄み渡った空。その対比、コントラストに思わず苦笑してしまう。

日本に行けば、こんな風に晴れやかな気分になれるのだろうか。近づけるのだろうか。今はまだ見えないこの先に、こんな風に卑屈にならず、青空を眺める事が出来る日が来るのだろうか。

僕の憂鬱などまるで知らずに、飛行機は淡々と飛び続けた。

起きがけにこんな事を考えたせいか、少し疲れてしまい到着するまでもう少し眠る事にした。

まぶたを閉じ、緊張した思考を鎮めていく。目覚めたら何か思いつくんじゃないかという淡い期待を胸に、僕は静かな眠りについた。

小説　真夏の空席　ｐｒｏｌｏｇｕｅ．Ⅱ―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

――目指す場所も、欲しいものも分かっている。
けれど、行き方が分からない。
遠くに輝く星のように、輝きだけがはっきりと私を魅了し続ける。
魅了されている自分だけが確かに、絶対に、ここにいる。

〔ＩＭＧ６７３６１〕
午後の教室は、白い光で満ちていた。
梅雨が明けた途端、窓から見える景色は一気に夏の色で染まった。カレンダーを見ればもう嫌でも夏休みを意識してしまう。
同級生達の顔には休みへの期待と共に、どこか緊張感が漂うようになっていた。そしてその原因は、皆ほとんど一致していた。
受験。

もちろん全員が受ける訳じゃない、けれど昔も今も受験に頭を悩ませる高校生は一定数存在していて、私もまたその一人だった。ただ、私の受験は人とは少し違っていた。

美大。

それが私の第一志望だった。もちろん一本に絞る訳じゃない。けれど、他に受けるのは別の大学。それは美大ではない別の道。

経済的に私大は受けられない。だから――

「えー、クーロンの法則とは、電荷に働く力を示します。分子にはこのように比例係数と二つの電荷を置きますが、では分母には何を置くか。神谷さん、分かりますか」

「距離です。距離の二乗です」

「正解です。さて、この式を使って例題を解いてみましょう。まず――」

だからこそ、私は落ちるわけには行かない。

授業態度も内申点も維持してきた、学校のテストならそこそこの点も取れていた。それなのに・・・・・・模試の結果は、いつも今ひとつだった。

美術予備校には通っているし評価も悪くはなかったけれど、準備の遅れた私が絵の力だけで合格できる自信は、正直なかった。

だから、学科配点の高い美大を狙うことにした。学校の成績は今まで決して悪くなかった、だからこそその方針に切り替えた。それなのに・・・・・・。

今までの成績は〝学校の中〟でしか通じないものだったと思い知らされた。そこからは必死に〝模試でも通じる勉強〟に切り替えたけれど、自力ではそもそも学校のそれと何が違うのか、どうすればいいのかも分からなかった。

悩んでいる時間さえない私は、学費を稼いで塾に通う事を選んだ。両親には、言い出せなかった。

反対さえせず美術予備校通いもあっさり許可してくれた。けれど、経済事情は分かっていた。これ以上無理は言えなかった。

だから、年齢をごまかしてバイトをはじめた。

お金を貯めて塾に行けば、きっと模試の結果は変わる。そう信じて、夜になるとバイトに出かけるようになった。両親には、美術予備校に通うと伝えて。

最近はようやく目標金額に近づいてきた。このまま行けば、来月には塾に通いはじめる事が出来る。ただ、私には安堵より別の考えが頭に浮かび始めていた。

〝・・・・・・本当に、本当に塾に通ったら効果があるのだろうか〟

必死にお金を貯めている間は、通う事が目的だったからあまり考えなかった。いや、考えないようにさえしていた。通いさえすれば、すべて解決すると思って。

けれど今、塾そのものに暗い可能性を考えてしまう。もし、もしもそうだったら、私は・・・・・・・。

チャイムが鳴り、今日の授業が終わる。
いつものように帰る準備をしていると、後ろから声がした。
「朱鷺子、放課後どーする？」
「ごめん。今日もバイトだから」
「そっかぁ残念。じゃ、頑張ってね」
「うん。受験終わったら、絶対卒業旅行するから」
軽く手を振り、教室を出た。
誘ってくれるのは嬉しいし、断るのは申し訳なかった。もう随分、みんなと遊んでいない。
けれど、やるべき事は目の前にずっと残っている。今は、とにかくやるしかない。
「――よしっ、行こう」
塾に行って、勉強して、本当に成果が出るかなんて分からない。
それでも、迷ってたって始まらない。選択肢なんてない。出来る事を、出来る限りやるしかない、今は。大好きな絵を勉強するために。もっと描ける為の力を手に入れるために。
自分にそう言い聞かせて、長い廊下を早足で歩いた。急がなければ、目指す場所が遠ざかってしまうような気がして。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ｉ―Ｔｏｋｉｋｏ Ｐｈａｓｅ―

「・・・・・・やはりここの音楽はいいね。音がいい、曲もいい」
「ありがとうございます」
　私はお礼を言いつつ、カウンター越しにグラスを渡した。
「こういう雰囲気の店で、酒と音楽を楽しめる。週末まで働いた甲斐があるというものだよ」
「そう言っていただけると何よりです。と言っても、私はただのバイトですけど」
　この人はいつも、一番初めにきついウイスキーのストレートと、チェイサーに水を頼む。つまみは頼まず、ただ味わうようにゆっくりと飲みながら、店内の話し声やざわめき越しに流れる音楽を、一人楽しそうに聴いている。
　週末にだけ現れて、いつも少し上質な生地のジャケットを着ていた。一度だけ職業を聞いたけれど、ただの会社員とだけ言っていた。

この店には、そんな〝大人〟がよく集まっていた。
週末は中々の賑わいだけれど、それでも下品にならないのは客層が限られているからかもしれない。
内装、お酒の種類はもちろん、ビリヤード台からその日流すＢＧＭの選曲までマスターの趣向で揃えられているから、そこに魅了されてリピーターになる人が多い。今日はエレクトロ・スウィングが流れていた。
「これは・・・・・Ｃａｒａｖａｎ　Ｐａｌａｃｅだ、懐かしいね。君くらいの年代だと、あまり聞かないかもしれないけどね」
一瞬、ドキリとした。自分の年齢を見透かされたのかと思った。
けれど、この人からすれば私は〝若者〟程度のカテゴリにすぎないんだと思い返し、冷静さを取り戻す。
マスターもこの人と同じくらいの世代だから、趣向に通じるものがあるのかもしれない。
表参道のプールバーＳａｐｈｉｒ。
私はここでアルバイトをしている、年齢を誤魔化して。
きっかけは簡単だった。
昼休みに友達から、隣のクラスの子が〝例の店〟の面接で落とされたという話を偶然

聞いた。例の店とは学校内で昔からある有名な噂で、年齢を偽って受けても調べられないけれど、面接で受かる事はほとんどないという都市伝説みたいな店の事だった。

大体の子はそのまま聞き流す話だったかもしれない、でも塾の受講費を稼がないとと焦っていた私にはうってつけの話だった。

半信半疑でその店に行くと、日中にだけアルバイト募集の張り紙が小さく貼られていた。少し躊躇したけれど、どうせ別の場所で年齢を偽り働くつもりだったから、ダメ元で応募した。

面接はマスターと一対一だった。

ワイシャツにベスト、ネクタイはしていなかったけれど、いかにもバーのマスターと言われてイメージするような格好をしていた。私は面接早々に聞いた。

「このお店の時給ってちょっと高いですよね。なんでですか？　何かあるんですか？」

マスターの目が、一瞬少しだけ驚いたように見えた。気のせいかもしれないけれど。

「うーん、別に特別な事はないんだけどね。言ってしまえば、合う人が中々いないんだよね」

「合う人？」

「そう、合う人。この店の従業員は少人数でね、俺の他にはバーテンとか厨房とかで何人かいる程度で、アルバイトは君一人という事になる。内容は書いてある通り、バーテン

の補助だね」
「補助って、具体的に何をするんですか」
「注文を取る、注文された品を出す。雰囲気を崩さず、応対する。これが出来ればいいね」
「・・・・・・それだけですか？」
「うん。酒はバーテンが、料理は厨房が作るからね。ビリヤード台は俺が見てるし。まぁ、ようは適正というか、素養が大きいね」
「はぁ」
「どう、出来そう？」
「やったことがないので分かりませんが・・・・・・やってみたいです」
「じゃあ、任せようかな」
「え？」
「採用、という事で。君が良ければもうシフトを組みたいけど、どうする？　やる？」
「ええと・・・・・・」
　それから私は、あっという間にバーカウンターに立つバーテンダー補助になっていた。マスターの言う通り、お客様から注文を取り、出来た料理やグラスを出すのが私の仕事だった。そしてカウンター越しに、様々な大人達とやり取りをする。

やっていてなんとなく、学校の子達がここの面接を通らない理由が分かってきた。このバーは本当に独特の雰囲気があり、そぐわないような子だとすぐに浮いてしまう。

けれど私は、なんだか妙にこの場に合っていた。自分よりずっと年齢の離れた人達の中にいる事が、どこか心地良かった。同級生の子達にはないものを、感じられているような気がした。自分の強いこだわりや〝好き〟を持っている人達が大勢いる空間に、心地よさを感じたのかも知れない。

私の場合のそれは絵だけれど、例えば音楽やお酒、ビリヤードに対して、余所ではなくここに来るようなちょっとこだわる人達には、言葉でうまく言えない共通するものがあって、私はそういう人達と交わす少ない会話が、嫌いじゃなかった。

でも、だからだろうか。

「おねーさんさあ」

そういう中にあって〝ノイズ〟は嫌でもはっきりしてしまう。

「なんかオススメってある？」

大学生風の男は、顔にニヤケた笑いを貼り付けていた。甲高い声と相まって、軽薄さが際立つ。

表参道にあるプールバーという物珍しさに惹かれ、たまにこういう場違いなお客が来る。常連の方々は寛容な目で見ていてくれるし、マスターから教わったおかげでずいぶ

んこの手のお客のあしらい方には慣れていた。

「すみません、私はあくまでも受付のようなものですから。そちらに当店のバーテンダーがおりますので、お呼びしますね」

そう言い終えると、相手の反応など待たずにバーテンのロウさんの所に向かった。

すべてを耳打ちし終える前にロウさんは状況を把握し、男の前に飛んでいった。きっと要望に応じて完璧なカクテルを作る気だろう。

アルバイトをはじめてからすぐに、何故わざわざアルバイトが必要なのかが分かった。

このロウさんという人は職人気質で、可能な限り最高のものをと追求するあまり、夢中になりすぎて複数の接客が出来なくなる人だった。一対一であれば本当に丁寧に相手の要望を聞き、できる限りの一杯をと考えて作るのだけれど、完成してお出しするまで他の事が一切手につかなくなってしまう。もちろん注文も聞こえない。

マスターはマスターで、開店から閉店までビリヤード台にずっとはりついている。常連のお客様とはコアな話やアドバイスをし、人が空いた時には常に最高のコンディションにしようと台のメンテナンスに勤しんでいる。

しかし何よりすごいのは初心者への対応で、エネルギーが湧き出すといった様子で嬉々として丁寧に教える。本当に楽しそうに教えるので、遠目に見ていても結構気に

なったりしてしまう。このビギナーコーチングは業界では結構有名らしく、団体予約や勉強会が開かれる事もしばしばだった。

けれど、そこに全力投球するから他の事は基本、スタッフに任せきりだった。

とはいえ、ビリヤードに限らず仕事は丁寧に教えてくれるし、怒られたりすることは一度もなかった。むしろどんどんビリヤードに専念出来るのが嬉しいらしく、日に日にご機嫌になっていった。

見た目は細身なのに背が大きく、黙っていると強面のおじさんなのに、キューを手入れしたりお客様と話している時には子供みたいに満面の笑顔をずっと浮かべている。

そう、この店の人達は子供みたいに熱中してしまう人が多いのだった。

例外は厨房で、それは調理スタッフを束ねる料理長のノウさんの影響が大きかった。

「神谷さんすまないね。あの人達、夢中になると周りが見えなくなっちゃって」

最初の頃、店の様子に驚いていた私にノウさんはよくそう言って気遣ってくれた。基本は厨房にいるのにお店の様子をよく見ていて、ビリヤードに浮かれるオーナーには「もう閉店三十分前ですから切り上げてください」と言ったり、ロウさんに「注文詰まってますよ」と催促したり、まるで調整役のように立ち回っていた。

きっと私の入る前から、この3人の奇妙なバランスでお店のサービスと運営は成り立ってきたんだろう。

けれどそれ故に、中々忙しくてもこの濃密な環境に対応できる人が、つまりは〝合う人〟がアルバイトで見つからなかったのだろう。そして私は運良く、その〝合う人〟だった。

正確に言えば、私もこの人達に負けないくらいこだわっているもの、夢中になれるものがあるから、怯まずにやっていられるのかもしれない。

「・・・・・・・もうすっかりバイト慣れたね」

ロウさんと男を傍観している間に、気付いたらノウさんが厨房から出てきていた。手に持ったトレーには、おいしそうな料理が並んでいる。

「マスターがいる台の分。行ってくれる？」

「分かりました」

さっき厨房に流した注文が、もう出来ていた。このアルバイトは意外に手が空く時間が少なく、良い意味で退屈しないものだった。

トレーを受け取りカウンターを出る。背中越しに、厨房に戻るノウさんの声が聞こえた。

「しかし君が入って良かったよ。〝上手に出来る子〟で助かってるんだ」

それは、お世辞ですらない素直な褒め言葉。本来なら、浮かれ喜んでもいいはずのその言葉が、今の私には重く刺さった。

無難にマスターとお客様の前に料理を置き、軽い挨拶をしながらも、頭は別のことを考えていた。それは、昼間の学校での会話だった。

「――しかしホントすごいよねぇ、朱鷺子は」

「えー、どうしたの急に」

「だってあのバイト受かっちゃうんだもん。受かった子なんて何年もいないのに」

「たまたまだよ。運良くっていうか」

「またまた。朱鷺子ってホント器用っていうか、全部そつなくこなしちゃうよね。コミュ力高いし、成績だっていいし。その上絵も描けて美大目指すなんてさー」

〝・・・・・その上〟

その言葉に、悪意なんてない事は百も承知だった。それでも。

私にとっての絵は〝その上〟なんていう位置づけじゃない。むしろ逆。

何一つ、他が不器用でも構わない、うまくいかなくても構わない。他がいかに〝うまく〟やれても、意味がない。

私は、絵が描きたい。ただただ描きたい。

器用にしたいんじゃない、効率的にしたいんじゃない。

非効率でいい、要領が悪くたって構わない。

それでも・・・・・自分が納得できる絵が描きたい。

自分が描きたい絵が描きたい。
絵が描ければいい、それだけのはずなのに。
それが私の、一番大切な事のはずなのに・・・・・・。
最近、描けていない。
思うように進まない勉強とバイトで、まとまった描く時間が取れない。クロッキーは時々出来ているけど、それも塾がはじまればどうなるか・・・・・・。
いや、迷ってもしょうがない。美術予備校の方ではずっと好評価だったし、今は課題の学科対策に集中しないと。お金を貯めて塾に通う事だけに専念しないと。
頭の底から浮かんでくる悪い考えを振り払い、私はカウンターに戻った。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ・Ⅱ―Ｔｏｋｉｋｏ Ｐｈａｓｅ―

「――お疲れ様でした」
「あぁ。気をつけて帰ってね」
店を出る頃には、当然のように真夜中になっていた。日付は変わっていないけれど、帰って眠る頃にはきっと明日になっている。
お店を出ると空調の効いた空間は消え、少し湿気を帯びた熱気が顔に当たる。帰り道、少し細い路地を一人で歩く。この路地は駅までの近道で、夜はあまり近づくなと言われているけれど、時間の惜しい私は最近よくこの道を使っていた。人通りが少ないから酔っ払いに絡まれる事もない。
けれど今日は珍しく、車が停まっていた。黒いバンで、街灯が少ないこの道では近づかないと気付かない程暗闇に同化していた。そのまま横を通り過ぎようとしたとき、不

意にドアが開いた。
「おねーさん、帰り？」
　それはさっき店に来ていた男だった。
　顔や服装なんてほとんど忘れていたけれど、ニヤけた表情と軽薄なノリで思い出した。考えたら、今までも何度か店内で声をかけられていた気がする。たまに来る程度で、大抵はすぐに帰って行くからあまり覚えていなかった。
　とうとうナンパまでされるようになったかと、内心うんざりした。今はただでさえ放っておいて欲しいのに・・・・・・。
「良かったらこの後」
「ごめんなさい、私用事があるんです。それにお店以外では」
「冷たいこと言うなよ」
　血が凍るかと思った。
　男の手は、私の腕を強く掴んでいた。表情も声のトーンも変わらない、なのに目が笑っていない。薄暗い、下劣さを感じる目。
　本能が直感が、うるさいくらいに警鐘を鳴らした。危ない、本当に危ない。今すぐに逃げないと。
「あの、本当に困ります」

「ちょっと付き合うだけでいいからさー。大丈夫少しだけ、それで満足するからさー」
話す様子とは裏腹に、手に込める力は異常だった。絶対に離さないような力で、まるで動かない。このままじゃ・・・・・・。
「いやっ、離して！」
「ダメだね。嫌でも付き合ってもら」
「――ちょっと、いいですか」
急に、路地の暗がりから声がした。
私も、腕を掴んだままの男も固まって、声のする方を凝視する。
「そこの人、僕とこれから約束があるんですよ。すみませんけど離してもらえますか？」
男はしばらくしてから、我に返った様子で怒鳴り返した。
「なんだよてめぇ誰だ！　知り合いだか知らねぇけど、こそこそ見てんじゃねぇよ出てこい！」
「こっちだよ」
急に、声が耳元に変わった。
見れば私のすぐ真横に、一人の青年が立っていた。色の白さが薄暗い街灯の下でもよくわかった。
「あっ」

　青年は瞬く間に男の手をさっと振り払った。私はすぐに車から離れ、その場に身構えた。
「てめぇ」
「今、警察を呼びました」
「はぁ？　俺はただそこの女と話してただけだ。そんな事であれこれ言われる筋合いはねぇだろ。なんか証拠でもあんのかよ！」
「今までの会話は全部録音してます」
　青年はポケットからボイスレコーダーをちらつかせる。
「そ、そんな言い合いいくらだって」
「当人が証言すれば分かる事です。それにここ、車両進入禁止ですよ？」
　そういえばこの道で車を見かけないのは、そもそも進入禁止だったからだと思い出した。
「どちらにせよ、一度警察の人には〝じっくり〟調べてもらう事になりますね。ほら、もう近くに来たみたいです」
　気がつけば、サイレンの音が遠くで鳴っていた。
「・・・・・・くそっ」
　男は勢いよくドアを閉めたかと思うと、すごいスピードで車を飛ばしていった。安堵

すると、一気に緊張が途切れた。思わず地面にへたりこんでしまう。
「・・・・・・大丈夫ですか?」
「はい。ありがとう、ございました」
近くで見ると、自分より年下に見えた青年は思ったより大人びていた。
整った顔立ちに切れ長の目。そして近づいてはじめて、自分より背が高いことに気付いた。たぶんすらりと細い体型が、暗がりでは高身長を感じさせなかったんだろう。
こちらを見る瞳の色が、何故かとても綺麗に見えた。
「立てます?」
手を取られ、ようやく立ち上がる。
「すみません、本当に助かりました。ありがとうございます」
「いや・・・・・・別に」
改めて頭を下げると、青年は少しだけ困惑した様子だった。
「それより、あの男は?」
「えっと、私の働いてるお店にたまに客として来てたんです。でも、店の外で声をかけられるなんて今までなくて」
「以前に何度か話してます?」
「はい。と言っても、接客の会話程度ですけど」

「そうですか・・・・・・」
「あの、あなたは一体」
「・・・・・・すみません、挨拶が遅れました。僕は、まぁちょっと訳あって探偵事務所の仕事をしている者です。もっとも、手伝い程度ですけど」
「探偵？」
「はい。実はこの周辺で、同じような被害が増えていて。調査と情報収集を兼ねて張ってたんです」
探偵、捜査・・・・・・まるでドラマの世界のようだ。けれど今、自分の目の前で起こったそれは明らかに現実に起きていて、そして事件だった。
私は事件の当事者になったという事実を、まだ飲み込めずにいた。
「そういえば、パトカー・・・・・・」
冷静になるにつれ、それがまずい事であると気づきはじめた。
事情聴取を受ければ、自分が年齢を偽って働いている事なんて簡単にバレてしまう。
「あぁ、あれは嘘なんです」
青年はそう言うと、声のしていた暗がりの方に歩いて行く。そして戻ってくると、手にはスマホと小型スピーカーを持っていた。
「僕の声を向こうでスピーカーで流して注意を引き、サイレンの音も同じスピーカーで

遠くから聞こえているように流したんです。このアプリは結構優秀で、本当にそこにいるみたいに音を聞かせる事が出来るんです」

なんだか、マジックのタネ明かしを見ているような気分だった。

分かればなんてことない方法だし、青年は淡々と語るけれど、物怖じせずにそれを実行する事なんて普通出来るだろうか？

青年はあの男についていくつか質問してから、もうこの道は使わず明るい表通りの道を使うように言って立ち去ろうとした。

「待って！　あなたは・・・・・・名前もまだ聞いてないし、お礼も」

「さっきので分かったかも知れませんが、この件は少し危険なんです。だから僕の名前を言う事は出来ません。それに、これ以上あなたは関わるべきじゃない」

「そんな、私もう無関係じゃ。それに同じような被害が増えてるって言いましたよね？

私、あの男の事もっと、話せる事があるかもしれない」

「ダメです。これ以上、危険なことに巻き込む訳にはいかないんです。申し出はありがたいですけど、今日は帰ってください。次からは別の道を」

紳士的な、けれど有無を言わさぬ口調で青年は帰り道を促した。私は従う他ない。

明るい通りまで付き添ってから、青年は一人、元の道に戻ろうとしていた。でもこのままじゃ・・・・・・。

さっきは確かに怖かった。整理し、冷静になるのに時間がかかった。けれど考えてみれば、同じようにあの恐ろしい経験をする女の子が、私以外にも出るかも知れない。そう思ったら、黙ってなんていられなかった。

もう足さえ消えていく暗闇に、私は叫ぶように話しかけた。

「あの！　あの男・・・・・・いつも指輪をしてました、昆虫の。お店の、バーテンの人が言ってたんです。グラスの扱いが雑だって、あんなゴツい指輪を何度もグラスにぶつけたら傷がつくって。私もグラスを渡すとき気を遣った事、思い出したんです。確か緑色で、たぶんあの虫の形は・・・・・・コガネムシ」

しばらく待っても、暗闇から返事はなかった。足音も立てず、そのまま青年は夜に消えた。

それから数日。

私はお店からの帰り道を変え、あの男を見かける事もなくなった。もう大丈夫だろうという気持ちが半分、また出くわしたらという恐怖半分で、今日も帰り道を歩いている。

あの青年は、あの後どうしたのだろうか。手伝いと言っていたから、大元は大きな探偵事務所なのかもしれない。でも、ドラマみたいにそんな犯罪に介入するのだろうか。警察と協力しながら、解決するなんて事を。

起きた出来事の派手さのないリアリティと、イメージでしかない知識が両極端で、噛

み合わない。
　そんな風にあれこれ考えながら歩いていると、不意に路地の方から声がした。
「・・・・・・こんばんは」
　思わず警戒し、防犯ブザーを握ったけれど、その声があの青年のものだと気づいた。
　暗がりに同化していた青年の姿が、街灯の下にすっと現れる。やはり月のように白い肌が、印象的だった。正面に立つと身長差で見上げるような形になるから、余計に夜空の月みたいに見える。
「あの、この間はありがとうございました」
「いえ、むしろ今日はお礼を言いに来たんです」
「えっ？」
　青年は、スマホを取り出し画面を見せてくれた。そこには短いネットニュースの記事が表示されていた。
「名前や写真は出てませんけど、あの男は犯罪グループの一員でした」
　そこには最近頻発していた、若い女性の誘拐事件について書かれていた。
「実は中々難航している事件だったんです。というのも、手口が厄介で。やり方自体は若い女性、それも学生くらいの年齢の女性をターゲットにしていて、車に乗せて誘拐し、身代金を要求するという難しくない方法だったんです」

「じゃあ、なんで」
「巧妙なのは、事前調査で被害届をまず出さないだろう相手を見つけ、狙ったという事です。まず、相手を夜遊びしているような経済的余裕のある家庭の、それも学生くらいの年齢の女性に絞った。そして相手に応じて、数十万円程度の金を払えば解放すると言う。十万円程度の場合もあったみたいです」
「そんな事が」
「誘拐された被害者は、夜の街を歩く程度の額なら持っている事が多く、その場で渡してしまう。もしその場で払えなくても、世間体を気にする両親ならまず支払うし大事にしようとしない。娘の夜遊び防止代くらいにしか考えないところもあったみたいですし、とにかく被害届を出せないような相手を狙っていた訳です」
「でも、私働いていたし。夜遊びでもないのに、なんで間違われたのか」
「多分何度かあなたを見て、別に経済的に困っている風でもないのに働いていると分かったんでしょう。そしてどこからか、年齢をごまかして働いている情報も得ていたみたいです。多分働いている事がバレたくない相手からなら、いくらか取っても大丈夫だろうと踏んだんでしょう」
　確かに、金額によっては渡していたかもしれない。今の私には、被害届を出すなんて出来ない。

「でも、じゃあどうして」
「あなたのくれたヒントのおかげです」
「ヒント?」
「コガネムシの指輪、あれはグループメンバーの明かしだったんです。正確には、仲間とやり取りする為のウェアラブルユニット。不自然な動きをせずに、連絡や情報を飛ばす為に使われていたんです」
　思い返せば、指輪にしては少し大きく感じていた。でもあれにそんな機能があったなんて、言われなければ分からなかった。
「車は偽造ナンバーだったし、警察じゃない僕らは中々証拠がなくて動けなかった。でも、おかげで警察に逮捕させるところまで持って行く事ができた。だから報告を兼ねて、お礼を言いに来ました」
「お礼だなんて」
「今もまだ、アルバイトを?」
「えっ、はい。今日も帰りで」
「何故わざわざ年齢を偽ってまで働いているのか、僕には知りようがないし止めるつもりもありません。ただ、もし何か困っている事があるなら言ってください」
「・・・・・・・」

どこから話せばいいか、そもそも何を話して良いのか。私には分からなかった。
「まぁ、いきなりですよね。でも、僕は何かお礼がしたいだけなんです。それにもしあなたが困ってるなら、力になりたい。・・・・・そうだな、何かひとつ望みがあれば、出来る限り協力します。僕に出来る範囲で、ですけど」
気持ちは嬉しい、けれどお金を貸してなんて言えない。言いたくもない。その負い目を感じながら勉強しても、たぶん集中出来ないだろう。大体、塾に通って本当に成績が上がるかさえ、疑いはじめてしまっているのに・・・・・。
それでも、大丈夫だと断れない空気を彼は作っていた。まるで普段から、誰かを助ける事に慣れているかのように。そして、何故かそれを望んでいるかのような、少し切ない目をしていた。
ふと、青年が制服を着ている事に気づいた。
「あなたの服、西麻布学園の」
「あ、そういえば着替えるのわすれてた」
それは有名な進学校だった。
「あなた、高校生？」
「一応」
「一応？」

「・・・・・・あまり、まだ実感が湧いていなくて」
彼は最近編入してきて、それまでは外国で暮らしていたと言った。
「もしかして・・・・・・ううん、あんな学校通えるんだから頭良いよね」
「どうかな」
彼の飄々とした自己評価は、しかしどこかに自慢ですらない自信を感じさせた。大体、あんな進学校の生徒が探偵の手伝い？　ますます分からない。でも、もしそうなら。もしかしたら、彼に教われば・・・・・・。
「決まった」
彼の目に、少し期待が宿る。
「じゃあ・・・・・・勉強教えて！」
そして困惑の表情に変わった。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ⅲ―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

雑居ビルの屋上は、夜でも寒くはなかった。

むしろ暑いくらいで、コンクリートに触れれば生ぬるい熱が伝わってくる。照明をつけずとも、ビルの灯りや街灯のおかげで見下ろす景色はよく見えた。

目を凝らせば手元も見えるから、不自由はない。都会の街が眠らないのは、ヨーロッパでも日本でも変わらない。それでも、今が真夜中である事に変わりはない。日付ももうすぐ変わる。

そんな時間に、僕はひとりビルの屋上にいる。その事実は改めて考えるとなんだか奇妙で、口元が緩んでしまう。日本に来て、こんな日々を送ることになるなんて思いもしなかった。

物思いにふけっていると、一台の車が走ってくるのが見えた。双眼鏡を取り出し、スマホで通話アプリを立ち上げる。レンズ越に見えたのは黒いバンで、窓ガラスにも黒い

フィルムが貼ってあって中は見えない。襟につけたピンマイクとイヤホンの位置をなおし、話しかける。
「――叔父さん、聞こえますか？」
「あぁ、良好だね。そのまま繋いでおいてくれ」
「映像も行ってます？」
「見えてるよ。まったく、あんなフィルム貼った車いまどきないな。しかも透過率がかなり低い、検挙対象になるぞ」
「そこまで見えるんですか？」
「いや、繋いでいる映像を画像処理にかけてる。簡易的なものだがね。とにかくこいつは怪しい、すまないが追ってくれ」
「わかりました」
　車はそう速度を出さず、小さな路地へと入っていく。
「ルートＢに向かってます、行きますね」
「了解。まぁ、無理しない程度にやってよ」
「わかりました」
　そう返事をしながらも、僕は勢い良く走り出していた。
　風を切るように非常階段を駆け下り、ルートＢで車が停まるであろう地点を目指す。

まるでドラマや映画の探偵のような事をしていると思うと、やはり口元が緩んでしまう。まさか〝私立探偵の手伝い〟をする事になるなんて夢にも思わなかった。

――日本に着いた僕は、義父の元から東京の高校に通う事になった。

フランスでは飛び級で大学に通っていたけれど、日本では休養のつもりでと言われ、高校に編入する形になった。

西麻布学園は、都内では中々の進学校だと聞いていた。けれど内容は正直、退屈だった。興味を引く事もなく、周囲も受験の最中にやってきた編入生にあまり興味を示さなかった。成績の良さから話しかけられる事はあったけれど、それらは大概低俗な興味本位だったから、日本語や国際英語が通じないふりをしてやり過ごした。少なくともこの学校で何か見つけられる事はない、と三日を待たずに気づいてしまった。

素直にその事を話し、それでも環境が変わって気分転換にはなっていると話すと、義父は少し渋い顔をした。僕が慌てて、本を読んだりしながらゆっくり考える時間にするから大丈夫だと話すと、より険しくなった。

そして突如、スマホを取り出し誰かに呼び出し通知をかけはじめた。

「コウ、実は君に会いたいと言っている男がいるんだ」

それが叔父さんだった。

「いやぁはじめまして！　君が航一郎君かぁよろしく。私は遊学という。君の、まぁ叔

父にあたる者だね」
　最初に出会った時から、叔父さんは黒のアロハシャツを着ていた。模様も黒いので何の模様なのかよく見えなかった。ウェーブがかった髪は、アインシュタインやベートーヴェンを彷彿とさせた。けれどその色は、驚くほど黒々としていた。
「・・・・・・よろしく、お願いします」
「ははっ、お願いされる事など何もないよ。それより、聞くところによれば君は宇宙工学を専攻していたらしいじゃないか。あの分野は最近、どうなっているのかね？」
「えっと、そうですね。・・・・・・・叔父さんは、私立探偵をしているんですよね？」
「おやおや、偏見は良くないなぁ。職業名が当人を規定する訳ではないのだよ。私が職業を選択しているにすぎない。故にすべての私立探偵が宇宙工学に精通している訳ではないが、私には興味があり、またある程度の知見もある」
　義父が呆れた顔で会話に入った。
「あー・・・・・・コウ、すまない。こいつは変わり者でね」
「何を言う。まぁ、否定はしないが。それより、差し支えなければ教えてくれないかね？」
「おい、話しておいたろう。コウは」
「いえ、大丈夫ですよ。そうですね、最近だと・・・・・・」

一般人にどう説明すべきか迷ったけれど、その杞憂はすぐに消し飛んだ。叔父さんは基本的な専門用語なら知っており、また知らない用語や内容に関してはすぐに説明を求めてきた。そして瞬く間に理解していった。

最新技術であってもそれが余程革新的なものでなければ、基礎理論を理解していれば応用として理解出来るというのは、工学の世界では珍しい事じゃない。けれど、それはあくまでも理屈の上での話であって、本当にそんな話し方が出来る人に僕ははじめて出会った。

「――なるほど、そんな事があるのか。やはりＥＳＡ（欧州宇宙機関）の試みは面白いものが多いねぇ」

「おいおい、それくらいにしてくれ。今日は挨拶に来ただけだろう？」

「何を言う、今良いところなんだぞ。しかしすごいな彼は、資料なしにここまで話せるとは」

「いえ、叔父さんの方が。あの、あなたは一体どういう・・・・・・・」

「私はただの私立探偵だ」

「・・・・・・」

こんなに信用出来ない自己紹介は、聞いた事がなかった。

「おい、冗談だと思われてるぞ」

「何故かね？」
「まったく・・・・・・コウ、本当にこいつはただの私立探偵なんだ。まぁ、優秀ではあるんだが」
「いやぁ好奇心が抑えられなくてね。知識だけなら持っているんだ、色々とね」
一筋、そこに光が見えた気がした。
「・・・・・・あの」
「ん？」
「僕に・・・・・・お手伝い出来る事、ありませんか？」
僕が探偵事務所を手伝う事になったのは、それからだった。
――目的地に近づいてきた頃、叔父さんの声がイヤホン越しに聞こえてきた。
「ＧＰＳを見るに、そろそろ着きそうかね。走らせて悪いが、私より若人の方がその辺頼りになるのでね」
「叔父さんそんなに歳いってましたっけ？」
「秘密だね。まぁイマドキ張り込みなんてと思うかもしれないが、ツールなんて大概何らかの対策がされてしまっているもんでね。でも生身の人間を防ぐ方法は、たかが知れている。だからそこをうまく使えれば、実は高い確実性が得られるんだ。それに現場というのは重要でね、月並みな言い方だがデスクに向かっていては得られない情報が得ら

れる」
「叔父さんがデスクに向かっているところ、あまり見かけないですけどね」
「たまには使うさ、最近は暑いからほとんど使わないがね。とにかくツールも使う、自分でも動く。一周回って、こういう探偵の王道が一番確実なんだよ。それにいかにも古典的で、探偵感あるだろう？」
「ふふっ」
「面白いかね」
「少し」
「それは良かった」
　あえて少しと答えたけれど、僕は実のところこの〝探偵手伝い〟の仕事を結構面白く感じていた。まだはじめて間もないけれど、僕の生活は、日々は、この仕事によって大きく変化した。
　手伝いをしている間は、まるで突然流れてきた軽快な音楽に乗せられて、駆け抜けているような気分だった。追い風の中を走っているようで、時に自分の足よりも早く身体が押され流されそうになる。けれど、それさえも利用しながらうまく曲がり、飛び、駆け抜けていくような心地よさは奇妙で、今までに体験したことのない感覚だった。新鮮な空気が全身を抜けていくような、透明で、けれど好奇心を刺激される感覚。少なくと

も、そこに退屈はなかった。

目的地に着くと、まるで狙ったかのように車が停まっていた。

「着きました」

「ご苦労さん」

「これからどう・・・・・・ちょっと待ってください。誰か来ます。あれは・・・・・・女性です。若い、もしかしたら十代かも。まずい」

追っているターゲットが、若い女性を狙った誘拐事件を起こしている所までは掴んでいた。けれど被害者がまるで名乗り出ず、私立探偵では現行犯や証拠収集が関の山だった。だから古典的な張り込みなんていう事をしていた。

ルートBは車両進入禁止区域だと分かっていたから、土地勘のない犯人がそれに気付く前に、現場を押さえ通報すれば車内を調べることが出来る。あんな違法車だから警察も詳しく調べられるし、逮捕は出来ずとも様々な情報を得る事が出来る。

けれど、早すぎる。

もし歩いてくるあの女性が被害にあえば、通報する間すらなく走り去られてしまう。何より、被害者を出す事を食い止めなければ。

どうすれば、どうする・・・・・・。

「叔父さん、ちょっと通話切りますね」

「え、何か起きた？」
「いえ、起こりそうなのでちょっと行ってきます」
「ちょっと待」
強制的に通話を切る、狭い路地にワイヤレススピーカーを置く。
タイマーでサイレンが鳴るようアプリはセットした。後は、思い描いたシナリオがうまく行ってくれればいい。大丈夫、上手くいくはずだ。
そう自分に言い聞かせ、声が震えぬよう痛いほど激しい鼓動を隠して、僕は口を開く。
「いやっ、離して！」
「ダメだね。嫌でも付き合ってもら」
「――ちょっと、いいですか」

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ⅳ―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

「――へぇ、そんなことがあったの」

大きなデスク越しに、叔父さんは珍しく椅子に座っていた。

この探偵事務所のドアを開けたとき、真っ先に見えるのはこの大きなデスクだった。と言っても半分以上が平積みの本や書類で埋まっていて、覗かなければ誰が座っているのかさえ分からなかった。

「まぁツールも持たせてるし、護身術も教えたし、そうそうヤバイところまでは関わらせないようにしているとはいえ、こんな仕事手伝わせている時点で〝気をつけて〟なんて言える立場じゃないんだけど」

僕は応接用のソファーに座っていたから、叔父さんの顔どころか向かい合う事もせずに話を聞いていた。別段仲が悪い訳ではなくて、それが叔父さんにとっての自然であ

り、僕もすぐに慣れてしまった。
「だがまぁ、心配はさせてほしいね」
「すみません・・・・・・ご心配おかけしました」
「ま、大丈夫だとは思っていたんだけどね。君の能力的には」
　立ち上がる音がし、本の山の影から叔父さんが顔を出す。いつも通りの顔をしていた。
「とはいえ、そんなものは所詮運も絡む問題だ。一般論として、というか客観的に考えて、まだ十代後半の親戚を心配したい訳だよ私としては」
　あの女性を助ける為とはいえ、通信を切ってしまうとは叔父さんも思わなかったらしい。
　騒動から数分待たずして、叔父さんは現場に現れると「急を要する場面ほど、他者との通信はつないでおくべきだ」とだけ言った。それからすぐに事務所に戻ると今まで起きた事、起こした事を説明した。
「しかしまぁ、よくそんな芝居を打てたものだね。若さのエネルギーかな?」
「内心は冷や汗でしたよ」
「ははは。まぁ今後の人生においては良い経験になったんじゃないかな。それより、その女の子から聞いた話が重要だな」

「コガネムシの指輪、ですか」
「そうだね」
去り際に聞いた、犯人の特徴。
けれど、犯行現場を見られてしまってはすぐ犯人に服装を変えられてしまわないだろうか。それとも・・・・・・。
「コガネムシの指輪と、何か関係ありそうな情報があるんですか？　関連しそうな組織とか、事件とか」
「ない、まったくない。今まで聞いた事がないね、こんなものは」
叔父さんは何故か、楽しそうに答えた。
「やっぱりこの情報だけじゃ、手掛かりにならないですか」
「いや、なる。大いになる」
「どういう事ですか？」
「これでも私はずっと探偵をやって来ている、それもこの事務所でずっと。現代の探偵業は情報業とも言えるが、その私が聞いた事もないアイテムが今回出てきた訳だ。分かるかい？　この〝事実そのもの〟が、ヒントとしてはたらくのだよ」
叔父さんはスマホの画面を見せてくれた。コガネムシの指輪の画像がずらりと並んでいる。

「見て分かるように、このタイプの指輪は大抵リング部分とそう大差のないサイズで中石、今回で言えばコガネムシの部分がデザインされている。だから話に出てくるようなごついサイズのものなんて、一般には流通していないおそろしい金額のものか、骨董品レベルの古い物だという事が言える」

「そこまで言い切れるんですか？」

「専門家にも聞いて確認済だ。そして他の専門家からもうひとつ、別の可能性も教えられた」

「何ですか？」

「ウェアラブルユニットだ。そこにＧＰＳやら通信機能やらあらかた入ってる、見てごらん」

次に見せられた画面には、子供用アクセサリーの一覧が映っていた。

服につける事で、迷子になっても遠隔で位置を把握したり、通話が出来るセキュリティー商品だった。

「こいつはセキュリティー商品をうたっているだけあって、傍受や通信障害みたいなものへの対策が異様に強固なんだ。きっとうるさい客と長年格闘してきた玩具メーカーが、法律上もおもちゃ扱いで規制のゆるいこの商品にオーバースペックな機能を持たせてしまったんだろうね。マニアックなサイトじゃ、こいつをバラして性能を事細かに調

べて載せてるところもある」
「そんなものがあるんですね」
「あぁ、イマドキの警察の技術力を舐めてはいけない。素人が作った程度のツールなんて簡単に傍受出来てしまうし、そもそも未登録の機器なんて使えば通信局の電波監視に引っかかって役人が飛んでくる」
「なるほど」
「と言うことは、だ。正規の方法で既に登録もされていながら、傍受できない通信アイテムとしてこの〝おもちゃ〟は非常に都合が良いアイテムという事になる」
叔父さんは一覧の中から、コガネムシのブローチという項目をタップした。いくつかのサンプル画像とスペックシートが表示され、その中のある一文を指さした。
「もうひとつ、このアイテムには特徴がある。それは布一枚でも上に服があると通信が出来なくなるという事だ。つまり、露出していないと使えない」
確かに注意書きには、服の下、ポケットの中でさえ入れると使えなくなるので必ず服の上に取り付けるようにと書かれていた。
「これは技術的な理由じゃない、法令的な理由だ」
「法令的？」
「こいつはスペックだけ見れば異様だからね、電波法的には特に。だからメーカーは

オーバースペックを指摘されないように、わざと機能を制限する仕組みを組み込んだんだ。そうする事で、各種の技術基準をクリアできるように。これなら服の上にしかつけられないし、用途も限定される。サイズもウェアラブルユニットとしては大きすぎるから、子供以外が身につけようなんてまず思わない。これで完全に、おもちゃとしての申請も通してしまったわけだ」

言い終わるや、叔父さんはそのまま入口に向かっていった。

「すなわち、このコガネムシのブローチを指輪に無理矢理改造し、指にはめていつでも露出させる事で、仲間とのやり取りに使えるセキュアなツールとして使っている奴らがいる。と、いう訳だ」

そしてドアの前に立ち、実に楽しそうに笑った。

「しかしこんな手の込んだ物使うだなんて、私に探してくれと言ってるようなものだ！この件は早い内に解決するよ。指輪の情報が大変大きな手掛かりだったという事を、ご理解いただけたかな？」

「はい・・・・・・・」

一つ一つの情報は、調べれば僕でも見つけられるものばかりだった。

けれどそれらをこの短時間につなぎ合わせ、仮説を積み重ねてここまでの論理に飛躍できるなんて。この人はやはり、どこかが普通の人と異なっていると直感で理解出来

た。
「あぁ、そういえば」
ドアノブに手をかけようとして、突如叔父さんは振り向いた。
「君はその女の子にお礼を言ったのかい？」
「えっ、いえ」
「それはいけないなぁ。こちらが危険だからと言っても、それを顧みずこんな大ヒントを教えてくれたんだから。それにまた襲われるのではと考えて不安だろうから、事件が解決したらその事を教えにいってあげないと。かわいそうだ」
もう既に事件を解決した気でいる話しぶりだったけれど、確かに当人の立場で考えれば事件の結末を知るまでは不安かもしれない。
「でも、お礼なんて何を言えば」
「簡単だよ。あなたのおかげで事件は解決しました、ありがとう。と言えば良い。そういえば学校は違うが、彼女は君と同じ三年のようだね」
「もう調べたんですか？」
「君が映像を送ってくれたおかげで、そう苦労せず調べる事が出来たよ。と言っても、プロフィールを見つけた程度だがね。後で送るよ」
「僕に送られても」

「お礼は相手を知っているのと知らないのとでは、まるで変わるものだ。会う前に目を通しておくといい」
「はぁ」
「それと、これはあくまでも経験則だがね」
　不意に、少しだけ声のトーンが変わった。気のせいかも知れない、かすかな違いだったけれど。
「他者に与える事で、得られるものというのがある。・・・・・・君に良い言葉をあげよう。〝まず与えよ〟だ」
「聖書ですか」
「言っただろう？　これは経験則だ。そして〝課題を抱え、答えを求める者〟に対する、私なりの真摯なアドバイスだ」
　その言葉に、僕はどきりとした。
「君の事は聞いている。何かしらの課題を抱えてはいるようだが、人には言わないのだと。何、それ自体を詮索したりとやかく言うつもりはない。大体、人にたやすく言える課題などたいしたことではないというのが私の持論だ。言えたら苦労しない、とね。とにかく君は何かしらの課題を抱え、それに未だ苦戦している。中々に聡明な君が、ここまで答えを出せていないという時点でそれは明白だ。何に悩み、何と葛藤しているかは

知らないがね」

返す言葉に詰まった。

見透かされた、という言葉だけが頭に浮かんでいた。

「ただ、少なからず君より長生きした者として、言える事はある。・・・・・・本当に困難な課題に立ち向かう時は、なりふり構わぬ事だ。無論、結果の為にもう戻れなくなるような事は避けねばならない。必ず、元の生活に戻れるよう意識して動くんだ。しかしその条件さえ守っていれば、とにかく今まで取らなかったようなアプローチで、今までに触れなかった分野に触れ、広い世界に目を向ける事を躊躇すべきではない。何故なら、今手の中にあり、今までと変わらず考えてきた場所はもう、さんざ考えた後なのだから。そこに答えが見つかる可能性は低いと、考えられる。無論同じ領域でも、考え続け、より深く理解し答えが見つかる場合もある。だが、大概はもうそこに探すべきものはない。だからひとつ、今までと違うやり方を試してみてはどうかね」

ゆっくりと言葉を選ぶように叔父さんは言うと、ドアを開けて事務所の外へと消えていった。去り際に一言だけを残して。

「探求だよ。君は、探求すべきだ」

事務所に一人残された僕は、ぼんやりと同じ言葉を繰り返した。

「探求・・・・・・」

窓から入るぬるい風が、しばらく頬を触っていた。
その夜は、熱帯夜になった。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ｖ―Ｔｏｋｉｋｏ Ｐｈａｓｅ―

白い日射しが、道を染めていた。

あまりにも暑くて、日陰のないこの表通りは日中ほとんど人が歩いていない。だからこそ見つかりづらい場所だと思ったけれど、やっぱり流石に暑い。

待ち合わせはカフェだった。大きなオフィスビルの中にあって、チェーン店だけれど、利用者はほとんどが待ち合わせや休憩に使うサラリーマンだった。

おかげで、二階席はいつも空いていた。見栄えは良いけれど、レジからは遠いし座席も少ないから、ランチタイムくらいしか混む事はない。

そして、約束通りの席に見覚えのある人影を見つけ、私は少し安心した。大丈夫だろうと思ったけれど、もし来ていなかったらという不安が拭えなかったから。浮き足立って、トレイを持ったまま近づく。

「お待たせ、〝兄さま〟」
「・・・・・・その呼び方はちょっと」
　振り向いた顔には、困ったような表情がはりついていた。昨夜、私が勉強を教えてと頼んだ時と同じように。
「――えっ、年上？」
　深夜の街灯の下、私達は並んで歩いていた。
　願い事を聞いてくれる。そう言った彼に、私は勉強を教えてと答えた。彼は戸惑いつつも、事情を話すと分かったと頷いた。そして歩きながら待ち合わせ場所や時間の話をしていて、ふと年齢の事を聞いた。
　近そうだとは思っていたけれど、まさか年上だなんて思わなかった。１年しか違わないなんてしれっと言っていたけれど、その冷静さや明晰さに対し、その顔はもっと若く見えてしまう。そしてそのギャップはなんだ奇妙で、少し可笑しくなってしまった。
「でも、じゃあなんで敬語で話してたの？」
「いや、初対面だし、はじめて会った時は年下だと思わなかった。それにそういう事、あまり気にしないし」
「そう」
「あれはなんて言うか・・・・・・客向け、かな？　クライアントじゃないけど、事件関

係者だったから」
「今は違う？」
「一応助けて、助けられて、そして僕が勉強を教えるから・・・・・対等じゃないかな。と言うより、これから何度か会う事になるし、その方が僕も楽だから。だから敬語を使う必要もないと思う、お互いに」
「そう」
　不思議と、端的な物言いに変わった彼の言動は、敬語で話されていた時より距離が縮んだ感じがした。たぶんこれが素の彼に近いのだろう。
「そういえば、名前聞いてなかった」
「ごめん、それは教えられない」
「えっ、なんで」
「仕事の都合上」
「手伝いでしょ？」
「手伝いでも」
　たぶん、他にも巻き込みたくない事に関わっているからなのだろう。それからも彼は、頑なに名前を教えてくれなかった。
　彼との会話の中では何度か、こんな風に手玉に取られている気分になった。彼に不都

合な事はまるで綺麗にかわされる。話す程に、多分優秀な人なんだなと思えた。真面目に張り合ってもかなわない、そう思えてしまう程に。

名前を聞き出す事を諦めた私は訊ねた。

「じゃあ、なんて呼べばいい？」

「呼ばなくていいんじゃないかな」

「ダメだよ。先生とか？」

「それは違うかな、授業料も貰ってないし」

「先輩」

「学校が違う」

「じゃあ・・・・・・兄さま？」

彼は一瞬驚いた顔をしてから、すごく怪訝そうな表情になった。その顔に思わず笑ってしまった。

「ちょっと、なにその顔っ」

「君が変なこと言うから・・・・・・」

「じゃあ、決まりね！」

「えっ」

「ふふっ、これからよろしくね。〝兄さま〟」

戸惑いの表情で固まった姿は、とても可笑しかった。
確かに一歳しか変わらない。けれどその差に少し、甘えたくなったのかもしれない。茶化すような形での、甘えを。
――カウンター席に着くと、二人並ぶ形になった。近くには誰もいなかったけれど、私達は一番端の方に座った。
「それで、具体的にどこを目指していて、今抱えているのはどういう問題？」
「うーん、昨日話した通り美大の学科には受かるようにしたいの。併願した普通大の事考えても、模試で点が取れるようにならないと絵を勉強する以前の話になっちゃうから」
「うん」
「でも、今まで学校の成績はそんなに悪くなくて・・・・・・。ううん、むしろいい方。なのに模試の点に繋がらないのが余計に分からなくて」
「なるほど。ちょっとノートとかあれば見せてくれる？」
鞄から出して渡すと、彼はノートを何ページか読んでから教科書もパラパラとめくっていった。
「このページが一番新しいから、最近やったところ？」
「そう、そのページ」

「どんな風に習った？」

私が授業の様子を説明すると、彼はしばらく何かを考えていた。それから自分で持ってきたレポート用紙を取り出し、メモを書き始めた。

思ったよりも大きい字で、上の端から詰めずにあちこちにメモが書かれていく。時々、メモ同士に矢印が引かれる。書いたものが消され、簡単な表に書きなおされたりもした。

授業で説明をメモする、書き写すというノートのような書き方とは確実に違ったものだった。それは例えば海外の映画の中で、大人がホワイトボードに書くようなものに似ていた。書かれたそれを見たことはあっても、実際にそれを書いている人を目の前で見たことは今までなかった。

「・・・・・・どうして、端から書かないの？」

「どうして端から書くの？」

そんなこと、考えた事は今までなかった。上から書くものだと、綺麗に書くものだと思っていた。提出用だって誰かに見せる用だって、ノートは綺麗に書く方がいいに決まってる。だから勉強が出来る人のノートもメモも、きっと美しい字で延々と書かれた物なんじゃないかって、どこかで思っていた。

「誰かが書いた物を書き写すだけなら、それでもいいかもね。でも〝自分の考えや情報

を整理する〟為に書くのなら、そう書くのは不自然じゃないかな。例えば」

そう言って、彼は紙面を指さした。

一応上から書かれてはいるものの、メモの書かれた場所は飛び飛びで、特に右下の広い空白部分には、真ん中に一行だけの文があった。そこには〝一番の課題は何か？〟とだけ書かれていた。

「ここだけ広い空白を取って小さく書いているのは、何故だと思う？」

「分からない。どうして？」

「ここには疑問を書いているから、この答えを後で書き足すことになる。答えを書くなら、それまでに考える事があるかも知れないし、そこで途中の考えを色々書き足すかもしれない。だから、わざと大きな空白を開けておくんだ」

「でも、もし答えしか書かなかったら？　その余白は無駄になるんじゃない？」

「それは重要な事じゃないよ。大事な事は、どれくらい労力がかかったか、かけずに済んだかだね。だから埋まりそうな場所には、あらかじめ何も書かないで、思いついた事や答えをどんどん書き込めるようにしておく。もしほとんど何も書かずに終わったら、余白を埋める間もなくその疑問が解けてラッキーだった、本来はそこが埋まるくらい考えなければならなかった、と考えればいい」

リンゴが木から落ちることを説明するかのように、彼は淡々と言った。

「無論、このやり方が正しいとは言わないよ。メモの方法なんて人によって違うし、自分に合うやり方なら何でもいいと思う。ただ、メモや紙面は余白を埋めたり綺麗に書くのが目的じゃなくて、情報や自分の考えを整理する為にあるんだ。紙面を節約するのが目的なら、砂の上に書いて消せばいいしね」

呆気にとられる私を尻目に、彼はどんどんメモを書いていった。

「うん、大体整理出来たかな」

そう言うなり、目の前にレポート用紙が差し出された。

先程のメモ群の書かれた紙とは別の、新しい紙に箇条書きの文字が並んでいた。

「まず、現状の課題から。これを解決しないと受験は厳しいと思う。さっき見せてもらったけれど」

そう言って、彼は私の教科書とノートを指さした。

「正直に言えば、僕ならこれで勉強する気にはなれない」

「どうして？」

「論理が飛躍しすぎてる。急に法則と例題が出てくる。それが何なのかも説明がなく、次のページでは別の話が出てくる。暗記するだけなら良いのかもしれないけど、僕にはこれだけの情報で〝理解〟する事は出来ない」

「それって、内容が難しいっていう事？」

「むしろ逆かな。あえて極端に言えば、説明になっていない。この本が、ほとんどの部分を教師が解説するのを意図して最低限の事しか書いていないなら良いけれど、少なくともこのノートと授業の話を聞く限り、そういう訳でもないみたいだ」

私は驚いていた。

正直、学校の授業を〝難しい〟とか〝分からない〟とまで思った事はなかった。ただ自分が〝出来ない〟と思うことがあって、それもノートを見返せば言っている事は分かるという程度だった。じゃあ今までの私は、分かっていないという事さえ、分かっていなかった？

「例えば、ここにはヒステリシス曲線の説明が載ってる」

「うん」

「じゃあ、ヒステリシスとは何か説明できる？　教科書もノートも見ていいから」

「えーっと・・・・・・・磁束密度Bと、あと磁界Hの関係を示す図」

「それはこの曲線の説明になるね。ヒステリシスというもの自体は、物理現象を示す言葉になる。このヒステリシスって、一言で言うとどんな意味？　どんなコト？」

「それは・・・・・・・」

言葉に詰まった。

教科書を見返しても、ましてやノートを見て授業を思い返しても答えは出なかった。

そもそもそんなこと、考えた事がなかった。まずそういう曲線があって、こういう問題に使える。式の名前、図の縦軸と横軸には何が入るか。それだけ知っていれば、それ以外の事なんて必要だと思った事がなかった。

「たぶんそれが、今君の持っている一番の課題だね。厳しい言い方かもしれないけれど、ただの暗記になってしまっている」

彼が言うには、学校での成績と模試の成績が食い違うのは、そもそも授業の内容が暗記に近いものだからしかった。

「きちんと理解出来ていれば、環境や問題が変わっても対応できるはずなんだ。高校程度の問題であれば尚更。それが出来ないのは、傾向だとかこういう場合はこうというパターンだけで、理解出来なくてもテストが解けてしまうような授業をしているからだと思う。ここは出る、ここは覚えると言われて覚えれば、当然似たような問題がテストで出るから。でも、それは学校を出れば通用しない」

どきりとした。

そういえば、以前に一度先生に質問した事がある。それは電気の問題で素朴な疑問だったけれど、先生からは納得出来る答えは得られなかった。先生は教科書に書いてある言葉を、ただ丁寧に繰り返すばかりだった。

「そっちの学校は、違うの？」

「少なからずそういう授業もあるかな。でも、ここまで露骨じゃない」
表情は変わらないのに、なんだか少し不機嫌そうに見えた。
「正直、ちょっと腹立たしいね」
「えっ？」
「僕なら、こういう授業を受けるくらいなら家で勉強すると思う。君が予備校に通おうとしていたのは、正解だったかも知れない。これでは確かに、勉強のしようがない」
不機嫌さは増している、表情に出ないのに何故か分かる。不機嫌というより、憤りに近いのかもしれない。
「よしっ」
彼は教科書を勢いよく閉じた。音が立たなかったのが不思議なくらい、勢いよく。
「僕は、誰かに今まで勉強を教えた事なんてない。けどこれを見て、君に〝きちんと説明したい〟と思った。うん、方針が決まったよ」
そして、何故か不敵な笑みを浮かべた。
「暗記じゃない、ちゃんとした〝面白い〟勉強を教えてあげる」

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ⅵ―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

この学校の模試通知は、未だに封筒で届く。開けばそこに結果が書かれた紙がある。アナログのせいなのか昔から誰しもがそうだったのか、開いて読むという動作はとても重く感じた。

隣で楓子が同じ封筒を破くように開き、ため息をついていた。

「あー、やっぱり模試になるとダメなんだよねぇ。でもみんな、模試受けると結果良くないよね。まぁ内申点あるからいいけど。朱鷺子はどうよ、今回少しは良くなった？」

楓子の声に、私はすぐに反応出来なかった。

目の前の紙面に書かれた結果が、しばらく信じられなかったから。

「・・・・・・上がって、る」

「お、どれくらい？　見せて見せて。・・・・・・え、何これすごい」

そこには前回より、格段に上がった数字が書かれていた。
それも、今までどんなに頑張っても伸び悩んでいた部分が拍子抜けするくらい跳ね上がっている。
「どうしたのこれ、しかも物理なんて一番苦手だったじゃん。なんで？」
「うん、なんか、家庭教師のおかげ？」
「家庭教師なんていたの？　てか塾は？」
「ちょっと訳あって〝安かった〟から、家庭教師でしばらく様子見しようかなって思ったんだけど・・・・・・なんだか」
「大当たり？」
「みたい」
確かに前より上がるかもしれないという予感は、あった。それはここ最近の〝勉強会〟で、確実に今までとは違うレベルでどんどん〝理解〟出来ているという実感があったからだ。
けれどそれが実際に点数に繋がるのか、どれくらい効果が出るのか分からなかった。むしろ遠回りしているようにも感じ、もっと出題傾向を調べたり過去問の数をこなす方が良いんじゃないかと思っていた。でも理解するという事が、こんなにもダイレクトに結果を出すなんて・・・・・・。

封筒を仕舞いながら、私はぼんやりと彼とした会話を思い出していた。勉強会をはじめた、最初の頃の会話。

「――まずはきちんと、最初から理解する事。そして自分の言葉で説明出来るようになる事。これが目標だね」

そう言って、彼は今までやってきた範囲をもう一度はじめから勉強しなおそうと言い出した。自分が解説するからしっかり理解しなおすべきだ、と。

私は最初、反対した。

だってただでさえ、受験までの時間がなくなってきているのに。それを一からやり直しなんて。すると彼は淡々と説明しはじめた。

「大きく分けると、受験科目には〝覚える〟のが主のタイプと〝理解する〟のが主のタイプに分けることが出来るんだ。生物や語学系などは〝覚える〟が主だね。既にあるもの、法則性が発見しきれていないもの、そもそも法則性がないものを扱う事が多いから。もちろん高校レベルの話だし全てがそうではないけれど、受験科目として考えるならそう分類出来る。そして、理工学系と呼ばれる分野の科目はほとんどが〝理解する〟タイプになる」

彼はレポート用紙に逆三角形を書き、その中に横線を一本引いた。そして下半分に〝基礎・基本〟、上半分に〝応用・問題〟と書いた。

「この理工学系は一見難しく見えるかも知れないけど、実は基礎・基本・概念を数個理解出来れば、その組み合わせや応用で済んでしまうものが多いんだ」
「数個でいいの？」
「数個でいいよ、高校生の範囲ならね。でも、だからこそきちんと〝理解〟しなければ先に進めない。基礎で簡単に思われがちな部分ほど、しっかりと理解するのが難しかったりする」
「しっかり理解するって言っても、じゃあ具体的にどうすればいいの？」
「そうだね。有名な物理学者の言葉に〝本当にわかったと思うのは、物事に二通り以上の説明ができた時だ〟というのがあるんだ。つまり、今勉強したことを〝何も知らない人に自分の言葉だけで〟説明出来るかどうかが、一つの目安になるね」
「説明？　問題が解けるかじゃなくて？」
「そう。そもそもそれが何かも説明出来ないのに、それについての問題を出されても解けるのかな？」
「それは・・・・・・」
「少なくとも、僕なら解けない。仮に解けても、それは運良く思いついたりできたりした場合だけだって思うよ」
　穏やかな笑顔は変わらないのに、そこにはどこか企みを込めたような、あるいはいた

ずらっぽい色が見えた。表情に激しい振れ幅は見せないのに、その瞳の奥にある感情を私は時々感じる事があった。

「色々な問題を解く事自体は悪いことじゃないと思う。けど、それは同じ事について様々な角度から見たらどうなるかを聞かれているのと同じ事なんだ。だから応用問題を解ければ、より確実に理解が深まる。解けなければ、まだその一面しか理解出来ていなかったんだ、新しい見方があるんだって分かる事につながる」

「うーん・・・・・・」

なんだか次元が違いすぎて、ゴールが遠く感じてしまう。

「まぁ言葉で言うと難しく聞こえるけど、やればすぐにそんな事ないって気付くはずだよ。まずはやってみようか」

後から考えれば、生物や言語系のような彼の言う〝覚える〟科目は確かに、学校のテストでも模試でもあまり成績が変わらなかった。そして私が苦戦していた科目は、狙っていたかのように彼の言う〝理解する〟科目に当てはまるものばかりだった。

彼との勉強会は、それからほとんどこの〝理解する〟科目についてやる事になった。

「じゃあ、まずコレからやっていこうか」

そう言われて見せられたのは、学校では使わない参考書だった。それも受験用というよりは帯に〝復習用〟の文字が書かれた、大人向けのものだった。

「最初に物理学からやるの？」
「そうだね。日本でも、傾向としては物理学が特に短期間で伸ばしやすいものらしいから。これに慣れれば他の科目も要領は同じだし、何より伸びる実感が湧けば今より〝面白く〟感じられると思うから」
「でも・・・・・・正直、一番苦手」
「物理学に苦手意識を持っている人は多いね。でも、それは独学だとちゃんと理解するのに時間がかかるし、人から教わるにもちゃんと理解していない人に教わると本当に退屈なものになってしまう事が多いからだと思うんだ。だから〝面白くなる〟まで、他の分野よりすこし時間がかかったり機会をなくしてしまって、楽しむ前に離れてしまう」
「兄さまは、どの科目が一番好きなの？」
「物理学と工学かな。理論寄りの方の」
からかい半分で言っていた〝兄さま〟という呼び名に、最初こそ少し戸惑った彼は、しかしすぐに慣れて受け入れてしまった。本名も知らず、言い出して変えるタイミングも見失っていたから、私は自然とその名で彼を呼んでいた。
「だからね、まず物理学の話からしたいっていうのも正直あるんだ」
その言葉に偽りはなく、彼の物理学に対する解説は時に熱弁に近い内容になった。
今まで物理学には、淡々とひたすら説明される無機質なものというイメージがあっ

た。面白みのない、ただやればいいと言わんばかりの退屈な計算が続いているようなイメージ。けれど、彼の説明する姿や話す内容はその真逆だった。

それは自分でも抑えようとしながら抑えられないといった様子で、まるで昨日観た映画の事を話したくて仕方がないかのように、話したい・共有したい・面白いところを伝えたいという想いがにじみ出ていた。

しかも彼は、よく〝ドラマティック〟とか〝美しい〟という言葉を使った。小学校から習っていたはずの物理を、そんな風に話す人に私は今まで出会った事がなかった。

勉強会の中で、彼は私の素朴な質問にもすぐに答えてみせた。

「そもそも物理学って、どうして簡単な事を難しく書くの？　例えば摩擦は考えないものとするとか、空気抵抗はないものとするとか。現実は摩擦も空気抵抗もあるじゃない」

「それは、物理学では現実に起こる事を計算しないし出来ないからだよ」

「え？　じゃあ何を計算してるの？」

「現実を参考にして作った〝箱庭〟、つまりシミュレーターの中で、何をしたらどうなるかを計算する」

「じゃあ、現実の物は？」

「計算出来ない」

「それなのに、物理学？」
「自然現象を研究するのが物理学だからね。自然現象を全て説明出来る理論はまだないし、自然現象の全てを知る事なんてそもそも出来ないかもしれない。だから、分かるところだけ近似するんだ」
「近似？」
「近づけて、似せる事。やればやる程、現実には近づいていく。けれど、どんなに近づいても本物にはならない」
「でも色々な物理的な事、計算して予測したりするんでしょ？　こうすれば理論上行けるとか」
「理論上行けるは、〝箱庭の中なら行ける〟と言っているにすぎないよ。現実に起こる事を直接計算している事にはならないね」
「そっか」
「現実を見て〝多分今起きている出来事にはこんなルールがありそうだ〟って予想する。そのルールだけ抜き取って、箱庭を作る。そのルールしかない世界を。でもそのルールしかないから、例えば投げた球は真っ直ぐにどこまでも飛んでいく。
　それじゃ現実とかけ離れすぎているから、重力と地面というルールを足す。さっきより少し、現実に似た事が起こる。でも、まだ似てない。またルールを足していく。段々

と、近づいていく」

彼はレポート用紙に、簡単な絵を描いていった。

宇宙空間のように、人が投げたボールがまっすぐ飛んでいく絵。

地面があって、人の投げたボールが弧を描いて地面に落ちる絵。

向かい風が吹いていて、ボールがさっきより手前に落ちてしまう絵。

「でも、人間は神様じゃない。見よう見まねで現実に近づくルールを探していくだけなんだ。せっかくボールだと現実っぽい動きになってきても、ボールを紙ヒコーキに変えて計算したら現実と全然違った動きをしてしまう。だからまた、現実に近づくルールを探して足して現実の動きに近づけていく。これを延々と繰り返す。物理学は、大雑把に言えばこんな感じだね」

こんな風に彼は淡々と、けれどとても楽しそうに質問に答えた。

どうしてそんなに楽しそうに話すのだろう、話せるのだろう。もしかして私が知らないだけで、本当に面白いのかも知れない。そんな風にどんどん思えて来て、気がついたら一番苦手だった物理学の話を聞き入ってしまう自分がいた。もしも彼がつまらなそうにただ答えていたら、今とは違った印象になっていたかもしれない。

また、彼は私が退屈しないように興味を持つような話し方もよくしてくれた。例えば、最初に答えられなかったヒステリシスについてはこんな風だった。

「これ、よくわかんない」
「ヒステリシスというのは、ある物に力を加えてから、力を加えるのをやめても、物はもう元には戻らないっていう現象の事だね。ヒステリシス曲線は、それを数値で表したものにすぎないんだ」
　一度折り目のついてしまった紙は、折り目と反対側に何度か曲げれば折り目は浅くなる。けれど消えはせず、うっすらとでも残ってしまう。そういう現象に名前がある、それだけの事らしかった。
「この現象は色々な物で起こるから、ヒステリシス曲線を利用した技術がたくさんあるんだ」
「ふうん」
　けれど正直、私には何故そんな事が教科書に載る程の事なのか、それ程凄いものなのか分からなかった。それが何に使えるのだろう。
　そう考える私の思考を察したかのように、彼は少し声のトーンを変えてこう続けた。
「でもね・・・・・それ以前に、僕はこの言葉が好きなんだ」
「言葉？　どうして？」
「ヒステリシスは、日本語では履歴効果とも訳されるんだ。最初に加えた力は、ずっと消えずに残る。たとえ打ち消す程の力を加えられても、打ち消しても、その影響は残り続

ける。だから履歴効果。・・・・・・例えば僕が何かをした後に、どこかにいなくなっても、そこには僕のいた痕跡がちゃんと残るし刻み込まれる。そういうものが物理的にあるんだって分かると、なんだか安心するんだ。・・・・・・これは、ちょっとたとえ話としては分かりづらいかな？」

刻む、刻み込む。私がいた事を、私のしてきた事を。

それはまるで、絵を描く事と同じように感じられた。

私はここにいたんだと、私が感じている今はこれなんだと、未来の自分にさえ残すように、描いた絵のように感じられるように。

「・・・・・・それって、なんだか絵みたい」

「ちょっと、身近に感じた？」

「ちょっとだけ」

「じゃあ、履歴効果がどんな風に〝履歴として残されていく〟のか、知りたくない？」

「ちょっと、知りたい」

彼は、こんな風に私の興味を常に引こうとしながら勉強会をしてくれた。

それはまさに、今までの勉強が〝お勉強〟にすぎない事を感覚的に思い知らされるもので、けれどそんなことはまったくどうでもよくなる程に、新鮮で未知の体験だった。

無機質に並んでいた文字の意味が分かる、その面白さ。教科書の中だけで完結してい

たものが、現実と、日常と、そして私と繋がり、明滅するような感覚。
気がつけば彼に頼り切りになりながらも、勉強が嫌いではなくなっていく自分がそこにいた。
こんな調子で、勉強会は続いていた。そして今日、その成果は思っていた以上ものとなって現れたのだった。
――翌日、彼と待ち合わせたのはカフェではなく図書館だった。
彼は内容によっては、資料が豊富だからと時々街の図書館を指定した。そして分厚い本を片手に話す彼は、いつも以上に楽しそうだった。
彼はいつも私より先に着いていて、今日も事前に言われていた席に座っていた。既に机の上に数冊の本が置かれていて、彼も本を読んでいた。
「お待たせ、兄さま」
本を読んでいる時の彼は、話しかけるといつもゆっくりと顔を上げる。
まるで潜っていた本の世界から、段々と戻ってくるかのように。
「やあ」
そして彼の第一声は、大体これだった。
席に座るなり、私は鞄から封筒を取り出して渡した。学校を出る前にＳＮＳで伝えてはいたけれど、やはり細かい結果を見せたかった。

「・・・・・・なるほど、いいね。ちゃんと上がってる」
　彼は別段驚く様子もなく、模試の成績表を見ていた。
「私まだ、信じられなくて」
「どうして？」
「だって、こんなに短期間に。今までは頑張ってもこんなに伸びなかったし」
「でも、ちゃんと今日までやってきたでしょ？」
「それは、そうだけど」
「つまり、やり方が合ってたという事だね」
　そう言って成績表を返すと、コーヒーを飲んでから彼は不敵に笑った。
「じゃあ、同じ感じで引き続きやろうか」

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ⅶ―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

休日の朝という時間帯のせいか、図書館は静かだった。

公共施設特有の、静まりかえった雰囲気は日本もヨーロッパも変わらない。入口を抜け、受付で自習室を借りる手続きを済ませる。部屋に入る前に何冊か本を選び、部屋番号を彼女にＳＮＳで送る。

もうすっかりこの一連の動作に慣れてしまった事が不思議で、内心笑ってしまう。僕が誰かに、しかも定期的に勉強を教える事になるなんて。

けれどそれは嫌いという事はなくて、むしろ僕はこの時間に、この日々に、とてもやりがいを感じていた。

誰かに教えるという事は一種のゲームのようだ。

たとえ理解に高度な前提知識が必要なものであっても、それを誰にでも分かるくらい

整理した説明で、瞬く間に理解出来るくらいの解説で話していく。誤魔化して説明してしまえば減点、より簡単に分かりやすく説明出来れば高得点。

そんなゲームは、難しい内容である程、教える相手が最初に分かっていない・苦手だと思う内容のものほど挑戦したくなった。

今までどんなに学校で習っても、ネットで調べて本で読んでも分からなかった事を、僕の説明だけが突破する。僕の説明の前後で、同じものの見方が百八十度変わる。いや、変えさせる。

シンプルで、前提知識ゼロでも理解出来る程の説明を用意する事は難しい。当たり前に使ってきた専門知識を小さな子供にも分かるように教えるという事は、それだけ本質的な理解を要求される。

感覚的に理解出来ると深追いして来なかった言葉も、説明のために見返して調べ直す事が多くなった。あれだけ当然だと思っていた話一つ一つを調べ直し、再確認していく。この用語は本当に今までこうだと思っていた意味で本当に合っているのだろうか？　この理論は、もっと簡単に置き換えたらどんな説明が出来るだろうか？

人に教えるには倍以上理解していなければならない。そんな言葉を聞いた事があったけれど、やってみるとそれは確かに実感するものだった。

説明には多少の自信があった。けれど、それがどれ程彼女の理解に直結しているかと

いう懸念は残っていた。でもそれが杞憂だったと、ＳＮＳで届いた模試結果が教えてくれた。

まだまだ始まったばかりの地点だけれど、このゲームで僕が取った〝戦略〟は間違っていなかったみたいだ。たぶんこのまま入試まで行く事が出来ると思う。

「入試、か」

そういえば今まで教える内容ばかり気にかけてきたけれど、彼女の第一志望は美大だった。絵に関しては美術予備校に通っているから、あとは学科だけだと彼女は言っていた。

だから僕は彼女の絵の実力も、彼女の絵そのものも見たことはない。

正直、僕には分からない世界だ。けれどここまでする彼女の、彼女にとっての絵とは何なのだろう。

年齢を偽ってまでアルバイトをし、予備校を掛け持ちしようとし、そして今は僕と欠かさず勉強会をしている。その原動力は全て、美大に行く事にある。話していて、それが揺らいだ事は出会ってから今日まで一度もない。そこまで夢中になれるものなのだろうか。僕には、正直分からなかった・・・・・・。

僕は難問を解くのが好きだ。挑戦するのが好きだし、誰も解けない誰もが頭を抱えているそれに、持てる知識や能力の全てをかけて、美しく早く答えを出す快感を知ってい

る。

学術的な難問は美しく走り抜けるゲームのように思えるし、困っている人の課題を解く事は、解決を通して誰かを良い方向へと変える事だと思ってる。

誰よりも早く僕が解く事で、僕だけが解けるのなら、解く前と後で世界は少しだけ良い方向に変えられる。そう信じられるから、僕は。

でも、絵を描く感覚とは何なのだろう。まるで彼女は、自分の全てをかけているかのように絵に、美大に向かう事に取り組んでいる。そこには僕がまだ知らない、何かがあるのだろうか。そこに僕の探しているものが、あるいはそのヒントがもしあれば・・・・・・。

「お待たせ、兄さま」

悶々としていた思考は、明るい声で中断される。僕は意識の世界からゆっくりと顔を上げ、現実の世界に戻った。午前の白い光の中に、彼女が座っていた。

「――全ての物は、分子が集まって出来ている。分子は、原子が集まって出来ている。この原子は、原子核と電子が集まって出来ている。原子核は、陽子と中性子で出来ている。高校の物理学で理解しておけばいいのはここまで」

「うん」

原子核の周りを電子がまわる絵を彼女に見せる。教科書のような簡単な線の図では

なく、立体的で綺麗に色づけされた図。

僕は必ず、どんなに簡単な事を説明するのにも絵や図や簡単な表を書いた。

彼女が〝書かなくても分かるよ〟と言えば、〝じゃあ、余計にちゃんと書かなきゃね〟と返した。

分かってるという思い込みが学ぶ事を妨げる。無知の知が、まずは勉強のコツだ。

「電気的には、中性子は電荷を持たない。つまりゼロ。陽子は＋の電荷を持つ。そしてこの＋電荷に引き寄せられて、電子が陽子と同じ数集まってくる。まさに磁石と同じだね。N極を三つ置いておけば、自然にS極が三つ引き寄せられてくっつく」

「何故電子だけが引き寄せられるの？　陽子は引き寄せられないの？」

「陽子も電子も同じ力で引き合うよ、この辺は磁石と本当に同じだね。でも〝重さ〟が違う」

「重さ？」

「そう。陽子と電子、二つとも同じ力で引き合う。でも、陽子は電子に比べてものすごく重いんだ。具体的には千八百四十倍の重さを持っているね。中性子も千八百四十倍。つまり、同じ力で引っ張り合いながら、電子よりも原子核は三千六百八十倍の重さがある。もし磁石のように原子核と電子を机の上に置いたら、原子核は重すぎてまったく動かず、軽い電子だけが動いて陽子に引っ張られるね」

「単純に重さだけの違いなんだ」
「そうだね。だから電子回路では常に〝電子〟が動く。もしも陽子が軽く、電子が重ければ〝陽子回路〟と呼ばれていたかも知れない」
「変な名前」
「そう？　僕は気に入ってるよ。陽子回路だってあり得るって分かれば、高校レベルの原子についてはきちんと理解出来ていると言えるからね」
「ふーん」
「原子は簡単なようでとても重要なんだ、特に重さが。さっき言ったように原子の重さはほぼ半分を陽子、残り半分を中性子、そしてわずか三千六百八十分の一の重さを電子が持っている。だから化学では、電子が軽すぎるから陽子と中性子の数だけで質量数を見るんだ」
「どうして急に化学の話につながるの？」
「化学も物理現象を研究する分野だからだよ。原子や分子の物理学と言ってもいい。ただ複雑すぎて物理学では解析できないとか、歴史が違うといった理由から化学として物理学と分けられているんだ」
「ふうん」
　彼女の返事は、たまに素っ気ないものだった。

それでもそれが内心興味を持ったり理解しはじめているか、説明を本当によく分かっていないのか、最近段々と分かってきた。

同時に、相手が退屈しているかどうかもなんとなく分かるようになっていた。表情だけではなく仕草や反応も全て込みで見た時、それは分かる。誰かに説明をするという行為をある程度経験しないと、分からない事かもしれないとぼんやり思った。

「・・・・・・ちょっと、休憩しようか」

「うん!」

時計はいつの間にか、午後三時を指していた。コーヒーブレイクにちょうどいいタイミングだったかも知れない。

図書館の自習室は飲食が許可されていたから、勉強会の時はお互い食べ物や飲み物を持参していた。

「兄さまはいつもイチゴね」

「そうだね」

「好きなの?」

「うん。でも日本ではあまり果物を頻繁に食べる習慣がないらしいね」

「高いもの」

「確かに高いね、でもおいしいよ」

どこで買っても大抵おいしいイチゴが食べられるのは、日本に来て良かった事のひとつかもしれない。

僕はいつも、休憩には好物のイチゴを持ってきていた。と言っても、今日は朝からだったので保存の利くドライフルーツだった。

そういえば、休憩時の彼女の手にはいつも紙コップに入ったコーヒーやお茶があった。そして今も。

勉強中は物を食べないという人もいるけれど、僕が渡せば食べるからそういう訳でもなさそうだった。けれど、自分で持ってきている所を見た事がない。

「君は今日も、ここのコーヒー？」

「うん」

「なんで？」

「タダだから。お金ないもの」

「えっ、でも塾に通う必要はもうないし、バイトも続けてるよね？」

「うん、シフトは減らしたけどね。画材って、お金かかるのよ。それにコレだけあればいいって最初は思っていても、手持ちがあるとアレも使ってみたいこれにも挑戦してみたいって。画材は増えるほど、色々な選択肢につながるの。もちろん画材コレクターになっちゃって描くのを怠っては本末転倒だけど、あって邪魔になるものでは決してない

から」

「なんだか、僕には分からない世界だ」

「そんなことないよ。例えば、兄さまのそのヴァイオリン」

そう言って彼女の指さす先、僕の傍らには愛用のヴァイオリンが入ったケースが置いてあった。

この図書館は街の公共施設の中にあったから、同じ建物内には他にも色々な設備が入っていた。その中には防音室もあり、彼女を待っている間にはよくそこを借りてこれを弾いていた。

一度だけ、彼女の前で演奏した事もある。彼女は、まるでプロみたいな演奏だと褒めてくれた。

どうしてそんな演奏が出来るのかと聞く彼女に、義親の影響で幼少期から音楽には触れていた事、同様に昔から演奏はある程度好きだったし出来たので、ずっとやっているという事を話した。

〝なんでその道に進まないの？〟

そう聞く彼女に、僕は「これは趣味なんだ。この先何かしようとは思わない、ストレス解消や、楽しみ程度だよ」と答えた。それは僕にとって自然な答えであり、誰に聞かれても答えてきた、当たり前の返答だった。

「・・・・・・・そう」

けれどそれを聞いた彼女の目は、何故か冷ややかなように感じた。今思えば、美大へと進む彼女には僕は少し歪に見えたのかも知れない。

「兄さまは、楽器は一つだけ、それも入門用のものがあればいいって思う？」

「うーん、楽器の優劣を付けるわけじゃないけれど、やっぱり限度は出てきてしまうね。なにより長時間向き合う物だし、かける時間を考えればある程度の物は必要だと思うよ。それに一つの楽器だけでは分からない事が、他の楽器に触れることで分かる事もある。弦楽器や打楽器のような分類だけでも違うし、同じ分類・種類のものでもメーカーの違い、いや商品の違いでさえ変わる事がある。アナログなものだから個体差もあるし、使い込みや使いこなし、慣れも影響してくるね」

「なんだ、分かるじゃない」

「えっ？」

「おんなじよ、画材とまったく一緒。そういう表現が出来れば良かったんだろうけれど言葉が思いつかなくて。兄さまはやっぱり説明が上手ね」

彼女は普段使うペンケースとは別に、布地の箱形ポーチを取り出した。

開けると、まるで小さなフォトアルバムのように〝ページ〟が何枚かあり、そのどこを開いてもびっしりと、長さのバラバラな鉛筆が綺麗に整列していた。

「全部同じに見えるかも知れないけれど、メーカーも種類も違うの。用途によっても気分によっても使い分けるから、選ぶのに悩まないようこうして綺麗に並べてる。それに自分が使う道具、それも信頼出来る道具だけを吟味して詰め込んだこの箱は、何より私の宝物なんだ。これがあれば何だって描けそうな気持ちにさせてくれる」

彼女の目線は、本当に宝箱を開けて中の宝石を一つ一つ愛でているかのように見えた。僕には違いの分からない鉛筆が並んでいるように見えても、彼女には全てが違い、そして輝いて見えるのだろう。

午後の光を浴びて、優しげな目線を落とす彼女の周囲には、彼女には確実に見えていて、僕には見えていない世界があった。

そこに明らかに、目に見えない壁がある。僕の知らない世界の壁が。どんなにキラキラと輝いて見えても、今の僕では決して行く事の出来ない世界が。

そういうものは、この世に数多く存在するのかも知れない。けれど今、僕の目の前で確実に存在しながら、触れられないものに直面した今、僕は透明な壁の向こう側を見たい衝動に駆られた。彼女の目には何が映っているのだろう。明らかに彼女には見えていて、僕には見えない物が。

もし、もしもこの壁の向こう側に行く事が出来たなら。彼女と同じ光景を、見る事が出来たのなら。絵については知らない、描こうと思った事がない。けれど、いやだから

こそ――。

〝探求だよ。君は、探求すべきだ〟

叔父さんの言葉が、脳裏によぎった。

「ねぇ・・・・・・教えてくれる？　その、画材とか、描くって、どんな世界なのか」

彼女は一瞬驚いた表情をしてから、目の色を変えた。

「じゃあっ、行ってみる？」

彼女は弾けんばかりの笑顔になると、勢いよく立ち上がった。

――連れて行かれたのは、大きな画材店だった。

本や画像でしか見たことのない、用途も分からない物が所狭しと並んでいた。

「こっちこっち！」

彼女は弾けんばかりのテンションで、僕をコーナーの一角に呼び寄せた。そこには無数と思えるほどの鉛筆が棚を埋めていた。

「これは・・・・・・全部普通の鉛筆？」

「〝デッサン用〟の、鉛筆」

「違いがあるの？」

「大違いよ！　例えばコレ」

彼女はワインレッドの軸の鉛筆を棚から取り出した。僕でも知っている日本メー

カーのロゴが描かれている。
「これは老舗にして王道と呼ばれる、デッサン用高級鉛筆。プロももちろん使うけど、美大受験する学生もよく使うわ」
「鉛筆でも、そんなに変わるもの？」
「むしろ受験生の方が影響を受けるくらいね。残念だけど・・・・・受験生はプロより技術で劣る、現役生なら尚更ね。だからこそ画材、特に筆の類いは、一定以上の水準のものを選ばないと後で痛い目見る事になる。弘法筆を選ばずなんて言うけど、裏を返せば余程の技術力がなければ筆は選ぶべきだとも言えるわ」
　そう言いながら、まるでうっとりするような目線で彼女は鉛筆を見つめた。
「それにこのシリーズは、日本、いえ世界最高クラスの品質を持つ名品なの。厳選された黒鉛と粘土で作られた芯は不純物を極力排除しているから、もう言葉に出来ないくらい滑らかな書き味で。よく言われるのは〝しっとり〟、でも慣れてくると凄いのは、質感を描こうとしたときに抜群の威力を発揮すること。とにかくここまで描ききりたい！　って完成形が見えていればいる程すごく頼りになるし、時には自分が思っている以上のものを紙面に描き出してくれる。細かく繊細な部分程、確実に〝描かせてくれる〟鉛筆ね」
　話し終える間もなく、今度は青い軸の鉛筆を手に取った。

「・・・・・・正直、さっきの鉛筆が最高の品質で文句なんてなかったから、他の鉛筆なんて使わなくて大丈夫って最初の頃は思ってたんだけど。これを知ってしまってから、世界が変わっちゃった」

それはどちらかというと、ヨーロッパでよく見るメーカーのものだった。日本でも売っている事が意外だったけれど、聞けば昔から日本でも人気なのだという。

「描き心地はなめらかっていうよりザラザラでね、正直たまに中の芯が折れてたりもするからさっきのには及ばないかななんて最初は思ってた。でも、描いた途端にびっくり！　試し書き程度に短い線を引いた時は全然ピンと来なかったのに、いざ絵の為の〝線〟をすっと引いた途端、思っていた通りの線が一発で綺麗に引けちゃって。どうして？　なんで？　って思わず混乱しちゃった。でも本当に思った通りの線が引けちゃう。さっきの鉛筆では苦戦したモチーフも、びっくりする程描けちゃう。使ってて気付いたんだけど、しっとりで滑らかな書き心地のものって、言い換えれば〝湿ってて少し重い〟筆みたいなものなの。だから、模索しながら描こうとした時や完成形がまだはっきりしていない時は、余計に筆が〝重い〟感じになるみたい。でもこれは、滑らかなのにさらりとしていて、長時間使ってても〝紙に沈まない〟感じ。軽いっていうのかな。だからゼロから描く時でもまるで紙と自分の手が、時には頭が一体化したみたいに思い描いたものそのままに描ける。人間工学って言うんだっけ？　本当に描いたら分かる、ザラ

ザラさえ描く目的に特化して考えられたものだって感じるような作り。描く前はそこまで？　って思ってたけど、描きだしたら魔法みたいに、手からインクが流れ出すみたいに描けちゃう。描き心地が軽いから、ボリュームのある内容でも構図レベルなら〝最後まで完成させてしまえる〟力をくれる、ホントに不思議な鉛筆。だからモチーフや状況に応じてどちらを使うか決めたり、段階毎に使うものを変えたりしてて」

濁流のように押し寄せる情報に、僕は混乱するばかりだった。

「・・・・・・好きなんだね、鉛筆」

「もちろん。思い描いた絵を描く為に、どれ程試したか分からないわ！」

更に彼女の〝解説〟は続いた。

「本当に目の前のモチーフの質感を捉えるなら、黒じゃなくて白が重要なの。ただ黒で描き込むだけじゃダメ。ほとんど黒が乗っていない白い紙面が、急に立体的なモチーフに見えてきてからが勝負ね」

「消しゴムは消す以上に〝白で描く〟道具なの。デッサンでプラスチック消しゴムを毛嫌いする人もいるけど、本当の〝光〟は真っ白だから、このタイプの消しゴムが威力を発揮する。グラデーションの究極、紙面の汚れにさえ見えそうなわずかな灰色が、圧倒的な質感を生む瞬間があるの。それが目の前で起こると、もう全身に電流が走る感覚になってね。本物の魔法を目撃しちゃったみたいで」

「写実的なデッサンって最初は難しく感じてたけど、目の前のモチーフから〝かっこよさ〟を見つけ出して、それを他の人にも伝えられるように描こうって思ってから一気に面白くなったの。ただただ写実的にするなら写真を撮ってグレースケールにすればいい、でも〝写真以上〟に伝わる印象、写真だけじゃ伝わらない〝かっこよさ〟を紙面に焼き付けてやろうって思ったら、描いても描いても終わらなくなっちゃって」

とめどなく話す、というのはきっとこういう事を言うのだろう。

知識はまるで分からないし、ロジックが追いつかない。論理の飛躍も激しい。高度な学術書を読んでいても感じなかった類いの疲れを、感じていた。でも、それなのに・・・・・・・。

どうしてか、その〝熱意〟は伝わってきた。それも痛いほどに。

絵を描くことも彼女が語る数々の経験も、僕は一度も体験したことがない。なのに感覚を揺さぶられる、〝共感〟してしまいそうになる。いや、もうしかけていた。それはとても不思議な感覚だった。

普段とまるで見た目は変わらないのに、何故かその時の彼女には、太陽の光を受けて輝く向日葵のような印象を強く感じていた。

店を出ると、空には夕陽の色が滲みはじめていた。

彼女は話し疲れるどころか、むしろツヤツヤとしているように見えた。

「ごめんね、話したいことばっかり話して」
「いや、うん」
「でも、なんだか少し分かったわ。兄さまの気持ち」
「うん・・・・・・・え？」
話が飛躍しすぎて、僕は反応出来なかった。
「本当に自分が好きな事って、こんな風になるのね。話すほどに楽しくって、伝えたくって、もっと話したくて。兄さまの授業、冷静だけどそういうの感じるもの」
そういうものなのだろうか。まるで今まで意識していなかった、そんな事。
彼女も今の僕と同じような感覚で、普段僕の説明を聞いているのだろうか。だとしたら、僕もまた彼女の感覚を少し〝理解〟できた事になるのかもしれない。何故だろう。複雑で、少し笑える。
誰かを、言葉や文字の上だけでは理解出来ない部分で〝理解〟できたという事は、僕の中の何かを熱くさせた。
今まで逆立ちしても得られなかったその〝感覚〟に、触れられるかもしれない、分かるかもしれない。そのチャンスが、今目の前に唐突に現れた。その事実に、自分でも驚くほど高揚していた。もしも今、踏み出すことが、手を伸ばすことが出来たなら。
「・・・・・・ねぇ。もしも君の〝絵〟を見たいって言ったら、見せてくれる？」

緊張していることを悟られないように、僕は口を動かす。すると。

「――見たいの？」

彼女の顔からは、さっきまでの笑顔が嘘のように段々消えていき、やがて真剣な表情になった。

声色も明らかに変わっていた。彼女は瞳孔が開いた猫のように、じっとこちらを見つめた。それは、興味本位でむやみに立ち入るなという意味なのかもしれない。

けれど・・・・・僕は引き下がらない。ここで引いてはならないと、頭の奥で叫ぶ声が聞こえた。それに決して、軽い気持ちではなかった。

僕は、本当に知りたかった、確かめたかった。彼女が〝一番大切にしているもの〟を、彼女の見ている世界を。

「見たい」

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ・Ⅷ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

「見たい」

彼女にそう答えてから、いやそれ以前に絵の話を持ち出した時から、彼女との間の空気は一変した。

気まずいとか険悪といった類いのものではなかった。

ただ今までにない緊張し張り詰めた空気が、一気に場を支配した。全てを染め上げ、まるで世界に二人きりになったみたいにしんと静まりかえる。空は赤く染まりはじめていて、まるで知らない世界に迷い込んだような気分になった。

もしかしたら、普通ならここで「冗談、気にしないで」とでも言うのかもしれない。でも僕は・・・・・・知りたかった。いや、知らなければならないと感じていた。

彼女は真剣な表情で、答えた後もしばらく僕の目を見つめていた。

僕よりも背が低く小柄なのに、どうしてそうも力強く貫くような視線で見る事が出来

るのだろう。にらむ訳でも何かを訴える訳でもない、むしろ逆の目。何かを伝えたいんじゃなく、僕という存在そのものを見定めようとしているかのような目をしていた。カメラのレンズのように、判定するようにただじっと彼女は無言で僕を見つめ続けていた。

それがどれ程の時間だったかは分からない。恐ろしく長く感じたけれど、実際は一瞬だったのかもしれない。

「・・・・・・分かった。兄さまになら、見せる」

低いままのトーンで、彼女はそれだけ言った。そして僕達は、彼女の家に向けて歩き始めた。

余計な会話はなく、歩きながら訥々（とつとつ）と話す彼女の言葉を僕は慎重に聞いた。

美術予備校以外では誰にも自分の絵を見せたことがない事。家にはデッサンしたものもあるけれど、〝自分の絵〟を見せるのならオリジナルで描いたものを見て欲しいという事。絵に関しては、偽る事が出来ないという事。

〝自分の内臓を・・・・・・晒すようなものなんだよ〟

絞り出すように、彼女はそう言った。

そこには普段見せない、別の顔があった。明るく活発に話す彼女とは、一線を引いた

表情だった。

一切の余裕を彼女はなくしていた。それくらい、真剣になっているのだという事が嫌でも伝わってくる。これが彼女の〝本来の姿〟なのかもしれない。いや、人に本来の姿なんてなく、ただただ〝大切な物と接している時の自分〟があるだけなのかもしれない。そして今、僕はその状態の彼女と〝会っている〟。

冷淡と思われるかも知れないけれど、燃えるような何かが確かに存在し、それは彼女の中にあるという事を、僕はその様子から確信していた。

彼女の家を見るのは、それがはじめてだった。

後ろから太陽光で照らされていたから、正面が影になっていて、まるでそびえる城のように見えてしまう。決して怖い訳ではないのにそう見えるのは、たぶんここで、彼女の絵をはじめて見る事になるからだ。

彼女の部屋は二階の奥だった。至って普通の家で、彼女自身もそう言っていた。両親はまだ働いている時間らしく、二人しかいない家の中は驚くほどしんと静まりかえっていた。

「準備するから、待ってて」

それだけ言って、しばらく彼女は出てこなかった。

部屋から物音だけが続いて、やがて止んだ。部屋から出てくる彼女はより一層張り詰

めた表情をしていて、そして入るようにと言った。

「私、外で待ってる」

そう言って彼女は廊下から動こうとしなかった。僕は一人、彼女の部屋に入った。

そこにはキャンバスがひとつ中央に置かれていた。布がかけられていて、何の絵かは分からない。〝自分で、外して。準備が出来たら、自分で〟彼女はそう言っていた。夕日が差し込む部屋は、キャンバスと僕の影だけが、異様に長く後ろにのびる。僕はキャンバスの前に立ち、軽く一呼吸置いて布を取った。

それは、風景画だった。

そして次の瞬間、僕は風景画の中にいた。風景画の中の丘に、確かにそこに〝立っていた〟。その絵を、光景を見た者と同じように、そこにいるかのように、僕は絵の世界に入り込んでいた。

目の前には、さっきまで室内に満ちていた夕日の色にさえまるで負けない、鮮やかな夕焼けがあった。弧を描く丘の向こう、山々の先、地平線の真上に、静止した彗星のように燃える太陽があった。

空は見事に赤く染まり、鳥の群に見える影だけが太陽と雲の合間に小さく見える。そして・・・・・丘の上には、奇妙なシルエットの影が浮かび上がっている。それは、恐竜だった。

そこでようやく、この風景が有名な児童書「恐竜の影」のワンシーンなのだと気づいた。主人公が数々の困難を乗り越え、恐竜達が絶滅しなかった世界と隣接する、地球上で唯一の場所にたどり着く場面。そこで主人公は、ついに念願だった恐竜達の影を夕日の中に見つける。

別々の世界だから行く事も直接見る事も出来ない、けれど隣接した世界の影だけが、太陽光が赤々と燃える日にだけ、世界の境界を越えて見る事ができる。主人公は息をのみ、その光景を一瞬たりとも見逃さないようただただ見つめるというシーン。

僕は絵の中で、その主人公の真横に立っていた。いや、正確には主人公そのものになっていた。全身を覆う朱色の光、冷たい湿気を帯びた風、夜に向かう間際の空気。そして今、焦がれた光景が目の前に浮かび上がっている。

影しか見えない恐竜達の悠々とした動きが見える、巨大すぎて霞んでいる長い首の先の頭部が見える。重なりあった別々の種類の影が見える、奇跡のような瞬間が、見える。

僕は主人公と同じように、呆然から立ち直り素早くカメラを構えてシャッターを・・・・・・。

そこで僕は、彼女の部屋に戻った。

正確には、彼女の部屋に居てこの〝絵〟を見ていたのだと思い出した。

引きずり込まれた。体験した事なんてないはずなのに、僕は〝絵の中に引きずり込ま

れ〝てその場に立ち、目の前でその光景を見た。無論、物理的にそこに立った訳でも絵の中に入り込んでいた訳でもない。

それでもその絵を見た瞬間、僕は確かにそこにいた。

今まで素晴らしい本や理論に出会った時にも、まるで新しい世界にトリップしたような気持ちになる事があった。本を読み終えたら朝になっていた時などは本の世界と、今本を閉じ眠りにつく世界のどちらが自分の住む世界なのか、一瞬混乱してしまったりする。

けれど、それを一枚の絵で体験する事なんて、今までなかった。

そして何より、理屈や理論に関係なく描かれた世界そのものに、否応なしに引きずり込まれた。間違いなくさっきまで、確かに僕は〝丘の上に〟立ってカメラのシャッターに指をかけていた。

しばらくは、呆然と絵の前に立っていた。

部屋を出て狭い廊下に立つと、彼女が少し離れた所に立っていた。

「・・・・・・・どうだった?」

僕は、今したばかりの〝体験〟を、素直に話した。

「・・・・・・・ありがとう」

彼女は、それだけ言った。

僕はそのまま彼女に挨拶し、彼女の家を後にした。

翌日の待ち合わせ場所は、何故かお台場にある人気の少ないカフェだった。海が見たくなった、彼女はそう言っていた。

「ごめんなさい、昨日は。私、余裕なくて・・・・・・こんなことはじめてで」

彼女は口を開くなり、そう言った。何故か少し大人びて見えた。

「・・・・・・でも、嬉しかった。ありがとう、本当に」

瞳が潤んでいて、彼女は必死に涙をこらえていた。僕までつられて泣いてしまいそうになる程。

落ち着くのを待つと、ずっと続いていた緊張の表情がようやくほどけた。そしていつもの、いやそれ以上に屈託のない笑顔で彼女は言った。

「伝わるって、嬉しいね」

僕は、何も言えなかった。

それから彼女はゆっくり、けれどいつもの調子に近い感じで話しはじめた。本だけではなく他にもたくさんものを、例えば実際に見た風景を描いてみたいという事。一番のお気に入りが、六本木ヒルズのスカイデッキから一望出来る海と空の景色だという事。今は時間もお金もないけれど、絶対に美大に合格して思うままに色々な所に出向いて、

その風景を描きたいという事。今年の夏は勉強ばかりだったけれど、来年の今頃はきっと今まで以上に以上にたくさんの絵を描いているだろうという事。その日の勉強会は、彼女の話を聞いて終わった。

カフェを出てからモノレールの到着を待つ間、プラットホームに立つ彼女は暮れる夕日を食い入るように見つめていた。

「描きたいな・・・・・・」

独り言のように、そう小さく呟いた。海風が彼女の髪を揺らす、オレンジ色の太陽光が愁いを帯びた顔を照らす。

「ねえ、兄さま。これあげる」

手渡されたのは一本のシャーペンだった。

「兄さまのペンケース、見てびっくりしちゃった。鉛筆もシャーペンもないんだもの」

「あんまり、使わないから」

「それでも使う時はあるかもしれないじゃない。それ、すっごく使いやすい私のおすすめ。ずっと使ってても疲れにくいし、何より書きやすいから。今日、私の話に付き合ってくれたお礼。高いものはあげられないけど、使い心地は絵を描く者として保証します」

彼女はそう言って、おどけてみせた。

「・・・・・・ありがとう」

こんな風に物をもらう事なんてはじめてだった。そうして手渡された時の感覚は、とても不思議なものだった。彼女と別れひとり帰路につく間も、その事をぼんやりと考えていた。

きっとこれから先も、ポケットの底に入ったこのシャーペンのケースに触れれば瞬時に同じ感覚がよみがえるだろう。そう、思った。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ⅸ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

帰ってからはすぐに、ベッドに身を投げた。仰向けになると、窓から夜の青い光が白い天井に向けてのびていた。それを見つめながらぼんやりと考える。

彼女の語った絵の事、見ている世界。

正直、今まで勉強を教えては来たけれど美大に入る事については関与しなかった。その先をどうするのか、美大で何をするのかも分からないし分かる必要もないと考えていた。勉強さえ教えれば、あとは立ち入らないと無意識に決めていた。

理解しろと言ってきたのは自分なのに、彼女の一番大切な絵について、今ようやく知る事が出来た。これからも、出来る事は変わらないかもしれない。それでも気がつけば、僕は彼女を応援せずにはいられなくなっていた――。

いつの間にか、少し眠ってしまっていた。起きたのは真夜中だった。

しんと静かな部屋の中で、またあの絵と彼女の様子を思い出す。真剣で、すべてに翻弄されながらそこにただ邁進する姿。まるで太陽そのもののような熱、エネルギー、眩しさ。目の前に太陽が現れたとき、人は何を想うだろう。僕は・・・・・・。

彼女の持つものを、僕は持っていない。その事が際立つようで、いても立ってもいられない気持ちになった。感化されたのだろうか。

けれど、それを解消する術も対抗する手段も僕にはない。僕には絵の技術も絵にしたいという感覚もない。それでも・・・・・・それでも、この衝動をどうにかしたかった。そうしなければ、どうにかなりそうだった。

不意に机に置かれたヴァイオリンケースが目に入った。少しは気が紛れるかも知れない、そう思って手に取ると僕は部屋を出た。

この家には、屋根裏に防音ブースがある。それは音楽家の義父にとっては必須の設備であり、また自由に使ってもいいと言われたゲスト用スペースは昼夜関係なく配慮せず使える場所になっていた。

扉を閉めると灯りさえつけるのも億劫で、防音室の窓から入る僅かな光の中で、ヴァイオリンを構えた。そしていつものように弾けば、美しい音が鳴り響く。けれど・・・・・・。

僕の頭には、彼女の絵が浮かんでいた。

あんな風に、あんな風にどうして形に出来るのだろう。もしも、僕もあんな物を作る事が出来たら、あんな世界を作る事が出来たなら。

静かな苛立ちと、訳も分からず叫び出したいような衝動が駆け巡った。それらの感情は発散先を求め、不意に手元へと向かった。今までそんな事をしたことなどなかった、でも・・・・・・。

「――っ」

叫ぶように、動かす手に〝感情〟を込めた。

その瞬間、今までに聞いた事のない迫力の音色がヴァイオリンから鳴り響いた。それに一番驚いたのは、僕自身だった。

僕の手は加速した。感情が腕から、手からヴァイオリンの弦へとなだれ込んだ。演奏するなんて意識はなく、そこに僕の〝叫び〟を流し込むような感じだった。そしてヴァイオリンに飲み込まれ終わるかと思ったその叫びが、感情が、震えとしての音に変わる。

今まで演奏の理想は正確無比を意識してきた。むしろそれが当然で、ロックアーティストのような音楽と自分は無縁なのだと思っていた。

けれど、今の僕は何だ？

押し寄せる濁流のような感情を持って、それを楽器へと流し込み叫ぶように奏でている。昔見たヴォーカリストが、インタビューで〝肺から泣きそうになるような、訴える

ような音が出る〃と言っていた。何故か今、その感覚が分かる。

気がつけば、汗だくで数十分演奏していた。どんなメロディが流れていたかさえ、覚えていなかった。

部屋を出ると、倒れそうなくらい身体が熱くなっていた。息も荒く、とにかく水分が欲しくてキッチンへと降りた。水を飲み、服を着替えてようやく落ち着いた。こんな事は今までになかった。何もかもが初めてで訳が分からない、それなのにどうにも晴れやかな気分だった。

ふと、あの防音ブースには自動録音機能がある事を思い出した。戻ると確かに録音されていた。

恐る恐る、再生ボタンを押しさっきの演奏を聴いてみる。こんなところを弾いたのか、こんな風に弾いたのか。聞けば思い出すところもあれば、無我夢中で本当に覚えていない部分もあった。普段なら絶対しないようなペースの乱れや音程のミスがたくさんあった、それなのに・・・・・・。

そこには確かに鮮やかな色彩の音があった、声があった、体験があった。

本当に今まで使っていたヴァイオリンの音なのか、これが本当に自分が今奏でた音なのか信じられなかった。音という絵筆で、燃えるような鮮やかな絵を描けた気さえした。

その事実に、僕は自分でも不思議なほど感動していた。
自分が描ける、感情を表現できる。作ったものが今確かにここにあり、そしてこれからも作る事が出来るかも知れない。それは紛れもなく、僕を震わせた。
理性を越えた快感が確かにそこにあり、そしてそれ以上に満たされるような安心感があった。
あまりに沢山の事が一度に押し寄せて来て、僕は立ち尽くすしかなかった。窓の外を見上げると、見事な満月が浮かんでいた。今までになかったものが確かに、僕の中に生まれたのだとその時気づいた。
真夏にしては驚くほど、しんと冷えた夜だった。

それからの僕は、毎夜ヴァイオリンを弾いた。
それでもまだ、届かなかった。あの日見た絵のような鮮やかな色彩に、体験に、魅せられる引力に。見た途端、その世界に連れ去られる感覚をまた、感じたいと思った。
絵を見ていた時は、とにかく〝熱〟を感じた。
燃えるような焼きつくような印象を。だから僕も、同じように込めるように今確かにここにあるものを、音という形に落とし込もうとした。
あんな風に、僕もあんな風に。走るように、風を切るように僕は弾いた。比較すれば

まだまだで、けれど確かに昨日より様々なものが生まれていた。出来るというレベルにさえまだない試行錯誤の末、たまたま良いなと思える音が出来る。何故出来たのかもよく分からないし、再現性もない。けれど、何故だかずっと楽しかった。

やっている内に、不思議な事に気付いた。

熱や感覚を込めているはずなのに、透き通るような心地よい冷たさを感じるようになった。それは海に身体を浮かべたような、特別な浮遊感。ずっとそこに、浮かんでいたいと思える感覚。

もっと知りたい、もっとやっていたい、もっと演奏したい。形になる程に、僕は夢中になっていった。力強く弾く程に、音はどこまでも高く広く、深くのびてゆく。

「――っ、暑い」

演奏していると、どんなに冷房を強くしても身体が熱くなった。上がった体温に気づかず、ヘトヘトになってからようやくブースを出る。そんな事ばかりしていた。ブースを出て水分補給をして少し休み、演奏した曲を聴いてみる。そんなサイクルがいつの間にか出来ていた。それは苦ではなく、本当に自然とそうなってしまっていた。僕は演奏に我を忘れて夢中になるばかりだった。

今まで、演奏する時はずっと正確性を意識してきた。美しい音色もリズムも、全てを機械のように正確に近づければ良いとどこかで思っていた。けれど今、そこに感情をの

せて弾いてみる。声の代わりのように何かを訴え、伝え、話すようにと意識してみる。まったく同じヴァイオリンがまったく違った音を出す、奏でる。時に自分でも驚くほどの、生きているかのような音を。

〝歌声のように聞こえる演奏がある〟

そんな事をかつて聞いた事があった。その時は技術的なものだとばかり思っていた。笑い声のように聞こえる弾き方があると知っていたから、それに近い物なのだろうと。でも、今はそうじゃないと分かる。

きっと本当に、誰かに語りかけるようにその奏者は演奏したんだ。伝えたい事があり、描きたい情景があり、音にして響かせたい衝動があったからその演奏は聴いている人に確かに〝歌声〟として捉えられたんだ。

僕はたぶん、今まで音楽の半分も見えていなかった。音色や技巧にばかり注意していた。でも、それはほんの一部だった。

音楽は、楽曲は〝既に存在する物〟だと思っていた。その中から選び演奏するのが当然だと思っていた。美しい曲も激しい曲も、全てはまるで最初から用意されていると。

けれど、それは違うと気づいた。偉大な音楽家の曲も、古典や定番と呼ばれる曲も、一音一音人の手で描かれている。一つ一つ、どんな曲でも誰かが、作り上げている。

そう思った途端、教科書で見ていたような音楽家達が、ずっと遠くにいて自分とは無

縁だと思っていた人々が急に身近に感じられた。

この部屋には一台、グランドピアノがある。もしここに彼らがいたらと想像してみる。今目の前に、彼らが今座ったとしたら。

ベートーヴェンは口にくわえた指揮棒でピアノの振動を確かめながら、音符を書き込んでゆく。サティはパリ音楽院を退屈だと飛び出したばかりで、シャンソン酒場での演奏に向け楽しそうに鍵盤を弾く。ショパンは病に冒されつつも、自分の感情や心を一曲一曲に宿そうと静かに筆を執る。

彼らはそこまでして、何を想い何を描こうとして曲を書いたのだろう。

古典と呼ばれる曲を一つ、再生してみる。自分が聞き慣れている事を一度抜きにして一番はじめから聴いてみる。聴きながら、考えてみる。

〝もし僕なら、こんな曲を作れるだろうか？〟

考える間もなく思った。

〝きっと出来ない、僕には〟

こんな音を、こんなメロディの連続を、自分の手で最初から全て作り上げるなんて。彼らはきっと何度も試行錯誤して、それでも自分の想いをただ一曲に込めようとしたんだろう。

偉大だとか偉業だとか、そうやって距離を置いて遠くから眺めていた。関係ない、ど

こか自分とは違う世界の人なんだと。でも、違う。すぐ隣にいたかもしれないんだ、彼らは。それなのに、想像も出来ないこの音楽を自分の手で全て書き上げたんだ。

実感したのは、ただただ単純な〝すごい〟という感覚だった。本当にこんな〝人〟がいるんだ。人は、ここまで出来るんだ。そしてもしかしたら僕も・・・・・・遠く及ばないかもしれない、けれどたとえ一部でも、一瞬でも、僕は。

〝体験することが出来るかも知れない、奏でる事が出来るかも知れない。音楽で何かを、描く事が、表現する事が、作り出すことが・・・・・・出来るかも知れない〟

思った瞬間、またヴァイオリンを手にしてブースに入った。いても立ってもいられなくなった。構えて弾く間際、改めて考えた。

この曲で、この音で作者は何を表現しようとしていたのだろう。何を描こうとしたのだろう。そしてそれ以上に、それさえ理解した上で、僕はこの曲でこの音で、この楽器で。何を表現したいだろう、何を描きたいだろう。

もしかしたら、作者の意図を知りながらも、別の事を表現し、描くかもしれない。不十分な理解の中でもあえて、いや理解した後でさえあえて、僕はきっと、僕の思うままにその曲で、音で描く事を決める、演奏する。

演奏している間は、どんなにありふれた古典であろうと、僕のものだ、僕の音楽だ。だって――

「・・・・・・筆と、モチーフ」

彼女の言っていた言葉が、不意に自分の口から漏れた。

たとえ同じ筆、同じモチーフを同じ場所で描いても描く人の数だけ絵は存在する。それは〝何をデッサンした絵なのか〟ではなく〝何を表現し描こうとした絵なのか〟が違うから。そう、彼女は言っていた。

僕は思うままに、弓を引いた。

演奏を終えて、ブースを出る。すぐに再生ボタンを押し、それから改めて原曲の音源を聴いた。そこには、異なる2つの曲があった。そうか、今までの僕の演奏は〝真似〟だったんだ。とにかく原曲に近づく、それが基準だった。曲を、音楽をただ表面的にしか捉えていなかった。でも、一見無機質に見える曲にさえそこには背景がある。

今まで聴いてきたどの音楽にも、すべてに描こうとしたものが、世界が、形にしようとした何かがある。その背景が、軌跡がある。必ず誰かが何かをもって、一曲の音楽という形にしようとしてきたんだ。

そして今、僕はこの曲で演奏したいと思った事を、表現したいと思った事を意識しながら演奏してみた。

だからこそ、原曲とは〝異なる曲〟をここに作る事が出来た。まだまだ稚拙でリズムも演奏技術も満足なものじゃない、けれど・・・・・。今演奏したこの曲は、僕が演

奏する限り。

「僕の物」

傲慢な考えかもしれない。それでも構わないと思える程、熱い感覚が僕の中に浮かんでいた。

「そうか・・・・・僕は、演奏したいんだ。作り出したいんだ。僕の、音楽を」

それが〝自分の音楽〟を意識する、最初のきっかけだった。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ｘ　―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

彼にあの絵を見せてから、数日が経っていた。

絵について誰かと〝共有〟したのは、あれがはじめてだった。もちろん美術予備校では講評もするし、先生と面談で描いた絵について話す事もある。それでも、それはあくまで〝提出用〟の絵。もちろん手を抜いている訳ではないけれど、それは誰かに見られる事を常に意識して描いた物だった。

でも、彼に見せた絵は違う。

本当に、私が描きたいと思って描いた絵。本気で描いた絵。

もしかしたら、だからこそ今まで誰にも見せる事が出来なかったのかも知れない。見せようとも思わなかったのかもしれない。それでも、彼は言った。〝私の絵〟が見たい、と。

言われて、真っ先に思い浮かんだ絵があった。誰に何と言われようと、私の絵だと言える数少ない絵。その中でも〝彼に見せたい〟と直感的に思った絵。

彼が部屋で絵を見ている間、身体の中にはマグマのように熱された心臓が脈打っていて、けれど氷のように冷たい血液の流れも感じていて、それら二つが同居しているような、どうにかなってしまいそうな気分だった。ドアが開くまでそれを鎮めて落ち着こうとするので精一杯だった。

彼の話す絵の感想さえ、聞くのに徹する事しか出来なかった。それでも「・・・・・・ありがとう」とだけ振り絞り、その日は終わった。

どうにか落ち着くことが出来たのは翌日になってからだった。いつものカフェで会うと、私は素直に彼と話す事が出来た。

「ごめんなさい、昨日は。私、余裕なくて。こんなことはじめてで」

それでも、感情の昂りは中々抑えられなかった。

「・・・・・・でも、嬉しかった。ありがとう、本当に」

落ち着いていたはずの感情はぶり返し、彼をしばらく待たせ困らせてしまった。それでも、想いを伝えることは出来た。

「伝わるって、嬉しいね」

彼に分かってもらえたことが、伝わった事が思っていた以上に何倍も、何倍も嬉し

かった。その一言を話すのに、涙が出そうになるのを必死に堪えていた。

それからも、彼との勉強会は続いている。互いを知り合った為か、以前にも増して勉強会はスムーズに進んでいる。そしてその成果を反映し、成績も確実に伸びていた。あんなに悩んでいたことがまるで嘘のように。

そしてその〝伸び〟は、自分が確実に〝目標〟に近づいている事の指標のようで、私は純粋に楽しかった。もちろん勉強会自体も分かる程に楽しい部分が増えてきていたけれど、やはり目標に近づく安心感や高揚感は別格だった。

あの日以来、彼は私の絵に触発されてヴァイオリンで〝形のない、けれど確かに存在するもの〟を奏でられるように、日々練習をしはじめたと言った。私の絵で、はじめて何かを変えられた気がした。それも、良い何かに。少し救われた気がした。

すべては順調だった。志望校の合格ラインに触れられる目処も立った。

けれど・・・・・・。

「――摩擦力というのも、イメージが出来ればすごく分かりやすいし画期的なんだ。ギザギザな床にぴったりはまるギザギザな板を置いてあったとする。動かそうと思って指で押しても、なかなか動かない。強く押しても、次の溝にはまってすぐ停まってしまう。じゃあヒモでもつけて無理矢理引っ張ったらどうなるかな?」

「ガタガタいいながら、引きずられるんじゃない?」

「そう。そして引っ張るのをやめたらまた、溝にはまってしまう。でも、勢いよく引っ張り続けたら？」
「もっと早く、引きずられる？」
「どうして？」
「あんまり早く引っ張ったら、浮いちゃうから」
「そう。つまり床と擦れる部分がどんどん少なくなるんだね、だから」
「擦れる部分があんまりなければ・・・・・・引っ張りやすくなる？」
「そういう事。早く動かすほど、溝にはまる前にどんどん移動していくから軽い力で引っ張れるようになる。それはつまり、摩擦力が低下しているとも言えるんだ」
「逆に、溝にはまっているのに動かそうとしたら一番大変っていうこと？」
「そのだね。動かすのが大変ということは、摩擦力は一番はじめに動かそうとしたときに最大になるって分かるね。つまり摩擦力の正体は、ギザギザの床にギザギザの物を置いて動かそうとしたら、溝に引っかかって中々動かないという単純な話なんだ。だから物と物の表面を磨くほど、摩擦力は小さくなっていく」
「最大摩擦力だとか、グラフの意味って結局その事を言っているだけなんだね」
「その通り。・・・・・・そろそろ、休憩しようか」
「ううん、まだ大丈夫」

彼は怪訝そうな顔をした。
「休憩も大切だよ。休まない方が非効率になる場合も多いからね、十分くらい休もう」
「・・・・・・分かった。じゃあちょっとお手洗い」
逃げるようにトイレに籠もった。彼が悪い訳じゃない、ただ・・・・・・。
勉強をしていない時間が怖くなった、何かをしていない時間が怖くなった。嫌でも、考え事をしてしまいそうになるから。
「お待たせしました」
「いや、全然。それより、大丈夫？　もう休憩しなくて」
「大丈夫。むしろ今の勢いなくしたくないから、はやくやっちゃいましょ」
「それならいいけど・・・・・・じゃあ、次は――」
「――五番テーブルの注文分、終わりました」
「お、早いねぇ。もう特に注文ないし、しばらくは落ち着きそうかな」
「えー、何かないですか？」
「いいよ、無理しなくて。急ぎで何かある訳でもないし」
「そういえば、カウンターの下整理したいって言ってましたよね。私やっておきます、いいですよね？」
「えっ、まぁいいけど・・・・・・・大丈夫？」

「大丈夫ですよ、半端に手持ち無沙汰だとかえって落ち着かないし」
「それならいいけど・・・・・・まぁ、疲れない程度にゆっくりやってよ」
「はーい。さてと、どう分けようかな――」
「――ただいま」
「ちょっと朱鷺子、夕食は？」
「食べてきたから大丈夫ー」
「少し休んだら？　成績だってちゃんと上がってるんだし、ちょっとくらい」
「・・・・・・ごめんね、でも今が大事なところだから。模試が終わったら休むよ」
学校でも、勉強会でもバイト先でも、そして家の中でも。〝何か〟をしようとすればいくらでも出来た、無理にでも考える時間を作らないようにする事が出来た、けれど。
ベッドに入る最中。その時間だけはダメだった。考えないようにといくら思っても、考えてしまった。
すべては、順調だった。
でも、だからこそ余計に〝絵を描いていない自分〟を日に日に強く意識するようになっていた。
最近、絵を描く時間を取れていない。
早く学科を上げないとと奮闘していた頃には余裕がなくて考えなかった事が今、全て

の課題に対策がようやく打てた今、あらわになっている。美術予備校では高評価をもらえたとは言え、それも随分時間が経ってしまった。

今でも時間があればクロッキー程度はやっている。けれどそれさえ、毎日は出来ていない。まだ学科対策に手を抜けないとは頭で分かっていても心は焦りを隠せなかった。

今はひたすら勉強にだけ専念すればいい。そう思って、本当にここ最近は、ずっと勉強ばかりしていた。それで大丈夫だと、大丈夫なはずだと。けれど・・・・・・。理性ではそれでいい、今はそうすべきだと分かっていても、気持ちの中にどんどん小さな不安が増えていった。

もう、ちゃんと紙面に向き合わずにどれくらい経つ？　毎日鉛筆を握っていたのに、今は？

「・・・・・・っ」

ベッドの上で暗闇の中で迫ってくる思考を、必死に振り払おうとした。それでも熱帯夜のせいか寝付けない頭には、中断した思考がまた迫ってくる。

勉強している間は、悩む必要がなかった。

自分が今どの地点にいるか分かるし、どこを目指していて何が残っているのか、何をすればいいのかはっきりしてる。だから自分がまだまだと分かるし、何をしていこうかと楽しみながら考えられる余裕が出来てきた。でも、それでも。出来る程に、余裕が

生まれる程に。

それは〝本来自分がやるべき事〟ではないという想いが、無意識に湧き上がる。

成績が上がっても、絵は一枚も出来上がらない。問題を解いても、ひとつの色も生まれない。知識がどれだけ増えようと、テストの点がいくら増えても、一本の線さえ・・・・・・。

私の線が、ない。

私の絵は私にしか描けない。私の手が動かない限り、絶対に増える事はない。

描いた絵が減る事はない。それなのに、私には何かが少しずつ失われていくような、遠ざかっていくような気がしていた。

〝いやだ、私はまだ、まだ描ける。描きたいのに・・・・・・〟

そう言って泣き叫びたくなった、暴れまわりそうになった。

時折絵描きとしての自分が、心の中で本当に暴れまわった、泣き叫んだ。

〝もういいじゃない、もう許して・・・・・どうして描いてはいけないの？　綺麗になんて描けなくていい、うまくなんて描けなくていい、描けなくなるくらいなら勉強なんていらない合格なんていらない他のものなんて何もいらない！〟

だけど・・・・・・私が閉じ込めた。冷たい表情の私が、涙に顔を濡らした私に告げる。

〝がまんして〟

そして、鋼鉄の扉に手をかける。

扉が閉まる瞬間、床に膝をつきながらも濡れた瞳のまま睨みつける私と、変わらぬ表情で見下ろす私が対峙した。

手を緩める事なく、そのまま扉を閉める。もう、声さえ聞こえなくなる。

そして私は振り返りもせず、扉から立ち去っていく。理性さえ越えた、それは情熱ゆえの冷徹。

今の私はまるで金属で出来たロケットだ。感情さえ、前進する推進剤に書き換える冷たい銀色のロケット。全ての熱を奪いただ一方向に進むだけの、目的以外の何もかも犠牲にしつくす金属の塊。

虚しさにさえ目を閉ざし、ただただ突き進む。それが焦がれた場所へ、重力さえ振り切って到達する方法なのだと信じて・・・・・・。

その日は朝から、強烈な日射しだった。

家から最寄り駅へと続く通学路は、見える建物も車道もあらゆる構造物が太陽光で白く染まっていた。まるでハイコントラストの、白飛びした風景写真みたいだった。

その景色は、見ていると暑さも相まって尚更に現実感を失わせる。

今日が模試の日だという事も、学校に向かって歩いているという事もすべては夢で、

私は幻に向かって歩いているような感覚になる。

ダメだ、今そんな弱気でどうするんだ。今日までどれだけ今日の日の為に頑張ってきたか、思い出さないと。私は絶対に今回の模試で結果を残す。たとえ合格ラインに届かなくても、せめて触れられる為に全力で足掻く。だって、今日さえ終えれば絵が描けるんだから。

今日の結果をもとに、今後の勉強のペース配分が分かると彼は言っていた。基礎は大分ついてきたし、もう試験日から逆算したスケジュールで考えても、そう詰め込まずに済むだろうと。

今まではひたすら、ううん、予定以上にとにかくやれる限りの時間を費やしてきた、急いできた。それはより早く合格ラインに立つ事で、早く絵を描けるようになる為。それは自分に課してきた目標であり、ルールだった。

学科合格出来る実力が、目処が、模試という形でしっかりと確認出来れば、心置きなく絵を描く事が出来る。だからこそ・・・・・・。

「負けるわけにはいかない」

誰にも聞こえないように小さく、けれどはっきりと呟いて、私は改札をくぐった。

ちょうどホームに入ってきた電車が、熱風を連れてきた。それがまるで今の自分に吹いてくる逆風のように思えて、私はにらみ返すように車両に向き合った。そしてドアが

開いた瞬間、誰よりも早く滑り込んだ。

「――終わった。あぁ、終わった。やっぱり模試ダメだよ。ねぇ、朱鷺子も」

楓子の声は聞こえていた、けれど相手をする余裕はなかった。

アナログで届く封筒の結果なんて、待ってはいられない。忘れない内にさっき書いた答えを問題用紙に書き込んでいく。解答用紙はもう回収されているけれど、問題用紙は回収されないからそのまま手元に残っていた。これで自己採点が出来る。

それに彼なら、問題があれば答えがすぐに分かるだろう。手応えなんてものは、分からなかった。彼との勉強会ではじめた勉強法は、常に〝理解〟に主軸を置く。だからその対象をある角度から見たらどう見えるか、を問う問題というものに対しては、こういう構造をしているからたぶんこう見える、という考え方で答えを出す事になる。

過去問を多くやっている訳ではないから、余計に定型的な答えだと確信出来ない。彼の言葉を借りれば〝理論上、そうなるはず〟という答えを書く。それでも、今までこれで成績は上がり続けてきた。そして今日までやってきた分を考えれば、おそらく・・・・・・。

――模試の日の学校は早くに終わるから、事前にいつものカフェで待ち合わせをしていた。自己採点の事も話していたから、彼は問題用紙を受け取ると素早く採点をはじめてくれた。

普段は入れるミルクもシュガーも忘れていたのに、苦手なブラックコーヒーの苦みさえ気にならないほど、私は彼の言葉を緊張しながら待っていた。

「・・・・・・うん。たぶん、行けてる」

それが、彼の第一声だった。

「合格ラインに、全部届いてる。正直驚いたよ、こんなに短期間でここまで」

「やったー！」

思わず声を上げた。

彼の手を取り、何度も同じ言葉を繰り返した。やった、ついにやった。それは本心から出た言葉で、それ以外に浮かばなかった。

あれほど遠くに見えていた、年齢を誤魔化してまでバイトし、塾を掛け持ちしようとしてまで目指していた場所に今、私は立っている。その事実は、頭で分かっている以上に感動的だった。

今まで成果が出ていなかった訳じゃない、それでも、合格ラインに立てた事は大きかった。今まで悩んできた様々が、今クリアされたような、そんな気持ちだった。

それからは舞い上がり、好きなメニューをいくつも頼んだ。彼は少し呆れたように、けれどどこか嬉しそうに、小さな祝賀会につきあってくれた。

次の日は休日だったから、羽伸ばしに出かけた。友達と食べて、遊んで、買い物をし

た。久々に、休むことが出来た気がした。

そしてその翌日、私は朝から自分の部屋で鉛筆を手にしていた。

念願だった絵がついに描ける。モチーフを目の前に置き、道具も全て用意した。真新しい白紙の上に、鉛筆の先端をのせた。

いつの間にか、午前が終わり午後になった。

そこには、描けなくなっている私がいた。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ⅺ　―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

美術予備校に来るのは久々だった。

空は珍しく曇っていて、日射しはないけれどその分上がった湿度がまとわりつく暑さに変わっていた。曇り空を背にそびえるビル群は、見ているだけで圧迫感があり陰鬱な気分になる。湿った熱気が余計に息苦しさを感じさせるから、私は振り払うように入口の自動ドアをくぐった。

道具を用意し、モチーフの石膏像を最後に置く。

今日は自習扱いにしてもらったし、時間帯も相まって私は誰もいない教室を使う事が出来た。やはり家とは違う、絵を描く場として用意された空間だと肌で分かる。描く行為が当然という場、モチーフと一対一になる空間。気が引き締まる。

大丈夫、昨日はたまたまだ。描いていればその内きっと・・・・・、そう考えなが

ら、鉛筆を紙面に重ねた。

昨日、久しぶりに本格的に絵に取り組もうとしたあの時、私は描けなくなっている自分を知った。使う鉛筆も変えていない、手順だって。

けれど、あきらかに何かが違う。描いていけば見えてくるはずの手応えがない、まとまらない。絵に力が、説得力が出ない。自分で描いている絵なのに、その絵から何も感じない。出来上がっていく絵は、要所要所は描き込まれ精度は出るのに、全体は進めるほどにバラバラになっていく。

定規で引いただけの線に見える、機械的に描かれた物体に見える。整っている、けれどそれだけの絵。ＣＧのモデルを事務的にトレースしただけのような、均一だけれど何も感じられない線。おかしい、どうして・・・・・今まではこんな事なかったのに、今までなら・・・・・。

そこまで考えて、ふと思った。

〝私、どうやって描いてたっけ〟

美術予備校に保管していた、以前の自分の絵を見る。自惚れかもしれないけれど、確かに何かの魅力がちゃんと絵に出ている。

描いていた頃は夢中で気づかなかったけれど、あまり気に入らないと思っていたりうまく出来なかったと思っていた絵にも、どの絵にも何かしら感じるものがあった。技術

的には、むしろ、より未熟なところが沢山あると分かる。それでもやはり、明らかに違う。昨日描いた絵とは。

決してやる気なく描いている訳でも、機械的に描いた訳でもない。それなのに・・・・・・。絵の形をした、絵ではないものになってしまう。

悩んでいても仕方ない、感覚を忘れているだけだ。そう自分に言い聞かせた。

けれど、鉛筆を動かしはじめたその瞬間からは、変わらなかった。それは家で起きた事の再現だった。

〝どうして。どうして、描けないんだろう〟

範囲を絞れば描けるかもと思った。でも絞っても絞っても、うまくいかない。ついに石膏像の目の部分だけに絞った。それでも、描けない。

〝嘘、嘘だ。違う、こんな訳ない。きっと苦手な石膏像だからだ〟

そう自分に言い聞かせ、モチーフ入れから白いキューブを取り出す。

感覚を忘れてるだけだ。あんなにやり込んだ静物、出来ない訳ない。いきなりで、バランスの取り方を混乱して見失ってるだけだ。いつも通り、いつも通りでいい。いつものウォームアップで・・・・・・。

「でも、いつものって、いつ?」

不意に言葉が口から漏れる、手が止まる。

〝もうどれくらい、ちゃんと時間を取って描いていない？　どれくらい紙面に向かってない？〟

だめだ、手を動かせ。大丈夫、描いてさえしまえば。

足下から押し寄せるような不安を、必死で押し殺す。紙面には立体の箱が出来てゆく。

けれど・・・・・・。

面の塗りは出来ていく。でも、これじゃまるで紙を張り合わせて作った箱だ。今にもはがれてしまいそうな、薄い紙と紙で出来た頼りない箱。立体としてそこにあるようなキューブに見えない。あんなに得意だった静物なのに、質感が出せない。全てが遠のいて、全身の血が下の方へと下がっていく。

――それからの数日、私は勉強もバイトも止めて、ひたすら絵を描いた。

忘れかけていた描き方の技法や感覚、コツは割とすぐに思い出した。むしろ距離を置いていた分客観的に見る事が出来るようになり、今まで気づかなかった部分やより良くする方法も考える事が出来た。

けれど、それはやはり技法だけの話だった。そこから、先に進めない。いくら描いても、むしろ描く時間が続く程にまとまりは崩れていった。

それでも、やらなければいけなかった。練習量を増やし、とにかく形に出来るように

する。鉛筆デッサンは絵の基礎技術の多くを内包している、だから練習するだけでも様々な絵の技術に繋がるし、描き込む程に説得力が増す。

そうして美術予備校の模試を迎えた頃には、なんとか形に出来るようにはなった。この模試は学校や塾のような勉強的な模試とは異なり結構な頻度で行われる。それは、美大受験生が受験期間中に描ける枚数が限られるからだ。過去問集を反復で解くような事と訳が違う。

一枚を描く時間、労力、試みとそれに対する結果、講評と面談。時間はいくらあっても足りない。だから少しでも早く、課題や問題点があれば明確にし軌道修正しなければならない。間違った認識のまま数時間を費やし描き上げる絵を何日も描き続けてしまっては、単に時間を失うだけでなく受験生の精神も体力も削りかねない。

久々に同じ教室で描く事には少し緊張したけれど、皆のレベルを見て少しほっとした。私より技術的に劣る人が半数だったからだ。大丈夫、なんとかなる。そう思っていた・・・・・・けれど、それは幻想だった。

「画面が、まとまりきれていないね」

「・・・・・・はい」

「前描いてたものは今より技術面では少し劣る箇所があったけど、あの時期では結構良いレベルだったし何よりまとまりがあった。力強かったし目をひいたし。しばらくこ

こ来なかったみたいだけど、何かあった?」
「いえ・・・・・・・」
「そう・・・・・・・とにかく、正直今のままでは厳しいね」
見抜かれていた。
いくら要素の技術があっても見る人が見れば分かる。自分でさえ、自覚があるのだから。
ずっと問題ない前提で考えてきた絵の実技。だからこそ学科対策をずっとやってきたし、ようやくここまでたどり着いた。それなのに、今その前提が崩れた。
埋め合わせる目処も立たない。私は、どうすれば・・・・・・。
それからの面談での会話はよく覚えていない。ただ、帰ってからとにかく描く練習をした。描く程に、崩れていくのが分かった。焦りばかりが募り、内容がどんどん空っぽになっていった。やがて筆が止まった。もう、それ以上描く事は出来なかった。
散らばった紙で埋まったデスクを、ぼんやりと眺めていた。
描けない事自体は、今までにも何度かあった。それらは練習すれば済む課題ばかりだったから、スケジュールさえ立てれば目処は立つから悲観する事もなかった。
けれど今、描けない原因がまったく分からない。これを解決する目処が立たない。講師に聞いても、こればかりは君が考えるべき問題だとしか答えてくれなかった。

いつの間にか窓からオレンジ色の光が射し込んでいた。もう、夕方になっていた。空も同じ色に染まっていたけれど、分厚い雲に覆われていて光源であるはずの太陽はどこにも見えなかった。確かにそこに、あるはずなのに。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ⅻ　―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

その日も朝から強烈な日射しだった。

白く反射する歩道に、私の影だけが動いているかのように感じた。

ただただ歩くだけしかない、目新しい物のないいつもの通学路を歩いているとつい考え事をしてしまう、嫌でも考えてしまう。それはどう足掻いても絵の事だった。

模試の結果を受けたあの日から、数日が経っていた。

あの後いくら描いても、絵は上手くならなかった。むしろ焦る気持ちとは裏腹に、描く程に描ける分量も完成度も下がり、そもそも最後まで描き切る事が出来なくなっていった。途中でもう、失敗だと分かる。続けてももうダメだと分かってしまう。その一枚を描き続けて、修正して、向かう先が分からなくなってしまった。以前にどうやって描いていたか思い出せない。そんなことは意識せずとも、とにかく描けていたし描くの

が楽しかった。ただただ描く内容の事ばかり考えていて、どうやっていたかなんて夢中で考えた事がなかった。

描けていた時と見た目は変わらないのに、私の手は変わってしまっていた。もう、描いてはくれなかった。

「描いて、描いてよ。私の手・・・・・・ちゃんと描いて、お願い・・・・・・・」

呟いても、声はむなしく虚空に消えていった。

何度も絵が描けない原因を探した、理由を探した。けれど、分かる事はなかった。

技術は出来ている、デッサン関連の本を読んでも書かれている事なら。けれど今まで感覚的にやってきた部分は、そもそも勉強したり練習したりして身につけたものじゃない。それが出来なくなった今、どうすればいい？　誰にどんな風に聞けばいい？　仮に聞いたとして、それで本当に答えは出る？　自分でさえ混乱しているのに、何が原因なのかも分からないのに・・・・・・。

その日は珍しく暑さがひいて、空も曇り気味だった。気分的にも室内で過ごしたくなかった私は、彼をオープンテラスに誘った。

「なんだか今日は、元気ないように見えるけど。大丈夫？」

「・・・・・・うん」

それは私の上の空を彼なりにオブラートに指摘する言葉だった。けれど、もうまとも

に勉強する気力はなかった。勉強したところで、絵が描けなければ・・・・・・・。
「少し・・・・・休んだ方がいいんじゃない？」
「時間が、ないの」
「そんな、まだ高校生なんだし。これからいくらでも。それに・・・・・・万が一美大がダメでも他の方法だって」
「・・・・・絵は、どこでだって描けるっていうの？　趣味で描くから、それでいいって」
「・・・・・・」
考えるより先に、言葉が出ていた。
彼は気遣いで言ってくれた、そう分かってはいても。
「人によっては、それでいいかもね・・・・・・」
震える声を、抑えきれなかった。
「でも、違う。私にとっての絵は、違う。私、どうしても描けるようになりたいものがあるの。今感じているものの全てを、感情を、本物の感覚を。たとえ何分の一でもいい、絵に落とし込みたいの。あと何年、何十年先に見返しても、せめて自分だけはその想いを〝再生〟する事が出来るようにって。鮮やかに〝再生〟出来るようにしたいって。もっと言えば、そこに・・・・・・〝本物〟が欲しい。見た途端に、その世界に引きず

り込まれるような、そこに確かに〝存在する〟って思えるような絵を描きたい」
「君が描きたいものは、分かるよ。でも、僕には・・・・・・・分からない。〝そこまでして〟手に入れたいもの？　それに急ぐ理由には」
「そんな風に〝余裕持って〟考えられるのは、確実な方法があるって分かっているからだよ」
　ほの暗い想いが、胸の内からどんどん溢れてきた。隠していたはずの想いが。
「私の目指す場所にたどり着く為の確実な方法なんて・・・・・・・ないんだよ。自分で、探求していくしかない。どうしても、絶対に欲しいものなのに。・・・・・・・美大を受けるのも、それが一番〝確率が高い〟から。私が求める場所に行く方法を、手段を、より多く知る事が出来る。在学中に分からなければ、そのまま残って追い求めてもいいし、独学でやる為の基礎や知識だって美大にいる間に得られる可能性は高い。美大はね・・・・・・手段なんだ。今の私が取れる〝最善〟の選択はこれで、他を選ぶ余裕なんてない。だって・・・・・・そこまでしたって、分からないんだもの。もしかしたら、明日には得られるかも知れない。でも、大人になっても髪がすべて白くなってもそれでも、得られないかも知れない。もちろん努力はする。でも、それでたどり着ける保証なんてない。だから、少しでも可能性を上げたいの。少しでも・・・・・・」
　彼の目を見ればすぐに分かった。理解していない、出来ない。そういうものを見る

目。
「そこまでするものなの？　そういうのは、本当に目指すべきだって思う〝もの〟は、分かるもの？　自分で。目指すべきだっていうのは」
「一時の感情だって言うの？」
「・・・・・・一般論で言えば、そうかも」
「ふふっ・・・・・・分かるよ。だって耐えきれなくなるもの、身体が。その存在を知ってしまった時、そして数パーセントでもそこにたどり着ける可能性があると分かった時、もう目指す以外の選択肢なんかなくなるんだよ。そして、その熱は消えない」
　黒い感情が、どんどん胸の中を塗りつぶしていった。
「ねぇ・・・・・・兄さまは、どうしても焦がれているものってある？」
「それって、やりたい事っていう意味？」
「違う。焦がれている事」
「よく、分からない」
「・・・・・・昔から、欲しくて欲しくてたまらない事。何より大切なもの。それを手に入れる為なら、すべてを賭けてでもって思いながら・・・・・・取り組んでいるもの」
「ないかも、しれない」
「私はね・・・・・・どうしても行きたいところがあるんだ。でも、はっきり分かる分、

そこまでの距離も高さも嫌でも思い知らされる」

皮肉めいた笑みが、口を覆う。

自分でも嫌味だと分かっている、でも止められなかった。

「どこへでも、行きたい場所に行ける強い翼を持ってる〝あなた〟には・・・・・・分からないかもね。私の持っているのは貧弱な翼。一直線に目指して、何もかも賭けても、たどり着けるか分からない貧弱な翼。それでも、これで飛ぶしかない。目指すしかない。あなたに・・・・・・私の気持ちが分かる？　身体の中に、マグマみたいに赤黒く燃える想いがある。いつも、いつだって。情熱なんて優しい言葉じゃ足りない。焦り、焦燥感、不安。もしも、もしも手に入らなかったら・・・・・・それしか、そればかり考えてしまう。遠のけば、苛立ちや自責に苛まれる。ほんの少しでも近づけば、すべてが報われて、楽しくて。空転している時ほど、自覚がある時ほど自分を責める想いが強く暴れ回る。そうやって身体の内側を焼かれながら、それでも手放せない・・・・・・」

高ぶった感情が、言葉を、口調を激しくさせた。

大きくなる声は、もう取り返しがつかなかった。

「言いたいことなんて分かるよ、見え透いてるよ。誰だって、多かれ少なかれそういう顔をするもの。分かるよ考えている事なんて！」

言葉は、とめどなく溢れ続けた。

「冷静になれって？　客観的になれって？　現実を見ろ社会を見ろ将来を考えろ？　そんなこと、他人なんかより余程分かってるよ！　何度も何度も何度も・・・・・・先の不安だって、こんな不安定な事に何もかも賭けるなんて、自分が一番考えてるよ、分かってるよ！　でも・・・・・・分かってて辞められるなら、とっくに辞めてる。諦められたら、どれだけ楽かって。何度も考えたよ・・・・・でもダメだった。だって・・・・・・分かってるから。自覚してるから。これが私の〝やるべき事〟なんだって」

彼の青白い肌が、より青く見える程に顔色が変わった。知った事か。

私はもうとっくに、自分の激情を抑えられなかった。

「あなたにはたぶん・・・・・・分からない」

去り際に言葉をぶつけて、気がつけば私は飛び出していた。彼一人を置き去りにして。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．ＸＩＩＩ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

彼女の、あんな様子を見たのははじめてだった。
勢いよく席を立ち走り去っていく後ろ姿。それはまるで、夢の中の光景のように現実味がなかった。テーブルには、さっきまで彼女が口をつけていたコーヒーカップだけが残っていた。
僕は受け入れる事すら出来ない状況を、とにかく整理する為にすぐにその場を後にした。早くベッドの上で、一人きりになりたかった。けれどそうして急いで帰っても、夜になり朝になっても、僕は一向に受け入れる事が出来なかった。
なんとか落ち着いて考える事が出来たのは、その次の日の夜だった。
〝あなたにはたぶん・・・・・分からない〟
最初に思い出したのは、その言葉だった。

そうしてそれが何よりの核心で、そして〝自分の課題〟である事に僕は気づいてしまっていた。

教授との会話が、ふいに重なった。

もう随分前の事に思えるのに、実際は数ヶ月前の出来事だ。すべては、あの部屋からはじまった。

――フランス　オクシタニー

ＩＳＡＥ　ＳＵＰＡＥＲＯ（航空宇宙高等学院　国立航空宇宙大学院大学）

「・・・・・・入りたまえ」

部屋の中からでも、その声ははっきりと聞こえてきた。年季の入った木製のドアは押せば見た目以上に重く、しかし軋みひとつ立てずに開いた。

声の主はデスク越しにこちらを向いて座っていた。驚く程しっかりと目が合い、思わず僕は目線をそらしてしまう。

「そこにかけなさい」

口調は静かで穏やかだった。それでいてよく通り、何より緊張感を場にもたせる真剣みを帯びていた。

「失礼します」

椅子に座ると、いよいよ真正面で向き合う形になった。
後ろに流された灰色の髪、年齢を重ねていても分かる整った顔。穏やかで、しかし厳格そうな表情。細身ながらがっしりとした体格、背は高く肩幅も大きい。
この人を、こんなにまじまじと見る事は今までなかった。普段は壇上にいる姿を見上げているばかりで、注目しているのは資料や指先、そして説明する声だけだった。
ランダウ教授。宇宙工学科の共通担任であり、この分野では名の通る優秀な科学者。計算機科学の専門家。
目の前に座るこの人について、知っている事はそれだけだった。けれど僕は、教授の講義が好きだった。
その内容は実に明瞭で簡潔な説明の集合であり、まるで百科事典を読んでいるかのごとく整理された美しいものだった。
「急な呼び出しですまない」
「いえ」
「しかし、これから話すのが重要な事であると、少なくとも私は考えている。だからこうして君の時間を割いて来てもらった」
教授は書類の束を取り出した。
「私の講義で毎回実施しているテスト。先日でちょうど十回目となるが、これはその結

果の一覧だ」

このテストは、合格点を取る事自体はそう難しいものではない。しかし評価〝S〟を取る事が難しい事で有名だった。

十五問中、十問目から急に難易度が上がり最後の三問題は解けないのが当たり前だと言われていた。僕はこの〝難問〟に挑戦するのを密かに楽しみにしていた。

「今までこのテストを実施し、十回の内いずれも評価〝S〟を得た者は数える程しかいない。そして」

表情も口調も変えず、教授は淡々と言った。

「航一郎。君は先日、そのひとりに追加された」

僕は内心、とても喜んだ。

たぶん出来ただろうとは思っていたけれど、評価Sが取れるかどうかはやはり不安があったからだ。けれどそれは表情に出さず平然を装った。

「先生のテストは常にエキセントリックで、面白かったです」

「そうかね」

教授の様子はまるで変わらなかった。

本当に淡々と、しかし真剣そうに話す。だから僕はずっと緊張していた。これから何を言われるのか、まるで見当がつかなかった。

「この結果が示す事は何か。それは、君が実に優秀な生徒であるという事だ」
「あ、ありがとうございます」
　まるで当然の原理を説明するように放たれた、教授からの賛辞。
　事務連絡を伝えられているようだけれど、だからこそお世辞や気遣いではない本物の評価であるという実感があった。電流が走るような感覚が身体中を駆け巡った。世界的な科学者に認められたんだ、僕は。
「年齢を考慮すれば、君の才能はまさに非凡と言える」
「そんな。それに先生には、遠く及びません」
「・・・・・・ギフテッド、などという言い方も昔はあったものだ。君はまさに先天的な才能を持つのだろう。だが、私は違う。ただ単に必要な知識を学び、しかるべき努力をしたまでだ。もっとも、費やしてきた労力にはある程度の自負があるがね」
　教授は自虐的な笑みを浮かべ、また元の表情に戻った。
「さて、君の優秀さはこうして客観的に示された。他の講義に関しても、各担当者に聞く限り概ね評価は一致している。この結果に対し、私は君と話す必要があると判断し、今日ここに呼んだのだ。君に伝えたい事がある」
　ここまで褒めておきながら教授の表情はより真剣に、そして険しくなった。
「はっきり言おう。航一郎、私は君の今の状態を危惧している」

僕は言葉の意味が分からず、金縛りのように動くことさえ出来なかった。一体どういう事だろう、教授は何を言っているのだろう。

教授は立ち上がり、窓辺に向かって外の風景に目線を落とした。

「ロケット開発は、血塗られた歴史だ」

「・・・・・・どういう事でしょう」

「君は、興味ある部分のみを見ている。だが、他を見ていない」

こちらを振り向かず、教授は窓越しに続けた。

「かつて、ヴェルナー・フォン・ブラウンは組織的開発によりアポロ計画を成功させた。セルゲイ・コロリョフの設計したロケットは、今でも後継機が宇宙ステーションに向けて飛んでいる。・・・・・・技術者が、あるいは科学者が〝自分は一職員にすぎない〟と言って済む時代はとうの昔に終わっているのだ。能力ある者ならば、尚更」

言葉を句切り、ようやくこちらを向く。険しい表情はより一層深くなっていた。

「航一郎、繰り返すが君は優秀だ。だからこそ心配なのだ。このままでは、ここまま行けば君は優秀な宇宙工学の専門家になる。そこから技術者になるかもしれないし、研究者になるかもしれない。そして部下を持ち、プロジェクトを指揮するかもしれない。この先、忙しくなる事はあれど暇になることはなくなるだろう。しかし、それはじっくりとものを考える時間がなくなるという事でもある。才能ある者が多忙さ故に思考停止す

る、そんなケースや場面を私は何度も見てきた」

その目はまっすぐに僕を見ていた。僕は逸らすことが出来ず、ただ見つめるしかなかった。

「ロケット開発は、あまりにも様々な外部影響により成り立っている。いや、一時的に成り立っていると言う方が正確だ。未だに石油は枯れず、エネルギー問題は私が学生の頃と同じ事が教科書に書いてある。月資源？　火星資源？　違う。様々な政治的世俗的な要因が、現在のロケット開発を成り立たせている。・・・・・・何が言いたいか、分かるかね？」

僕はまた、答えられない。震えそうな口は、分かりませんと声に出すことも出来ない。

「君には、宇宙工学者たる自覚がない。信念がない。君はただパズルのように宇宙工学の課題を捉えているにすぎない。月依存症と揶揄されたヴェルナー・フォン・ブラウンよりもある意味、危険な状態にある。才能・能力がありながら、自身の考えが定まっていない。それを自覚せずに時だけを過ごし、知識や技術ばかりを蓄えていけばどうなるか・・・・・・〝どちらにも転びうる〟。それは実に危険な状態だ。君に倫理観がないとは言わない。しかし、信念なき倫理観は、仮に黒い信念が生まれた時、それもいつでも実行できる力を持った君の中に生まれたとき、どこまで働いてくれるかは分からない」

教授は前屈みになり、より僕の方に顔を近づける。

「航一郎、私は君が優秀だからこそ心配しているのだ。優秀であれば、やがて数多の人間が影響を受ける存在となる。その時、そこに何の意思も理念も信念もない人間がつく事は、最悪の事態に繋がりうる。教育者として、私は何よりもそれを阻止せねばならない。優秀な者はいくらでも育てればいい、たとえ優秀な者がいなくとも進化が一年遅れたからといってどうなる分野でもない。ロケット開発が遅れても、困るのは〝上の人間〟だけだ。・・・・・・それよりも理念も意思もない者が重要な位置につき、それでいて何かに拐かされた場合、それを私は危惧する」

口調も表情も変わらない。それなのに、瞳の中にどこか優しげな表情を感じたのは気のせいだろうか。

「航一郎、君は考えねばならない。君自身の課題を、意思を。これからどうするか、どこへ向かうのか、どこへどのようにして向かうのか。行く手段は、それが決まってからだ。〝何をしたいのか、そして何をすべきなのか〟それを、考えねばならない。君が取り組むべき君にとっての最大の課題が、今まさに君の中にある。年齢も才能も関係ない、君は向き合わなければならない」

僕はただ、目を見開いてそこに座っている事しかできなかった。

何もかもすべてが、世界のすべてが停止してしまったかのように感じた。そこに心臓

の音だけが、大きく聞こえていた。教授は最後に言った。

「・・・・・・いつでも戻ってきて良い、戻って来なくても良い。すべての事務手続きは私がしよう。航一郎、一度考える時間を持ちなさい。焦らなくていい、一時的になら何度逃げてでも、時間がかかっても良い。だが・・・・・・考え、自分の答えを君自身が見つけねばならない」

それから、どうやって部屋を出て家まで帰ったのかは覚えていない。

けれどその日から、僕は僕自身の課題と向き合うことになった。

そしてヨーロッパを離れ、日本に来て高校生の真似をした。探偵の真似をした、彼女の家庭教師の真似をした。けれど、本当の僕は・・・・・・いや、本当に僕が欲しいものは。

「・・・・・・音楽」

自分でも思いがけない言葉が、口をついた。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．ＸＩＶ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

まさか、と思った。

確かに教授は言った。〝何をしたいのか。そして、何をすべきなのか〟けれど、これが答え？　正確には答えの半分だけれど、でもこれが？

まるで実感が湧かなかった。突飛で、突拍子のない答え。そんな、そんな訳がない。ずっと趣味でやってきた、最近になってようやく色々な事を知り始めた程度だ。それなのに、そんなの分かるはず・・・・・・。

〝ふふっ・・・・・・分かるよ〟

彼女の言葉が、頭をよぎる。嘘だ、まさかそんな。・・・・・・待ってくれ、僕は、何をこんなに必死に否定しているんだろう。分からない、まるで分からない。

ははは・・・・・・馬鹿げてる。だって僕は、今まで飛び級もして、大学で宇宙工学

を専攻して、あのランダウ教授にさえ能力も認められて。このまま行けば宇宙工学者にだってなれる、もっと難しい問題だって解決してプロジェクトにも参加出来て、そして・・・・・・。

〝そして、どうなるのだろう〟

僕はそうして、どうなるのだろう。どうなりたいのだろう。分からない、すっぽりとその先が抜け落ちた空白のように、何もない。じゃあ、何のために？　僕は何のために宇宙工学を・・・・・・。

・・・・・・そうだ、違う。

宇宙工学じゃなければ、ダメだった訳じゃないんだ。僕には何でも良かったんだ、だってそれが一番〝難しそう〟だったから。やっていて〝楽しそう〟だったから。でも、何故？　だってそれさえやっていれば・・・・・・。

「退屈せずに、済むから」

口から出たのは、その言葉だった。言った途端、身体中から力が抜けた。そのままうなだれベッドに座ったまま壁に寄りかかった。

「そうか、教授が言っていたのは〝コレ〟だったんだ・・・・・・」

そうだ。僕の動機はこんなにも〝不純〟だったんだ。消去法、受動的でまるで能動的ではない理由だった。義理の両親に負担をかけなくていい、自分でも出来る、自立出来

る、退屈せずに済みそう・・・・・・僕が選んだのはそういう理由だった。

他の分野なら、教授は何も言わなかったかも知れない。でも宇宙工学は人の命をも左右する世界だ。そこにそんな〝弱腰の〟理由で僕は入ったんだ、パズルのように難問を解けば、給料がもらえて自立出来て、退屈せずに済んで・・・・・・それくらいの認識でしかなかった。

教授は気づいていたんだ。

もしそんな〝自覚さえしないままに〟その道を歩み続けていれば、どうなったか。教授の言う通り、僕は宇宙工学との〝親和性〟があった、相性が抜群だった。だからこそ危惧したんだ。人の命を判断する場面に立ち会った瞬間、何人、何百人の生活や安全に関わる物事に直面したとき、倫理観も、それに向き合う覚悟も持ち合わせないままの僕がそこにいたらどうなるか。

教授は、あのテストで僕にその可能性が十分にある事を実感したんだ。きっと要職に就いたり大きなプロジェクトに関わるという事を、楽観的な予測ではなく、このまま行けば確実に迎える未来として悟ったんだ、だから。

でも、客観的に考えれば当然だった・・・・・・。

少し計算が得意な程度の人間が、そんな立場についていたら。

例えば、テレビに映るような研究機関や開発グループの責任者が、そんな人間だった

らどう思うだろう。見ている方は勝手に思う。きっと責任感があって、判断が出来て、信念や理想を持っていて人の生活や安全に細心の注意を払っていて・・・・・・。そんな地位や立場にある人なら当然そうだろうと思ってしまう、そんな保証はどこにもないのに。

そうか、最初から僕には向いていなかったんだ。

でも、じゃあ僕には一体、僕は・・・・・・・。

〝ねぇ・・・・・・兄さまは、どうしても焦がれているものってある？〟

僕には

〝欲しくて欲しくてたまらない事。何より、大切なもの。それを手に入れる為なら、すべてを賭けてでもって思いながら・・・・・・取り組んでいるもの〟

ないよ、そんなの。

これまであんなにやってきた宇宙工学だって、この有様なのに。勉強ぐらいしか自信なんてないんだ、今更音楽なんて・・・・・・・。

〝私の持っているのは、貧弱な翼。一直線に目指して、何もかも賭けても、たどり着けるか分からない、貧弱な翼。それでも、これで飛ぶしかない、目指すしかない〟

僕には分からない、そんな絶対的な物だなんて分からない。ただ〝予感〟があるだけ。

「・・・・・・予感」

じゃあ、今まで他にこんな〝予感〟を感じた事なんてあっただろうか？

ない。

宇宙工学の勉強でも、探偵の手伝いでも、家庭教師でも、人助けでも・・・・・・。明らかに〝性質〟が違う。ずっと〝ある問題を解いていく〟のが主だった、全てだった。でも、僕は・・・・・今の僕には。

「作り出せるかも知れない」

また、心臓の奥がぞくりとする。強烈に身体を震わせる、予感。

僕にも、僕にだって・・・・・たとえひとつだけでも、何かを作り出せるかもしれない。それは今までは意識さえしなかった事。けれど、一度その〝感覚〟を知ってしまった。

毎夜、一人きりのブースで続けたあの演奏。小さいけれど、一つ一つが僕の音だと気づいたこと。そして彼女がたった一人で描き上げた、紛れもない一つの世界・・・・・。よぎった点のような思い出が、線のように繋がる。そして線の先には、予感。

もしかしたら、あんな絵のように、僕も奏でる事が出来るかもしれないという予感。一作でも描ければいい、けれど、もし更にその先に行けるのなら。何作も、何作でも、奏で、そして奏で続けられる未来がもし仮に来る日があるのなら。

より一層大きなぞくりという感覚が胸を打つ、身体を揺らす。背筋から頭に向けて、ビリビリと電流が走った。

確信なんてない。まだ何一つ分からない、決まっていない。それなのに、僕はもう心臓を掴まれていた。

彼女の言葉が、自動再生のように頭の中でまた流れた。

〝ふふっ・・・・・・分かるよ。だって、耐えきれなくなるもの。身体が。その存在を知ってしまった時、そして数％でもそこにたどり着ける可能性があると分かった時、もう、目指す以外の選択肢なんかなくなるんだよ。そして、その熱は消えない〟

気づいてしまった。

僕はもう、彼女の言っていた意味を〝分かって〟しまった。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．ＸＶ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

あれから何度バイト先を訪ねても、彼女に会う事は出来なかった。ここ最近は受験で忙しく、しばらく出れないと言っているらしかった。

ＳＮＳ越しの軽い問いかけにも、彼女は答えなかった。もう何日、彼女と話していないだろう。いつしか当たり前に思えていた彼女とのやり取りが、こんなにも呆気なく消えてしまうなんて思わなかった。

確かに、考えてみればただの家庭教師と生徒のような関係だったかもしれない。それも真似事の。彼女の成績は上げることが出来た、だからある意味僕の役割は終えたと言えるかも知れない。だからこのまま疎遠になったとしても・・・・・・。

そんな、そんな訳がない。

僕は機械的に家庭教師をしていて、彼女は単なるクライアントだった？　違う。

短い間だった。けれど、僕は教える以上に彼女から沢山の事を教わっていた。彼女は色々な事を話してくれた、打ち明けてくれた。彼女と過ごした時間、彼女と共有した時間は決して勉強の事だけじゃない。むしろ、それ以外の時間こそが重要だったんだ、色を持っていたんだ。

勉強する時間以外に交わした雑談、画材店に連れ出された午後、絵を見た瞬間、真剣に話してくれた朝のカフェ、僕の演奏が変わった夜、模試の結果に喜んでいた笑顔、落ち込んでいた表情、飛び出していった後ろ姿・・・・・・。

僕は・・・・・彼女と、何を〝話せて〟いただろう。

勉強は教えていた。けれどどれくらい彼女と〝話す〟事が出来ていたのだろう。自分の事を、自分の考えている事や思っている事を。

彼女は話してくれた。何を思っているのか、何を考えているのか、沢山の自分の事を僕に話してくれた。僕は何を話せていただろう?

僕は、もっと話したい。まだ話せていないことが沢山あると気づいた。

音楽の世界を意識しはじめた事。けれど、まだ決めかねている事。それでも、彼女がいなければ知らなかった世界を今、知りつつあるという事。そして・・・・・僕はやっぱり、彼女の絵が好きなのだという事。

彼女のあの絵を見た時の、あの瞬間の感覚が忘れられなかった。それだけじゃない、

彼女が絵に取り組む姿そのものが、僕はきっと好きだった。真剣で、悩んでどうしようもなく余裕さえなくなって、それでも好きで好きで、愛しくて仕方ないという表情で、絵を、絵の世界を見つめる彼女が、向き合う彼女の姿が僕には眩しく見えた。輝いて見えた。

彼女の絵も、絵に向き合う彼女も好きだった。伝えたい事が、こんなにも沢山ある。伝えたい、彼女ともう一度話したい、話さないと。けれど、彼女は今・・・・・・。

「どうやら、美術予備校にも行ってないみたいだね」

その言葉は唐突だった。

もう夜だというのに、事務所の中はまとわりつくような暑さだった。叔父さんは冷房を設定しながら、何の前触れもなくそう言って話しはじめた。

「どういう・・・・・・いや、そもそも何故知っているんですか?」

「職業柄というやつでね、まぁ出所は言えないが。しかし信頼してもらっていい、そういう情報だ」

「どうして」

「君があれから、彼女の家庭教師をしていた事は知っている。だが、それを辞める理由が分からなかった」

「・・・・・・僕、話しましたっけ」

「探偵じゃなくたって、君の様子を見れば分かるものだ。君は表情には出さないが〝様子〟には案外、素直に出すものだ。もっとも、注意深く観察すれば分かるという話だが。まぁそんな事はいいんだ、彼女と何があったのかは知らない、しかして君の浮かない顔をただ見ているのは私の性に合わない。不用意な事に首を突っ込むべきではないのかもしれないが、知った事ではない。私は自分の欲望に忠実に動く事を信条にしている。無論、倫理的に問題のない範囲でだが」

「これは問題がないんですか？」

「そう判断したから話している。何、これは実に利己主義的なおせっかいだよ。だから安心していい」

どこかおかしな論理なのに、この人の話は何故か信用出来た。

それは話し方や人柄、短い時間だけれど行動を共にしていて分かってしまうことだった。

「・・・・・・叔父さん。間違いなく好きなのに、もうそれが出来ないって思う気持ちって、どういうものなんですかね」

「それは、彼女の絵の事かね？」

下手な遠回しも、この人には通じないのだろう。僕は観念して、彼女からの最後のメッセージを見せた。

「ほう・・・・・・〝あの日はごめんなさい。最近、上手く絵が描けなくなってしまって取り乱してしまいました。これ以上迷惑はかけられません。今までありがとう、さようなら〟か。なるほどね」
「わざわざ読み上げなくても」
「失礼。しかし、随分と他人行儀なメッセージだ。たぶん・・・・・・彼女は本気なんだろうな」
「・・・・・・・」
そうだ、今までメッセージでもずっと親しい書き方ばかりだった。まるで本当の兄妹のように、彼女は僕にずっと。
だからこれは、彼女にとって僕が〝もう他人になる〟と自覚して、書かれた文章だ。
「さて、君はどうしたい?」
叔父さんは唐突に言った。一瞬なんと答えようか悩んだ、けれどこの人にごまかしは利かない。そう思ったら自然と言葉は出ていた。
「僕は・・・・・・彼女に絵を諦めて欲しくない。彼女にまた絵を描いて欲しい。彼女が目指す先に行けるように、少しでも出来る事がしたい。でも・・・・・・僕には分からない。どうして、今まで大丈夫だと言っていた絵が突然描けなくなったのか。あんなに大好きだと言っていた、あんなに楽しそうに話してた絵が描けなくなったのかなんて」

「スランプ、なんて月並みな言葉は使いたくないがね。まぁ、彼女は今描けない状態にある訳か」
「はい・・・・・・」
叔父さんはしばらく黙って、何かを考えるように少し遠くの方を見ていた。
「よしっ。参考になるか分からないが、描くか。部屋も大分涼しくなったし」
「えっ？」
「君は彼女の絵を見たことはあるようだが、絵を描いているところは見たことがないだろう。いや、彼女に限らず絵を描いている場面なんて、映像でさえしっかり意識して見たことはないだろう」
「それは・・・・・・確かにそうですね」
「人間、頭で考えてばかりでは得られない情報もある。実践する事で、やる事ではじめて見えてくる事もある」
「でも・・・・・・僕に絵は描けないですよ」
「あぁ、だから私が描く。何、道具はあるから少し待っていなさい」
そもそも叔父さんが絵を描くという事自体、僕はその時はじめて知った。見知ったはずの探偵事務所のどこに隠していたのか、ものの数分で画材が一通り用意された。
「君はこれから、普段ならまず見る事の出来ないものを見る事になる。すなわち、描くプ

ロセスだ」

叔父さんは画材のレイアウトを準備しながら淡々と言った。

「多くの者は動画や美術教室、予備校などで他人が描くプロセスを見る。だが」

イーゼルの位置を調整すると、腰に両手を当てた。準備は整ったらしかった。

「誰にも見られず、ただ自身の為に絵を描く行為はそんな公の場で見せる事はない。だからこれから、君はいないものとして私は絵を描く事にする。ゆえに、私から話しかける事はあるかもしれないが、君が私に話しかけてはならない。良いね？」

「分かりました」

その事については、何故か自然にその通りだと思う事が出来た。それは彼女の言葉を事前に聞いていたからかも知れない。

〝自分の内臓を・・・・・・晒すようなものなんだよ〟

それは、叔父さんでも例外ではないんだ。いや、きっと絵を描く沢山の人達が同じ想いを抱いている。誰にも本当は見せたくない、見せられない時間。けれど叔父さんは僕にそれを見せてくれる。

「・・・・・・どうして、叔父さんは僕に見せてくれるんですか？」

「そうだねぇ、若い頃なら絶対に他人には見せなかっただろうね。無論、今でも赤の他人に見せるつもりはない」

「じゃあ血縁だからですか？」
「違う、私はそういう先天的要因をむしろ嫌う。私は君という人間と接した上で、君に見せても良いと判断したにすぎない。仮に君が偶然出会ったバイト君であっても私は同様の判断を下す」
「じゃあ何故」
「君の為、君が絵を描くという事の理解を深める為。と、いうのはきっかけに過ぎない。判断の大きな割合を、残念ながら占めてはいない。私があえてこんな恥ずかしい行為を他人の君に見せる・・・・・それは、面白そうだと思ったからだ」
「どういう、ことですか？」
「今まで、本当に今の今までは〝他人なんかに絶対に見せてなるものか〟と考えていた。しかし、ふと思ったわけだ。確かに恥ずかしい、だがそれ以外のデメリットは実はあまりない。君の事だ、その内容を辱めたり言いふらす真似はすまい。だが、その極小さな可能性さえあるとしても・・・・・こんなことは今まで〝やったことがない〟訳だ。それにこんな機会でもなければ、もうこんな事をするなんてこの先ないだろう、たぶんね」
　叔父さんは低い木製の椅子に座り、紙面と向き合った。
「恥も見栄も捨てて、人前にさらけ出したらどうなるだろう。君に今さらけ出したら、何が起こるのだろう。はっきり言って、まったくの未知数だ。そこに私は今少しワクワク

しているのだよ。自分が傷つく範囲なんてある程度生きているとなんとなく検討がついてくるし、リスク承知の自己責任な行為だという自覚もある。つまり悪い方に転んでもたかが知れているんだ。でももし良い方向に転んだら、私は〝まだ知らない何かを知る事が出来る〟かもしれない。そうしたら、私はやろうという判断に自然と行き着いた」

僕には・・・・・・まるで分からなかった。

理屈としては、もしかしたら成り立つのかも知れない。けれどそれを自分の頭で考え、納得し実行することなど果たして本当に可能なのだろうか。

「ははっ。まぁ何、もしかしたらこの先君も分かるかも知れない、あるいはずっと分からないかも知れない。どちらでも大丈夫だ、別段分からなければいけない事じゃないよ。そうだなぁ・・・・・・」

少し考えるように空を見つめてから、叔父さんはゆっくりと言葉を続けた。

「私はね、知りたがり屋なのだよ。とにかくこの世にあるものを、まぁすべては当然無理だが、だからこそ可能な限り知りたいし体験したい。そして・・・・・・理解出来るならば理解したい。学者ならば出来ると思われがちだが、今の時代そうでもない。彼らは〝特定の範囲〟において自由だし知識経験を得る環境を整えているが、それ以外を制限され制約を受ける場が多すぎる。知識経験を得るという行為そのものが目的である

私には、むしろ不自由な選択だ。私は私にとって探偵という選択肢が最善であったと自負している。少なくとも後悔はない。もっとも、親族の中では変人扱いだがね」

そう話し笑う顔は、今まで見たどの表情よりも満足げで自信に溢れていた。まるで名前の通りの人だ、そんな風にぼんやり思った。

「・・・・・・さて。では、そろそろはじめようか」

小さく一呼吸置くと、叔父さんは筆を持った。

下書きなどはなく、叔父さんはいきなり筆に〝色〟を取った。まるで最初から目指すものが見えているかのように。

真っ白な紙面の中央に、黄色い円がひとつだけ描かれた。それは均一に見えて、少し濃淡がある色をしていた。

円を描いた途端今度は黒を取り、円の周囲に沿うようにどんどん描き足していく。黒い弧が、何本も何本も描かれる。そして黒に沿うように灰色も塗られていく。そうして暗く黒い渦のような闇の中に、のっぺりと黄色い円が浮かんだ絵が出来る。

また、筆の色を変える。今度は紺青だった。

さっき描いた黒い何本もの弧の隙間にある、白い紙面が紺青が塗られていく。途端に、そこに夜空が現れる。この絵が夜の空なのだと、深い青に包まれた月夜の絵なのだと分かる。

夜空はどんどん大きくなり、画面の端へ向けて膨張していく。いつの間にか塗る色が空色へと変わり、紙面はみるみるうちに青で満たされていく。四方八方を染め上げ、ただの紙面の空白も段々と夜風と雲の流れに見えてくる。塗りムラに見えた所さえいつしか模様となり質感となり、夜空へと同化していった。

渦のように、月を中心に全てが、彩られる。

中心から外側に行くにつれ、黒く暗い青から明るく薄い青へと変化していく。上下左右の三方向だけ、紙面の縁まで青く塗られる。空色は縁の付近でまた、濃い青へと変化していく。

一通り画面が塗られても、筆が止まることはなかった。

空色、紺青、紫・・・・・それらが交互に、何度も薄く、塗り重ねられていく。

気がつけば、そこに夜空が広がっていた。

そして僕はまた、彼女の絵を見た時と同じように〝絵の景色の中〟に立っていた。雲浮かぶ満月、無音の熱気、月明かりに照らされ動く雲。筆が進む度に夜空はゆっくりと、ゆっくりと動き変化していった。

不思議な時間は、あっという間に終わった。

「・・・・・・よし、終わった。さて、感想は?」

僕は、唖然としていた。どう反応して良いのか分からなかったのかもしれない。こん

な風に、絵は出来るのか。こんな風に絵は描かれるのか。圧倒されつつも、出た言葉は単純だった。

「どうして・・・・・こんな風に描けるんですか？」

「こんな風、ねぇ。正直、どう描こうという意識はあまりないかな」

「じゃあ、何を意識しているんですか？」

「何を描くか、を意識している」

　描いている間中真剣だった表情が、やっと緩んで叔父さんは微笑んだ。

「君の話にあった彼女の絵の事を思い出してね、私も同じようなものを描いてみようと思った」

「よく何も見ずに描けましたね」

「なんの、正解は私の頭の中にある。だから私の頭の中の情景がはっきりしていれば、私の筆もまた迷うことなく絵を描いてくれる。何度間違っても、正しい方向へと修正してくれる。私は絵の専門家ではないが技術はそんなに重要ではないと思っている。例えばここ、線だって色だってよく見れば大分下手な所がある。そこを指摘する者もいるかもしれない、だがそんな事はどうでもいい。大切なのは、私が目指す絵になっているかどうかだ。逆にそれさえ上手くいけば、他は割とどうでもいい。まぁ絵に限らず私の信条だがね、これは」

「・・・・・・この絵は、どんな情景を思って描いたんですか?」

「これはね、私が探偵になろうと決意した夜に見た満月の情景なんだ。こいつは今でも印象強く私の中に残っていてね、何も見ずに描ける。もっとも、私は物を見て描くのがあまり得意ではないんだが」

そういえば、彼女の絵はあの絵本のワンシーンを描いていたものだった。けれど、挿絵の中にあんな絵はなかった。絵の構図は彼女のオリジナルだった。

そうだ、彼女も何か見てそのまま描いていた訳じゃない。

それは本の中で出てくる言葉、進む物語を読んだ読者なら自然に思い描く情景だった。だから見たことのない絵で、本の中にも載っていないのにすぐに絵本のシーンなのだと分かったんだ。

彼女の中には、確かに〝はっきりと浮かんだ光景〟があってそれを絵にしていたんだ。

彼女は、最後のメッセージで書いていた。

〝最近、上手く絵が描けなくなってしまって〟

上手く・・・・・・その言葉が気になった。今まで雑談の中で、彼女から〝上手く描きたい〟なんて言葉は出てこなかった。もし彼女が美大受験の中で〝上手く〟という事に縛られすぎているのであれば、描けない原因はもしかして・・・・・・。

一つの有力な仮説が立った。

けれど、どうすればいいかが分からない。そもそもどうやって彼女に伝えれば・・・・・・・。

「参考になったかね？」

「・・・・・・・はい、ありがとうございました。たぶん、彼女は」

叔父さんに仮説を説明するのは自信がなかった。それは仮説そのものというより、言いたいことが伝わるかという心配だった。だってこれは、とても感覚的な事でもあるから。

けれど、叔父さんはすんなりと理解を示してくれた。絵を実際に描いているからこそ、僕以上にそういった事が分かるのかもしれない。

「でも、僕は彼女になんて伝えればいいのか」

「ふむ・・・・・・これは、あくまでも私見だがね。北風と太陽っていう訳じゃないが〝君の為だ、君が心配だ〟と言われるのは心地良いものだが、それで本気度を伝えるのは難しいものだ。・・・・・・私は、こう考えている。相手を思い通りにする事なんか、中々出来やしない。思い通りに出来ると思って接すれば、むしろ相手にその傲慢さを見透かされて事態が悪化する場合さえある。

だから自分の意思を、偽りのない意思を示すなんていうのは結局〝自分が考え、思っ

ている事を話す〃事でしか、出来ないんじゃないかと私は思っているんだ。
相手に伝わるかは分からない、しかしそれでも〃私はこう思っている、こうして欲しいと考えている、何故ならこうだから〃としっかりと自分の言葉で〃話す〃べきだと思っている。今のところ私達には、自分の気持ちを伝える為のテレパシーなんてものはない、残念ながらね。けれど、出来る事はある。〃伝えようとする姿勢を見せる、自分の想いを話す〃事だ。後は・・・・・相手に託すしかない。受け取って、それにどう反応し何を思うか。それは結局相手次第だ。それでも、それを踏まえた上で、自分の想いを〃話す〃べきだと私は思う」
自分の想いを、伝える。
そうだ、今思いついた仮説だけじゃない。彼女に会って話したい事が、伝えたい事があるんだ。
けれど・・・・・・僕は同時に思い出してしまった。それが僕にとって、もっとも苦手とする行為だという事を。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．ＸＶＩ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

事務所を出てからは、真っ直ぐに家へと向かった。もう遅い時間になっていたし、考えも整理したかった。ベッドの上に仰向けになり、部屋の灯りさえつけずに窓から漏れる夜光と白い天井を見つめていた。

夜の青い明るさは、自然と頭を落ち着かせてくれた。僕は改めて、さっき思いついた〝仮説〟を整理した。

彼女のスランプの原因が、もしも〝上手く〟という事に縛られすぎている事だとしたら。だとしたら、どうすればいいだろう？

彼女が見せてくれた絵は、きっと彼女の中にはっきりと存在する風景を描いたものだ。あの絵を描いている間、きっと彼女は〝上手に描こう〟なんて意識はなかったはずだ。だってそんな風景はどこにもなく、けれど確かに彼女の中には存在していて、彼女はそれを描こうとしたはずだ。それだけをただ、描こうと夢中だったはずだ。

同じように、彼女が迷わずに〝上手く描く〟なんて意識さえ忘れる程の〝何か〟があれば。彼女はまた、描けるんじゃないだろうか。それが僕の仮説だった。

けれど、じゃあそれは何だ？　何が彼女にそう思わせる？　なるべく彼女が意識しているものがいい、彼女にとって一番と言えるくらいのモチーフや風景が。

彼女との会話を慎重に思い返す。彼女の話の中に、彼女が話してくれていた事の中に何か、何かあれば・・・・・・。

〝スカイデッキ〟

思い出した。そうだ、六本木ヒルズのスカイデッキ。

彼女は休憩中や雑談の中で言っていた。あの景色をいつか、自分の体験したままに描きたいと。あの景色を見ながら描けたらと。けれど、当然そこにイーゼルを置いて描くなんていう事は出来ない。せいぜい屋内の天望回廊でスケッチするのが限度だ。しかし彼女は、そうではなくてスカイデッキの上で、絵の具によってあの景色を描きたいと言っていた。

〝あの夏空も、夕景も、あそこで見える色々景色すべて。そして、景色を見た感覚さえも、絵に描けたらどんなに面白いんだろうね〟

いつか勉強も受験も落ち着いたら連れて行ってあげる、そう彼女はいたずらっぽく笑っていた。調べると、確かに見事な光景がスカイデッキからは見えるらしかった。そ

こから撮影された写真の中の空は、美しい青のグラデーションがどこまでも続いているかのようで圧倒されるものがあった。

もしも、あの光景が彼女にとっての一番なのだとしたら。試す価値はあるはずだ。いや、たぶんもうこれしかない。

どうすればいいかは分かった。けれど・・・・・決心はつかなかった。

誰かに想いを伝えるのは、どうしてこんなにもこわいのだろう。伝える瞬間を想像しただけでおそろしくなってしまう、諦めてしまいたくなる。背を向けて、何も言わない状態へと帰りたくなる。

今考えている事全てが、実は単なる思い違いかも知れない。おとなしくしていれば傷つく事なんてないかもしれない。彼女と話す、話さなければならない。その事実が目の前に迫った途端、実感した途端、ネガティブな考えが頭の中を渦巻く。

昔からそうだった。人と直接触れ合う事は、僕にはまるで太陽に触ることのようだった。それは暖かいものだと分かるし触れたいとも思う。けれど、僕にはその温度はあまりに高温で耐えきれない。僕の身体は、きっと耐えきれない。だからずっと何かを〝介して〟人に関わるようにしてきた。それは勉強や、難題解決や人助けや・・・・・そういったものを介して誰かと関わってきた、彼女とだって。

けれど、今回ばかりはもうそれが通じないと分かっていた。彼女に話すべき事は何か

を隔てたり、何かを通したり介したりせず、自分そのものの想いや行動で彼女に関わり、そして伝えなければならないものだと自覚していた。

ここまで来て、もう誤魔化すことも出来なかった。

やるしかない。いや、やるべきなんだともう僕は決めていた。それでも、やっぱりこわい。もしも・・・・・もしも拒絶されたら、会ってすらくれなかったら、今よりも悪い事態へと向かってしまったら・・・・・。

不安が、僕の中に押し寄せる。それでも決断する勇気が欲しかった。

自然と、机の上のヴァイオリンが視界に入った。そういえばあの夜もこんな風にベッドの上で悩んでいた。

気晴らしにでもなればいい、とにかくこの不安から遠ざかりたい。そう思いながら、気がつけばヴァイオリンを手に取り、またブースに入っていた。扉を閉め、なるべく何も考えないようにして、とにかく今演奏したいと思う曲を弾こうと弓を構えた。

そうして弾きはじめた音は、まるで震える僕の声のようだった。不安定で、音程さえよろよろと蛇行する。

しばらくは、まるで自分の心境だと自虐していた。あぁ、やっぱり僕の動揺はこんなにも手にまで伝わるんだ。考えないようにといくら思っていても、音には予想以上にはっきりと現れる。最初の内はそんな風に思いながら弾いていた。けれどその内に

段々と、その音を聴いている内に気持ちが変わっていった。

〝違う、そうじゃない。そんな音じゃないはずだ、そんな演奏じゃないはずだ。

確かに僕は動揺している、不安を抱えてる。でも・・・・・こんな音聴きたくない。

僕の音は、違う〟

弓に力を込める。手が震えぬよう、息さえ止まりそうになりながら次の節を弾く。

「――っ」

瞬間、震えはぴたりと止まり、力強い響きへと変わった。

そうだ、もっと震えを押さえて、もっと強く。弓を引く毎に、音色が変わる。

震えなんかに消されない。むしろそんなものかき消して、もっと出したい音があるんだ。

テンポは早くなり、音は強さを増す。

そうだ。走れ、走るんだ。何にも惑わされずに、ただまっすぐに走るんだ。駆け抜けるんだ。

高音が轟く、空気が熱せられながら震えているのが分かる。それでも、僕はただ一直線に弾き続ける事しか考えなかった。

すると不思議な事が起きた。

振るえそうになる所程、僕は意識して強く弾いていた。それはただ力を込めるのでは

なく、不安さえやりこめる強い感情で、圧倒させるように弾いた。それしかないと瞬時に思えたから。

そうして弾いた音は、何故かとても暖かくはっきりとした音になった。まるで誰か別の人が奏でたかのような、力強い明瞭な音をしていた。弓が別の意思を持ったかのように、時折出る音色だった。

自分の演奏に混じるそれを、注意深く拾うようにしばらく聴いていた。意識して聴く程に、その音は奮い立たせようとしてくるような、励まされているような音に聴こえた。

僕には分からなかった。どうしてだろう、どうしてこんな不安な今、こんな音が混じるのだろう。しかも、僕はこの音を知っている。

聴いている内に、自然とその答えは分かった。

・・・・・・そうだ。これも、僕の想いなんだ。怖いからと、蓋をして目を背けようとしていた、本当の想いなんだ。

失敗したらどうしよう、拒絶されたらどうしよう。そんな思考にさえ、どうでも良くなる程にこの想いは僕の中で燃焼し続けてる。消えてなんかいない。伝えたい事があるんだと、伝えたい事はこんなにも強く今、僕の中から湧き上がってくるのだと。僕の流れに確かに、そんな気持ちがあるんだ。

分かった途端力強い音はなお加速し、奏でる音の中で占める割合を増やしていく。自

分の中から引き出された感情を観察するように自覚しながら、僕はただただ弾き続けた。

音楽は、不思議だ。

どうしてこんなにも沢山のものを受け入れてくれるのだろう、教えてくれるのだろう。姿も形も、触れる僕の状態によってまるで違う働きをする、変化する。知る程に果ての見えない広大なものだ。

僕は、もっと触れることが出来るのだろうか、知る事が出来るのだろうか。僕も・・・・・彼女のように〝触れても良い〟のだろうか。何かを描く、という世界に。

演奏を終え、ヴァイオリンを置く頃にはもう、迷いはなくなっていた。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ・ＸＶＩＩ　―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

彼に最後のメッセージを送ってから、もうどれくらい経っただろう。

バイトも受験が忙しいと言って、行かなくなってしまった。美大を受ける事なんてもう出来ないのに。

あれからもずっと、絵は描けない。描けないなら美大を受けたところで意味がない。勉強だってバイトだって美術予備校だって・・・・・・何もかも、絵の為だった。それなのに、肝心の絵が描けないなら何の意味もない。何の役に立つ？　全て、もう無意味なんだ。

空虚が、胸の中を襲う。けれど何が出来る？　今の私に、何が・・・・・・。

こんな時、泣く事が出来ればどれ程楽だろう。素直に謝ることが出来ればどれ程良かっただろう。けれど私には、どちらも出来なかった。

時計の針は、もうすぐ十二時を指そうとしていた。

夏の日射しに満たされた教室には授業の声だけが響いていた。けれどそれさえも、どこか遠い所でぼんやりと鳴っているサイレンのように思えた。聞いたところで意味なんてない、一度そう思ってしまうともはやどんな説明も意味のないノイズにしか聞こえなくなった。

もしかしたら・・・・・・もしかしたら絵の事でこんなに悩まなければ、もっと他の人と同じように普通に過ごして、普通に生活して、そうすればもう身を焦がすようなこの日々から、楽になれるんじゃないか。そんなことを何度も考えた。

けれど今、絵を失った今。どんな事も取るに足らない事に思えてしまう。それらは薄い色しか持たない、私を動かす程のものにならない。私の日々は、こんなにも何も起こらず、色もない透明なものになってしまった。机の上に開かれた真っ白なページのようになってしまった。

私は、これからどうすればいいのだろう。どうすれば・・・・・・。

突然、マナーモードの振動がポケットから伝わった。

ＳＮＳや大抵のアプリはもう通知が来ないように設定していた。だからせいぜい、メールか電話くらいでしかスマホが震える事はない。通信会社のメールか、間違い電話だろう。けれど、もし両親だとしたら。こんな平日の昼間なんて、何かあったのかも知

れない・・・・・・そう思ってこっそりと画面に目をやった。

けれどそれは両親でも、それ以外に想定していた誰でもなかった。

そこには、彼の名前が表示されていた。

どうしてメールアドレスを・・・・・・そういえば出会って間もない頃に教えていたんだった。けれど結局、すぐにＳＮＳでやり取りしはじめて一度も使う事がなかった。

勉強会をはじめたころは、そんなに頻繁にやり取るする事になるなんて思わなかった。勉強会を本当にしてくれるかさえ分からなくて、してくれたとしてもどうなるかなんて分からなかった。あの頃は互いの距離感もまだ、分かっていなかった・・・・・。

きっと、私がＳＮＳに返信しなかったからだろう。それでついにメールアドレスに送ってきたんだ。

少し、開けるのを躊躇した。けれど、もう無味乾燥な授業を聞く気にもなれなかったし、昼休みにもまだ数分はあった。メールならＳＮＳのように既読がつく事もない。中身だけ確認して、返信するかどうかはそれから決めよう。そう思った。

緊張する指で慎重にメールを開く。タイトルも添付ファイルもなく、本文が　一行だけ書かれていた。

〝校庭にいる。お願いだから、来て〟

いるって・・・・・・まさか、ここの？

急いで窓の外を見る。窓の外にはいつもの見慣れた校庭が広がっている。けれど、誰も居ない。作業着姿で掃除用具を持った用務員の人が、植木の横にいるだけだった。どんなに目をこらしても、他には誰もいなかった。

冗談？　嘘？　それとも間違いだろうか。でも・・・・・彼はそんな事はしない。なら、どうして・・・・・・。

考えつつも、目線はずっと校庭の中を探していた。どこかに、彼がいないかと。

ふと、違和感に気づいた。校庭にいる唯一の人影、用務員の人がさっきからずっと動いていない。帽子を被っていてよく見えないけれど、掃除用具も足下に置いたまま動こうとしない。そして・・・・・・こっちの方を見てる？

十二時を告げるチャイムが鳴り、先生が教室から出て行った。私は急いで教室を飛び出した。

「・・・・・・ハァ、ハァ。なんで、ここにいるの。それに、どうしてそんな格好」

木陰で息を切る私の目の前には、作業着姿の彼がいた。

「他に方法が思いつかなくて」

「あなたらしくないね」

久しぶりに会ったというのに、口からは皮肉が出てしまう。きっと彼に負い目があるからだ、これは身を守るのに必死な防衛反応。そんな自分の醜悪さが、自分で嫌になっ

た。

「今から、もっとらしくない事を言うよ」

彼は、何か思い詰めたように緊張した面持ちで一歩私に近づく。

「一緒に来て」

そう言った途端、彼は私の手を引いて走り出した。

ニュースでは今日は今年一番の猛暑日になると言っていた。ビジネス街も遠いから、いよいよこんな日のこんな時間に表を歩いている人なんて他にいなかった。

けれど、アスファルトが白く反射する道を私達ふたりだけが走っていた。

「ちょっと、どこ行くの？　それに、なんで走って」

「どうしても、君に見せたいものがあるんだ。時間がない、悪いけど急ぐよ」

「・・・・・・あなたが、こんな悪い人だなんて知らなかった」

「僕もだよ」

訳も分からず走らされていた。どこに行くのだろう？

分からない、何も分からない。普通なら不安になるだろう、強引に振り切ったっていい。でも・・・・・・何故だろう、胸が高鳴っていた。

さっきまで抱えていた、不安や空虚が今はない。

これじゃまるで逃避行だ。あの教室から、あの憂鬱からの。ドラマや映画だってもう

ちょっと脈略がある、なのにこんないきなり連れ出して、行く先も告げないで。

こんなのおかしい。そして、それが何故か可笑しかった。

理由なんてなくて、強いて言えばその訳のわからなさに私はいつの間にか笑っていた。走りながら笑っていた。

ずっと、下を向いて歩いていたから気づかなかった。考え事をしていて、見ていなかった。いつの間に街は、空は、こんなにも綺麗で清々しい夏の景色になっていたのだろう。一筋の飛行機雲さえ、あんなにもくっきりと白い。

線路脇の道を走っていると、警笛が背後から横切っていった。熱風が背中を押す。なんだろうこれは。

こんなにも暑い日射しの中で、ただ手を引かれて走っているだけなのに。真夏の青空を視界に満たして、誰も出歩かない街中を駆け抜けるのがどうしてこんなにも気持ちいいのだろう、清々しいのだろう。

忘れていた。こんな感覚、いつ以来だろう。眩しさに引き寄せられるような、ただただ気持ちに素直に行動する楽しさ。

「・・・・・・ねぇ、もう怒らないから教えて。どこに行くの？　まさか海まで行くなんて言わない？」

「どうかな」

「じゃあ、どこに連れて行ってくれるの？」
「この街の特等席」
　途切れる息の合間にも、彼はいつものシニカルでのらりくらりとかわす答えを返してきた。もしかしたら、緊張を隠す為にわざと意識して振る舞っているのかも知れない。理由はわからないけれど、なんとなくそう感じた。
「いいよ、付き合ってあげる！」
　だから私も、また彼の前にいる時の私に戻る事にした。

「ここって・・・・・・」
　たどり着いたのは六本木ヒルズの入口だった。
「ふふっ、何企んでるの？」
「見せたいものがあるんだ」
　彼は休む間もなく中へと入っていった。
「ねぇ、そっちは行き止まりだよ。エレベーターもフロアもあっち」
「大丈夫、こっちで合ってる」
　そのまま人気のない従業員用のドアの前まで連れて行かれた。
「ほら、やっぱり行き止まり」

「普通はね。でも今は違う」
　彼の手には、いつの間にかカードキーが握られていた。そして暗証番号まで入力すると、彼は中へと手招きした。
「どうしてそんなもの持ってるの？」
「秘密」
　従業員用の通路を早足に歩きながら、彼は答えつつ時計を気にしていた。こんなに余裕のない姿を見るのは、もしかしたらはじめてかもしれない。
　エレベーター前に着くと、彼は迷わず最上階へのボタンを押した。
「ねえ、ここからどこに行くの？　展望台ならわざわざこんな裏から行かなくたって。そんなに入場料がかかる訳じゃ」
「違うよ。言ったでしょ、〝特等席〟に行くって」
　言い終わると同時に、エレベーターのドアが開いた。
「・・・・・・ここって、もしかして」
　エレベーターを降りると、強い風と金網に囲まれた通路が出迎えた。以前にも似た光景を見たことがある、スカイデッキだ。でも、ここは。
「今は工事中じゃなかった？　行けるのは展望台までのはずじゃない？」
「普通はね」

彼は少しいたずらっぽく言った。けれど、それが余裕から来るものではなく、むしろない余裕をなんとか作ろうとしているやせ我慢に見えた。そうだ、少なくとも私の知っている彼はこんなに無茶が出来る性格じゃないはずだ。

けれど、私に〝何か〟を見せる為にわざわざここまでしているんだ。彼は何を見せたいのだろう、工事中でまだ見れないはずのスカイデッキ？　それとも他に・・・・・・。

従業員用の通路は、とにかく風が強かった。たぶん吹き抜けになっているから、上の方よりずっと風が強くなってしまっているんだろう。

煽られる髪をなんとか押さえながら、彼の背を追って私は通路を抜け階段を昇った。

「わぁっ！　すごい」

そこにはどこまでも広がる真っ青な空があった。三六〇度どこを見回しても遮るものはなく、遠くの方には山や、そして海さえ見えた。そこには青の世界があった。

「こっちに来て」

彼はヘリポートのある中央部分を横切り、端の方へと歩いて行った。そこは一段下がったところにある展望デッキだった。そして。

「これって・・・・・・・」

そこには一脚のイーゼルが置かれていた。それだけじゃない、キャンバスも絵の具も筆も、椅子さえも。描く為に用意したといわんばかりの画材がそこに準備されていた。

それは夢にまで見た光景だった。

彼は覚えていたんだ。私が、ここの風景を描きたいと話していた事を。

「でも、私・・・・・・・」

「僕・・・・・・見たいんだ。君の描く、世界の続きが」

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．ＸＶＩＩＩ　―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

彼は言った、私に描いて欲しいと。

「君が、自由に描いた絵が見たいんだ。どんな絵でもいい、上手く描けたかどうかなんて関係ない。君が描く、この風景が見たいんだ。この場所は明日まで誰も来ない。だから君が描きたいだけ、描きたいように描いて欲しいんだ。君の世界を」

なんだろう、これはなんだろう。

晴れ渡った写真のような風景があって、まるで見事な青空が広がっていて、水平線さえ遠く彼方に続いていて。

夢にまで見たこの場所で、時間も人も気にせずに描ける。画材だって揃っている。嘘みたいな、けれど今目の前に確かにこの状況は存在している。

風が吹いた。

前髪が持ち上げられる。ついつられて、上の方を見た。空に浮かぶ雲が、ゆっくりと動いていた。

そうだ、描かなきゃ。

この景色もこの場所も、いつまでもありはしないんだ。写真にも映像にも映らない、けれど確かにここにある〝今〟を、私は・・・・・・描きたい、描かなきゃ。

脊髄反射するかように頭が、身体が動いた。髪留めで後ろ髪を縛る。じっとこの風景を見つめる。

この景色は、ここにある今は何なのか。目を皿のようにしてにらみつけるように、あるいは水晶のように、瞳の中へと取り込む。離さないように、そしてきちんと私の中に存在させるように。

クロッキー帳に思ったことをどんどんメモしていく、小さな構図の下書きを交えながら、一枚の紙面に焼き付けるイメージを固めていく。

そう迷うことなくイメージは決まった。けれど、はたして描ききれるだろうか・・・・・・。

違う、迷う必要なんかない。描けるかどうかじゃない、描けばいいんだ。描いていけばいいんだ。間違ったらなおせばいい、修正すればいい、迷う必要なんてない。だって、ここに描きたいものはもうこんなにもはっきりと色鮮やかに、私の中にあるのだから。

あとは早く、早く焼き付けないと。この景色が変化する前に、終わる前に、流れていってしまう前に。消えてしまうその前に、描かなければ。

筆を執る。色に迷いはない、塗ってダメなら直せばいい。何度だって、いくらだって。細かい修正なんて気にしてはいられない。だって描くべきものをまず描く事こそが、何よりも重要なのだから。

筆は今日まで描けなかった事が嘘のように、鮮やかに踊った。

描く程に、次の色の〝正解〟が分かる。

違う、綺麗だけれどこの部分はこの風景じゃない、そうだここに近づけたいんだ。そんな風に、描く度に瞬時に〝描くべきもの〟が分かる。

ものすごい早さで、真っ白なキャンバスに空が浮かび上がる。けれど全然足りない、もっともっと早く。絵の具さえ早く乾いて欲しい、次の色を、次の質感を。描ききらないと、まだまだ描きたい事はたくさんあるのに。

風景を描くのに、日が暮れるまでの数時間なんてまるで短いものだ。しかも刻々と時間は変化していく。それでも・・・・・今は描き続けるしかない。

ただただ走るように描く、描く、描くんだ。

やがて、周囲からどんどん余計なものが取り払われていく。

キャンバスと、向き合っている私だけになる。そして絵の具や筆や、描いている腕さ

えも意識しなくなる。ついに私の姿さえ見えなくなって、ただ目の前に描いている絵と、描くべき風景だけがそこに残る。

そうだ、この感覚だ。ここまで極端になった事は今までなかった、けれど同じようなものをいつも、どこかに感じていたんだ。

絵と、自分の意思と、描きたい世界。これだけがあれば、それで絵は描けるんだ。これだけで今、絵を描いているんだ。

あの時、思っていた事思い出す。

〝描いて・・・・・・描いてよ。私の手、ちゃんと描いて、お願い・・・・・・〟

そんな風に思っていたけれど、原因は私の手じゃなかったんだ。自分自身だったんだ。絵は、私自身が描くんだ。小手先じゃない、技術でもない。上手く描こうっていう思いばかりが先行して、描くべきイメージを持てていなかった。何を描きたいかが薄れていったから、描く対象を失った手は動くべき動きを、引くべき線を、描くべき絵を失っていたんだ。

こんな質感にするにはこう描く、じゃない。やりながら探るんだ。描こうと思っているものに適切な〝絵〟は何かを。あるいは、それ以上になってくれる線は、塗りは、質感は、色の深度は。

何が適切か、何が光を放つか、何が訴えるものになるのか。

〝私の中にあるもの〟と、常に照らし合わせながら紙面に焼き付けていく。修正し、より高いところへ、自分が思っている以上のところへさえ昇っていける、羽ばたいていける。

そうだ、上手さだけ求めて、小手先に頼って描こうとしていた。

〝絵〟として描きたいものが自分の中になかった。それは別に、簡単な事で良かった。こんなものなら格好いい、こんなものなら面白そう。それで、それだけで良かったんだ。

たとえ最初はぼんやりと描き始めても、途中のどこかで〝そうか、この絵はこんな事を描ければ良さそうだ。よし、描こう〟と思う物を見つけて、そこを中心に全てを描くように切り替えていた。

最初から心に決めた物を描くか、描くべきものを探りながら描くか。

そういう描き方をしていたから、描くものを探る事はあっても〝上手く綺麗に描けない〟ことなんて、それまでは悩まなかったんだ。

対比は、世の中にある〝上手な絵〟の基準なんかじゃなかった。私の中にある〝描きたい物〟だけが、基準だった。

形のない、けれど確かに存在する物。それを紙面に焼き付けていく。それが私の、私だけの絵だった。

泣きそうになった。けれどそんな暇はない、描くんだ。描くんだ描くんだ描くんだ、私の絵を。私が描きたい絵を、私の手で。描ききらなきゃ、描いてみせる。

やがて、空の色が如実に変わりはじめた。水平線からオレンジ色のグラデーションが立ち上ってくる。なんとかギリギリ、青空の部分は描けた。

けれど、ここからだ。夕景の空がどんどん迫ってくる時間だった。一度染まりだした空は、恐ろしい早さで表情を変える。

追いつけるだろうか・・・・・・いや、描ききってみせる。

闘志にも似た不思議な力が身体中に満ちていた。ここまで来て、引き下がる事なんて出来ない。

やがて日射しの色もオレンジ色を帯びる。立ち並ぶビル群が、光を受けて陰影を帯びる。夕景が、迫ってくる。

燃えるような鮮やかな夕陽が浮かぶ。昼間とは違い、驚くほど膨張して見えた。

いつの間にか、ほとんど雲のなくなった空に煌々と浮かんでいる。それはいつまでも眺めていられるような、吸い込まれそうな光景だった。

けれど私は、必死にそれを振りほどきキャンバスに向き直る。描く手を止めてはならない、この瞬間さえも描かなければならないから。

そしてすべての地平線が染まった。赤く、赤く燃えている。地表のすべてが煌々と燃

えている。真上の空の色も青から透明な鈍色に、そして紫へと変わった。そして、その赤と紫の間。地表と空の間に、神々しい黄金色の層が出来る。それはため息の出るような美しさだった。

ずっと、ずっと見ていたくなる。そして見る程に、まるでこの時間は永遠なんじゃないかとさえ、錯覚させられる。全ては静止していて、何もかもがこの空に包まれて動かない。燃える空から、目が離せなかった。

やがて、黄金の層が赤の中へと消えていく。最後の花火のように、いっそう地表は赤く燃え、そして紫色のカーテンに追いやられるようにどこか彼方へと沈んでいった。

やがて、夜になった。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｓｏｄｅ．ＸＩＸ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

彼女が描き始めてから、もうどれぐらいの時間が経ったのだろう。
空の色は、驚くほど早く変化する。描けるチャンスは、時間は限られている。
それでも彼女は描き続けた。筆が走る、キャンバスの中に世界が浮かび上がる。しばらくは描いている彼女の顔を見ていた。けれど段々、それは無意味なのだと気づいた。
今彼女は、キャンバスの上にいる、筆の先にいる。描く線を操る意思だけが、今の彼女なんだ。だから僕も一緒にキャンバスを見つめていた。
似ている、けれど異なる色で何度も同じ所が塗られていく。そうかと思えばまったく白紙だった場所に、いきなり鮮やかな色が一筆書きのように塗られていく。
僕は絵の描き方の知識なんてない。けれど、きっと彼女はもう、いちいち描き方なんて気にしてはいないのだろう。どうすればこの景色をキャンバスに落とし込めるだろ

う、焼き付けられるだろう。考えているのはきっとそれだけ。
塗られていく鮮やかな色が、何故かそうだと教えてくれた。
やがて日が沈み、空が夜の色へと変わった。彼女の絵は、完成しなかった。
間に合わなかった・・・・・・そう落胆しかけたけれど、彼女の筆は止まらなかった。
迷うこともためらう事もなく、彼女は夕焼けが見えていた時とまるで同じように、描き続けていた。
そうだ。今目の前になんてなくても、彼女の中に確かにまだあの景色はあるんだ、存在しているんだ。彼女はそれを見ながら描いているんだ。
僕は嬉しくなった。彼女はもう、目の前のモチーフを上手く描けるかなんて悩んではいない。正解は、彼女の中に出来ているんだ。
空はとっくに暗くなっているのに、キャンバスの中では燃えるような赤色がどんどん明るさを増していった。
いつの間にか、頭上には満月が昇っていた。そして絵は完成した。
最後の一筆を入れると、彼女はしばらくそのまま呆然としていた。
その姿はキャンバスの上に、絵の上に移していた自分の魂を、ゆっくりと身体に戻しているかのようだった。
緊張していた肩が落ち、姿勢が徐々に砕け、そして最後に表情が戻った。

それは、少し困ったような笑みだった。
まるでずっと探していた物を、ようやく見つけたかのような表情だった。こんなところにあったのか、仕方ないなというような笑いと、大切なものがついに見つかったという安堵の混じった顔で、彼女はそれからもしばらく、愛おしそうに絵を眺め続けていた。
僕はきっとこの先、この彼女の表情を忘れる事はないだろう。そう、思った。
彼女はしばらくそうしてからゆっくり立ち上がると、こちらも振り向かずに言った。
「よしっ、休憩」
建物内に戻ると、自販機横のベンチに二人で座った。
ここが従業員用の通路だからだろう、他に人影はなく照明の光だけが白く満ちていた。
静寂の中で、自販機の駆動音だけが響いていた。
僕は彼女が話し出すまで待った。そうしなければいけないような気がした。
「描けた・・・・・私、描けたよ」
どこか遠くを見るような目で、彼女は言った。それは僕に話すと共に、彼女が彼女自身へと語りかけてもいるようだった。
「うん」
僕は、それだけ言った。それだけしか言えなかった。

「・・・・・・ありがとう、本当に」
「うん」
「ごめんね、ごめんなさい。たくさん」
「うん、大丈夫」
「・・・・・・ありがとう」
言葉を探す僕らの会話は、傍から見ればつたなく聞こえたかもしれない。けれどそれで十分に通じていたし、それで良かった。
「・・・・・・音楽院に、行こうと思ってるんだ」
「パリ？」
「うん」
「そっか。行くんだね」
切り出し方も唐突で、脈略もない。それでも彼女にはすぐに通じた。
「私の、絵の影響？」
「そうかも。ううん、きっとそうだ」
「少し、嬉しいな」
「・・・・・・美大は行けそう？」
「もう行かない理由ないよ。たぶん、もう大丈夫」

「そう・・・・・・良かった」
「ありがとう」
「僕は、ただきっかけを作っただけだよ」
「それでも、やっぱりありがとう。そのきっかけがなかったら、私、どうなってたか分からない」
　彼女は微笑んだ。それだけで、痛いほど感謝の気持ちが伝わってきた。
「ねぇ・・・・・・どうして、決心できたの。音楽の世界に行く事」
　答えは決まっていた。
「・・・・・・触れても、いいんだって分かったんだ」
「音楽の世界に?」
「描く事に。形のないものを、描く世界に」
　そうだ。僕はもう触れていい、触れられる。何かを描くという世界に。
　そしてヴァイオリンさえあれば、いや音楽さえあればどこへでも、どこへだって行ける。そんな気がしていた。
「これで、さよならかな」
「・・・・・・」
　そう、そうだった。彼女なら分かる、分かってしまう。

一度決めたら、一刻も早く動かなければならない。それは競争だとか、他の人はもっと昔から専門教育を受けているからだとかではない。

自分と、描く事。それだけを意識した時、自然と考える事だ。

だってこれから起こる様々な事を、描く時間が、技術が、自覚した瞬間から欲しくなる。より描く為に、もっと表現出来るようになる為に。躊躇する時間さえもったいない。

「大丈夫。私はもう、大丈夫。だから行って」

「・・・・・・・うん、うん」

「身体、気をつけてね」

「・・・・・・・ありがとう」

その言葉が、どれほどの勇気になっただろう。誰かに話すなんて今がはじめてだった。

けれどそれ以上に、一番のきっかけとなった彼女から、そう言ってくれる事が力をくれる。

不安がないと言えば嘘になる。それでも、歩き出すのには十分だ。不安ならその分やればいい、迷っても間違えても。何度も修正しながら、歩いていけばいいんだ。そして彼女の絵のように、彼女のように、いつか僕も描けるようになれれば。

「ねえ、最後に見ない？」
「何を？」
「星」
　都会の空では、数えるほどの星しか見る事が出来ない。けれど、この建物内にはプラネタリウムがあった。
　僕らは従業員用のエレベーターで下りて、何食わぬ顔でチケットを買い、一般用のエレベーターで再び展望台に向けて昇った。さっきまでいた場所のすぐ近くに、こんな風に遠回りをして行く事がなんだか可笑しかった。
　入口に入った瞬間から立体空間として映し出されたプラネタリウムは、まるで建物の中だという事を感じさせなかった。
　透明な暗闇の中に浮かぶ、星の海。そこにいきなり投げ出されたような感覚で、僕らは途方もなく広がっているようなその空間をゆっくりと歩いた。
　中央に浮かぶ天の川は本当に白い光の群で、それが立体投影だと分かっていても、つい近づいて手をかざしてしまう。気づけば二人とも同じ行動をしていて、僕らは思わず笑い合った。
「好きなんだ、ここ。不思議だね、本当の星空なんてほとんど見たことないのに、ここのプラネタリウムに来るとつい入っちゃう。どうしようもなく惹かれるんだよね。そし

てずっと見ていたくなる」
「・・・・・・うん、分かるよ」
目の前に、遠く遠くまで浮かぶ光の群。物理的には床も、壁も天井もあるはずなのに、僕らは確かに星空の中にいた。その光景は、本当にずっと見ていたくなるものだった。
「世界中のどこにいても、ここでは見えなくても、星はずっとあるんだよね」
「うん」
「じゃあ、安心だね」
脈絡のない会話、それでも伝わる意思。
たとえ近くにいなくても、地上のどこかにお互いはいる。その事実だけがあれば、もう僕らは大丈夫なのだろう。きっと、もう僕がいなくても彼女は、大丈夫。
うぬぼれかも知れないけれど、そう分かった。
「気が向いたら、連絡するね」
「どうやって?」
「どうにかして」
それはこれから絵で名を馳せるという彼女の意気込みなのか、メッセージを載せた作品をいつか描きあげるつもりなのか、あるいは・・・・・・。そんな詮索はもう、無粋なのだと分かっていた。

僕らはこれから、それぞれが別のロケットに乗り込んで、それぞれが目指す星へと向かう。お互いがきっとまっすぐに飛ぶ事で精一杯で、それでもどこまで飛べるのか、近づけるのかは今は分からない。

それでも、もしも目指す星にたどり着くことができたなら。その時に多くの言葉はいらなくて、ただ〝たどり着いた〟とだけ伝えるメッセージを送れれば、それでいいのだろう。

きっと〝どこかにたどり着いた時〟にだけ、彼女は僕にだけ分かるメッセージを打ち上げるのだろう。

だとしたら、僕も少し楽しみになってきた。たとえどこにたどり着こうとも、その時には僕も、こっそりと彼女へのメッセージを打ち上げてみたい。

そんな楽しみを僕らは抱えて、ロケットに乗り込む。

僕らはこれからの自分達の未来を見つめるように、星の海を眺めていた。

彼女と過ごした時間は最後まで眩しくて、色鮮やかだった。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｌｏｇ．Ｉ　―Ｋｏｕｉｃｈｉｒｏｕ　Ｐｈａｓｅ―

白い光が、視界を満たした。
閉じていた目は、眩しさに萎縮する。ゆっくりと、まぶたを開ける。
同時に、低い駆動音と小さな飛行音が聞こえてくる。ぼやけた視界が整うにつれ、ここが飛行機の中だった事を思い出す。
側面にある楕円形の窓からは、雲の海と水平線が見えていた。そしてその先の空には、どこまでも澄んだ青が広がっている。もう雲の中を抜けたのだと分かった。
段々と、加速度的に思考が覚めていく。記憶が蘇る。
フランス行きの飛行機に乗った事、向こうでもこんな風に晴れた夏空だった事、搭乗して間もなく眠ってしまった事。
時計を見ると、もう7時間は眠っていた事になる。

「――ふっ」

ぬるくなってしまったコーヒーを、少し飲む。まるで日本に来た時の再現みたいで笑えてしまう。けれどもう、あの時のような憂鬱や杞憂はない。

自信がある訳じゃない。けれど迷いの中から抜け出した今、そんな事は些細な事だった。

出来ないならやればいい、失敗したら修正すればいい。彼女から、そう教えられた気がする。

何より、僕はもう触れていいんだという自覚を持てている。描く世界に触れていいんだという自覚を。

スマホを取り出し画像を呼び出してみる。彼女の絵は、手のひらの中でも変わらず鮮やかだった。

見るたびにきっと、いつでもあの時の空を思い出させてくれるだろう。見た瞬間、あの時間に、あの場所に連れて行ってくれるだろう。

僕もいつか、こんな絵のような演奏がしたい。

彼女のように、形ないものを形に出来るように、表現出来るようになりたい。

まだまだこれからで分からない事だらけで、でもだからこそ、勉強していくんだ。そして目指すんだ。

これから1年程は、パリ音楽院を受ける為に勉強する事にした。受かるかどうかは分からない、でもまずはそこからやってみようと思う。

なるべく負担をかけないよう、奨学金や色々な制度を調べた上で義父にその事を相談してみた。僕の珍しいわがままを、義父は何故か静かに喜んでいるようだった。

教授からの課題に、まだすべて答えられている訳じゃない。その半分、つまり〝やりたい事〟をようやく見つけられた状態だ。けれど、今はそれで良いと思える。

・・・・・・いつか、〝やるべき事〟を見つける日も来るかも知れない。それはたぶん、楽しい事ばかりじゃない。

彼女だってやりたい事だけを追っていたら、あれほどに葛藤する事なんてなかったかもしれない。僕は・・・・・・僕ももし、同じような葛藤を迎える事になったら、その時僕は耐えられるのだろうか、どうなってしまうのだろうか。

分からない、今はまだ何も。それでも、あの頃に比べれば、日本に来る前に比べれば僕は確実に変化していて、確かなものを手に入れる事が出来た。

何もかもが、きっとこれからはじまる。そんな気がする。

僕のこれからも、生活も、音楽や描く事に向かい合う日々も、そして・・・・・・葛藤さえも。

すべては、まだ始まったばかりみたいだ。

窓の外には、日本に来た時と同じ澄み切った青空が広がっていた。
僕はもう、しっかりとその光景を見据える事が出来ていた。

小説　真夏の空席　Ｅｐｉｌｏｇ．Ⅱ　―Ｔｏｋｉｋｏ　Ｐｈａｓｅ―

「――それでは改めまして。神谷さん、受賞おめでとうございます」
「ありがとうございます」
「まず今回の受賞を受けての、ご感想はいかがですか」
「はい、素直に嬉しいです。今回の絵は、モチーフも含めて個人的な思い入れの強いものでしたので」
「ご自身の過去の体験を描いている、との事でしたが。しかし人の姿を描かなかったのは何故でしょうか」
「そうですね・・・・・・これは、私の学生時代の体験を絵にしたものです。しかし、ご覧の通り学校の教室に机と椅子がある、それだけの絵にしています」
「他の生徒達はぼかされてはいますが、全員椅子に座っていますよね。タイトルの通り、

空席が中心にひとつ描かれている。しかしこれは果たして〝体験〟なのでしょうか？

その時神谷さんが見ていた風景なんですか？」

「いいえ、私はこの絵のような教室の風景を実際には見ていません。・・・・・・お恥ずかしい話ですが、私は一度だけ学校を抜け出した事があるんです。けれど、抜け出して体験したあの午後のすべてが、今の私を作ってくれました。あの体験があったからこそ、今の私があると思うんです。確かにその時私は教室にいなくて、けれど何度も、私は自分のいない教室を、空席になっているであろう自分の机を思い浮かべていました。抜け出した午後だけではなく、美大に入り絵のお仕事をはじめた後も、何度も。もしあの時に抜け出さなかったらどうなっていたのだろうと。あの出来事が、常に今のすべてにつながっている。この風景は、そんな様々な想いと共に私がずっと〝思い描いてきた〟風景なんです」

「実際には見ていない、けれど確かに存在し、そして何度も思い描いた風景。という事ですか」

「はい。まぁ、そんな背景は絵を見ただけでは分からないですよね」

「むしろすごいのは、その背景がまったく分からない状態で見ても伝わってくるものがあるという事ですよ。机と椅子があるだけの窓辺の風景、窓の外まで白飛びした写真のように何も描かれていないので、タイトルを見なければ季節さえ分からない。極端に情

報が絞られているんです。・・・・・・それなのに、臨場感というか、絵を見た途端本当にそこにいるような気にされてしまうんです。そして、何故か様々なものが伝わってくるんです。私見ですが、私にはそれが〝感情〟に思えました。おそらくそれは、その光景を〝見ている人物の感情〟なのだろうと。様々な、特別な感情を抱きながら見た光景、それを絵にされているんだなと」

「言葉にされると、少し照れますね。でも、汲み取ってくださってありがたいです」

「正直、最初絵を見た時にすぐそう思ったんですけど、私だけかなと思っていたんです。でも、違った。審査員の皆さん、言葉は違えどほとんど私が感じた事と同じ事を仰っていました。これだけの方々に〝絵として描かれていない事〟を伝えられる絵があるんだと、衝撃を受けました」

「ありがとうございます。私は今まで〝形にはない、けれど確かに存在するもの〟を、表現する事を追求してきました。今回の絵は特にそれに特化というか、ストイックに挑んで描いたものです。手応えはありましたが、どこまで伝わるか不安な部分もありました。なんとか伝わってくれたみたいで、今は胸をなで下ろした気分です」

「伝わりましたよ！　でも、形にはないものという表現の通りで、中々この〝絵を見て感じた感覚〟が言葉では説明出来なくて。審査員の方々や評論の言葉を読んで、なんとか今言葉にまとめましたけど」

「それでも、全部じゃない気がしてます?」
「はい。分かります?」
「意図的に、そんな〝言葉でも文章でも〟表現出来ないものを、けれど確かに絵を観た人の中に存在するものを意識して描きました。だから言葉にならないのはある意味、意図した通りとも言えて、私としては嬉しい限りです」
「インタビュアーとしては歯がゆい限りですが・・・・・・」
「あはは、失礼しました。でも、絵に限らず創作表現ってそういう〝形に残せないものが見た瞬間や聴いた瞬間に、いつでもまた体験が出来る、再生出来る〟というとても特別な性質を持っていると思うんです。すべてそうでなきゃいけないとも思いませんし、私の作品のすべてでそれが出来るとも限りませんが。やはり私は、それを大切にしていきたいんです」
「今のお話を伺って、ようやく答え合わせのように絵を見て感じていたものの正体が分かった気がします。言葉には出来ませんが」
「それでいいと思います」
「はじめてこの絵をみる方々にも、是非この〝感覚〟を体験いただきたいですね。本日は、ありがとうございました」
「ありがとうございました」

第三回　新日本美術芸術院賞

作者　神谷朱鷺子

作品名　真夏の空席